

云はなければならぬ、さうだらう、所が、其大事變の元の起りはと尋ねると、これア又案外だ、久平の娘にお磯と云ふのがあるさうだね」と、睨むやうに俊郎を見る「あります」俊郎は明かに答へて少し肩を聳やかし加減になる「む、あるだらう、さうして、其娘と源八と云ふ若い漁師とが、以前から不都合な關係があつたのだらう」「え、さうださうです」事實が左様であるから、斯う答へるより外無い「すると、いくら風儀の亂れた田舎でも、むづか十七か八でそんな事をするのだから、決して品行のいゝ娘とは云へないね」先四方の逃路を断つて、俊郎を袋の鼠にして置いてから、一擧手の下に取つて抑へやうと云ふ老巧の責め方である

「源八と云ふ無法者が、暴力を用ひてお磯の處女を破つたのです、さうして、それを手始めに、始終お磯の弱點に投じて、彼女を脅迫したのです」と、俊郎は口惜しくつて悶氣となる

照明は、俊郎の顔色から物の云ひやうを観察するやうに見上げ見下して、にたりと打笑み「まあ其ナイゲーでも注いで飲むが、今迄水に漬けさして置いたのだから、温くならない中に」と、極めて穏かに云つて、又も意味ありげに俊郎を見やる「え、有難う」と、咽喉が潤いて引ツ著さうに覺えたので、一本口を抜いて大きな洋盃へ注ぎ、ぐいぐい息をも繼がずに引叫けた「叔父さん、葉巻を一本下さい」と、箱へ手を延ばした時、急に俊郎は涙の突掛けて来るを覺えた、此葉巻を久平へ呉れたら、喜んで喫んだ時の事を思ひ出し、そゝろに亡き人が戀しくなつたのである「幾本でも取つて

置くが、いゝ」「ぢやア、少し頂いて置きます」平生の仕來りと覺しく、大握みに七八本取り上げて、ぐつと衣籠へ捻込む

照明は、加減を測つて又口を開いた「お前は、ちと其お磯と云ふ娘を買取つて居るやうだが、そんな事は、不品行な女の口實で、ちやんと型に嵌つた云草だよ、兎に角、何と云ひ逃れたつて、事實不品行だから仕方がない、どんな理由があつたつて、纒か十七か八で、嫁入前に情夫を持つて居ると云ふは、決して褒められた事實ぢやアあるまい」と、柔かい中にも、ちよいと鋒鏑が露はれて來た、かう來られると、俊郎にも大に云ふべき事がある、一場の根本的大議論を試なければならなくなる、けれども、此次には何が出るか、それを見てから陣立をしても遅くあるまいと、黙つて俯向になり敵の矢に頭を越さした、照明は得たりと圖に乗つて「それがどうだ、久平源八二人の者を殺した原因はお磯で、而も、お磯とお前が汚い關係を結んだと云ふ疑ひの爲に、源八が、お前とお磯を殺して自分も死なうと覺悟したのださうぢやアないか、權でお前を打つたけれども、手元が狂つて外れた、残念だがもう是迄と、お磯を抱込んで波を浴つたそれを久平が追掛けて、水底にお磯を取返したが、新聞にもある通り、水の中で格闘して、遂には二人共に生命を失くした、一口に云へば斯うだが、己は十分に精しく知つて居る、俊郎！これア由々しい大事だぞ」と頻りに眉根を寄せるのである「僕ア、お磯とそんな關係なんか無いんです」と、俊郎は不平の面を膨らす「む、關係はあるまい、己も關係が

あるとは信じない、苟くも、最高の教育を受けた上に、上流社會に位置を占むべき便宜のある身がそんな漁師の娘の、爹無子を孕むやうな下劣極まる女と」「えッ」「何者の胤とも知れない子を孕むやうな漁師の娘と、お前が醜的関係を結んだと云ふ事は、鎌倉の海が干涸になつたと云ふ事よりも信じ悪いと云ふのさ、だから、誰も、お前が漁師の娘と関係があるとは云はないが、関係があると源八に疑はれて、其爲に人間二個を殺す大事變を生じた事實は、どうしても蔽はれないから困る、お京迄もあぶなく冥途の道連れにされやうとしたさうぢやアないか」「叔父さん、お磯が子を孕んだなんて、誰がそんな事を申しました」見る／＼俊郎の額に痙攣筋が動き出した

其六十五

お磯が子を孕んだと云ふことは、お磯自身の外に誰も知る者が無かつたのを、お磯の口から俊郎へ漏らしたので、之を知る者が二人になつた、更に、俊郎がお磯を自棄の墮落から救ふべく、打明けて喜代子へ相談したので、お磯の腹部の秘密を知り知る者は、お磯、俊郎、喜代子の三人と殖えた、其代り、此三人は固く秘密を守つて、三人の外は、何人にも漏らすべからざる筈である、然るに、こゝに照明は無論三人の外者である、此秘密を知つて居るべき筈の無い者である、之を知つて居るからは、三人の中誰か、告げたものと認めなければならぬのである、其誰かも亦確かに目指すことが出来

る、それは喜代子である、喜代子以外の人たるを得ないのである、「お磯が子を孕んだなんて、誰がそんな怪しからんことを申しました」と、重て唇を破つた時には、俊郎の目が險しくなつて居る
感情の馳するに任しては、随分格に外れた事もやるが、面と向つては同意を表して蔭へ廻つて人の計畫の妨げをするやうな、そんな陋劣な真似は、縦令鉛の熱湯を注がれたつて仕ない男である、随つて、そんな真似をする奴を見ると、自分の身に係る事でもなくつても、飛び出してぶん撲りたくなる、泥棒よりも、人殺よりも、何よりも此奴が憎い、世の中にこれ程憎むべく、これ程卑むべき事はないと思つて居るのである
然るに、今、自分の未來の妻と定まつて居る婦人に、自分が何より厭ふ所の劣悪極まる真似をされたのである、劣悪極まる真似をされた結果の事實に出ツくはしたのである、今迄は、虚榮を生命とする女、趣味を解さない女として、面白からず思つて居ただけであるが、もう斯うなつては、面白からず思ふどころの段ではない、嘔吐が出る程厭で、蹴殺してやりたい程癪に障る、もう、そんな奴は未來の妻でも何でもない忌々しい、誰がそんな奴と一生の苦樂を共にするもんか、今迄は、多少喜代子に遠慮もし、重きを置きもした爲に、お磯の事迄も打明けて相談に及んだのであるが、そんな劣等動物と判つた以上は、これつきり、面も見まい、言葉も交すまい、随つて、自分の事は今後自分で仕やう、玉井の家の厄介になることも是迄と仕やう、次第に依つては此後照明の顔も見まいと、覺えず握

る拳に力を入れて、食込むやうに膝に押着けた

「は、誰が云つたつてい、ぢやアないか、さうでなければアさうでないでもない、又、そんな事はどうでもいいのさ、お前は今それより大事の問題を考へなければならぬよ」照明は苦も無くふはりと外して、あべこべに俊郎が目と鼻の間に太刀先を閃めかして見せるのである「けれども、けれども」と狼狽の氣味「何がけれどもだえ、好く考へて呉れなければ困る、第一、漁師風情に、そんな情婦を横取したと云ふやうな疑ひを受けるさへ、お前の大名譽ぢやアあるまいか、況して、其疑ひが本になつて、人間を二個迄殺したとなると、益々お前は考へなければならぬまい、加之、お前迄も殺され掛けた人間で、云はゞまア僥倖に免れたものだ、するとどうだらう、これア、お前の身の上には掛る大問題なばかりぢやアなく、己に取つても亦小い問題とは云へないぞ、確りして貰はなくつちやア困る」「けれども」「まだけれどもかえ、大概にして呉れないか、お前の潔白を見せる上から云つても死んだ二個の漁師の顔を立てる上から云つても、一日も早く秋谷を引上げて、二度と足踏をしないのが、お前の取るべき唯一の手段だよ、彼所の別荘は、妙な行掛りから格安で譲り受けて、半分新しく建て直したんだが、御用邸が近所にあると云ふだけで別に取柄がないものを、何時迄持つて居たつて仕様がなから、これを機会に、欲しいと云ふ者があつたら譲り渡さうと思ふ、お前に限らず彼所へはもう誰も遣らない」「けれども叔父さん、縦令あの別荘に居られなくつても、私には今暫く秋谷を

去られない事情があるんです」何時迄も「けれども」を守つて、とうとう押通して了つた、これで、俊郎は尋常に名乗を上げて照明に戦を挑んだのである、で云ひ切つて、覺悟の唇を一文字に結んだ

「なに事情!!事情と云つたやうに聞えたがさうかえ」と、照明は自分の耳を疑ふやうに、眉を擧めて頭を傾けた

其六十六

「え、事情と申しました」俊郎は眞直に顔を擧げて照明に向つた、何所迄も楯を突かうと云ふ態度である「どんな事情だ、聞かう、聞かして貰はう」と、照明は焦々膝を揺り出す「聞いて頂きますやう」と、俊郎は怯む色を見せない「さア、云へ」「云ひますとも、お磯が懐妊した事實の有無は別問題として、其噂が叔父さんの御耳へ入つたに就き、私は喜代さんへ云ふべき事があります、此所へ御呼びなすつて下さい」「いや、それは順序を顛倒して居るだらう、其事情とか己の臍に落ちない中は、喜代と言葉を交して貰ふまい」「さうですか、それならそれでも宜しい、ぢやア、簡明に其事情を述べませう、被仰る通り、私とお磯とは醜的關係があるだらうとの疑ひの爲めに人間二個を殺したんですから、私は却つて、それに責任を負はなければならぬと思ひます、其善後策を講ずるのが、私の責任だらうと思ひます、いや、斷乎としてさう信じます、それに、久平が末期に臨んで、お磯の事は確

と頼むと遠言して目を瞑りましたから、お磯の爲に將來立ち行くやうな方法を講じてやらない中は、決して秋谷を去らない覚悟です」

照明は黙つて俊郎の顔を睨み詰めて居たが、言葉の終るを待兼ねやうに、押冠せて嗚鳴り着けた。「自分の勝手ばかり通せるお前の身の上か」これを聞くと、俊郎もぐツと込上げた「人間としての自由は、誰にも束縛させません」「うぬ、誰の御蔭でそんな生意氣な口が利けるやうになつたと思ふ？」「それア叔父さんの御蔭です、けれども、御蔭だの思だのと角立てる段になると、私もつひ記憶してゐる事が云ひたくなります、叔父さんと拙父との關係はどうです、父の御蔭で成功なすつたから、父に對する恩返しのために、私の身を引受けて下さつたんだと、繰返して被仰つたやうに覺えて居りますが」態と沈著いて、冷笑ふやうな調子でやつて退けたのを、俊郎は自分ながら不穩當の態度だと思はないではないけれども、破れかぶれの場合になると、無理でも逆でも構はず、遮二無二自分の主張を貫くのが俊郎の氣質である、喜代子に對して此上無い悪感を懷いて居る所へ持つて来て、照明が何時に無く思だの御蔭だのを振廻し、理も非も無く此方を押潰さうとするのが癪に障つて堪らず、態と打突かつて喧嘩を賣るので、不穩當とは元より十分に知つて居る、どうせ、久平の知己に報つて、何所迄もお磯の後楯とならうとする以上、一度は玉井家と收まりの著かない衝突を來すべき場合を豫定しなければならぬから、之を機會に奇麗薩張と片を付け、男らしく一本立になつて、土臺下から新しく築き固

めやうとするのである

果して照明は眞赤に憤り立ち「失敬な、それは貴様の口から云ふべき事ぢやアないぞ」と目をむき出した「不幸にして、私は叔父さんの御言葉に随ひ兼ますから、御厄介になるのも是れ限りと致します、是迄の御恩は口や舌ぢやア述べ盡されません、いづれ其中報復の機會があります」何だ、不幸にしてだ、ちと日本語を稽古しろ、不幸にしてとはそんな所に使ふ言葉ぢやアないぞ、貴様は勝手な眞似をしてそれでよからうが、喜代をどうする積りだ」「何方へでも嫁入さして下さい」「む、いゝ覺悟だ、さうして貴様は、漁師の娘の養無子を孕んだ奴と一緒に居る氣だらう、そんな根性の腐り果てた奴は、娘を呉れるどころか、此方から絶交する、折角墮落するがよい」「一緒に居るやう、何所迄腐り果てられて、何所迄墮落されるかと試しても見ませう、けれども賤しい漁師の娘が養無子を孕まうが孕ままいが、立派な貴方の氣を揉むべき問題ぢやアないでせう、それよりは貴方の御娘さんに、養無子を孕む以上に下劣な事が無いかと、好く調べて御覽なさい、左様なら、これで御暇にします」丁寧に御辭儀をして突と立上る「うぬ」と拳を握つて片膝立てたが「死んだ貴様の親父に面じて免して遣る」と氣色を直して、元の胡坐に復つた

俊郎は、氣持がいゝやら、濟まないやら、これから先の運命が氣遣はしいやら、譯が判らなく混亂した頭腦で、前に來た所と覺しい廊下から楹側を、足音荒く立出でると、一間の簾戸を開けて半身を

現はす喜代子と端無く顔を合はした「おい立派な令嬢、お磯が爹無子を孕んだと云つたのは、若し己の冗談だつたらどうする、そんな、人の疝氣を頭痛に病むよりは、自分が犬の子か猫の子でも孕んで居ないかと、早く産醫に見て貰へ」嘔鳴り着けて、したゝか唾を吐き掛け、底が抜ける程の大笑ひを殘して玄關に出た

其六十七

海から来る涼しい風が額の汗に浸込むを覺えた時には、激昂した頭の血が半ば收まつて居る、氣が附いて見ると、こゝは御用邸の前通で、築地の角に在る板のほとりと判つた、俊郎は秋谷へ引返す前に、坂の下の星月樓へ赴いて、今朝手紙を呉れた岡部川潮の二友を訪ふべく、今行きつゝあるのである

氣が鎮まると共に、照明に對しての言語舉動が亂暴に過ぎたのを後悔する心が起る。縦令照明が自分の世話をするのは、亡父に報る爲で、自分を愛し自分を重んずるからでないにもせよ、自分として受けた恩は確に恩にちがひない、恩に被せられたつて報酬を求められたつて、是非も無いと諦めなければならぬのである、それを快く思はないなら、今後世話にならずに獨立獨行する策を講ずると共に、今迄受けた恩を報する道を開き、さうして、感情を損はずに別れるがよいので、強いて衝突して

手を切るにも及ばなければ、亦衝突すべき理由も無いのである

かう考へて來ると、何故自分はあんなに喧嘩面で照明に對したかと、我と我身を怪む心になる、それも、喜代子が固く口止めた秘密を照明へ漏らした爲に、腹が立つて堪らなくなつたからである、喜代子が未來の妻にあるまじき態度を取つて、自分の信任に背き、最も卑むべき手段の裏切を行つた爲に、憎くつて癪に障つて堪らなくなつたからである、けれども、今となつて考へると、何もそんなに夢中になつて憤る事はない、そんな腐つた奴なら、破れた草鞋を打棄るやうに打棄ればよい筈である、笑つて關係を断てばよい筈である、喜代子が憎いからとて、世話になつた照明に迄突掛るべき理由は無ないのである、こんなに道理を辨へて居ながら、何故自分はあんな無法な事をしたのであらうと首を括りく歩いたが、忽ち「むゝ」と首肯して「馬鹿め」と自分の横面を一つ張り著けた、何ののかんと下足を云ひながら、底をたれば矢張り喜代子に引著けられて居たのである、十分喜代子の心を占めて居るものと自惚れて、内々得意で居たのである、運命は一步々をお磯の方へ傾きながらも、實際お磯を取つて喜代子を捨てやうなど考へたことは無く、喜代子と自分とは矢張り喜代子と自分とにして置き、お磯との事は又其儘に自然の成行に任せて、唯だ或る境を越えないやうに氣を附け、愈々詮じ詰めて兩立しない場合となつたら、又其時の風が吹きたらうぐらゐに、極めて漠然たる虫のいゝ考へを持つて居たのである、それが思ひも掛けず喜代子に裏切られて、自惚の鼻がしたゝかに折

れた器量の悪さから、詰り、口惜しまされに亂暴な事を云つて、自樂に事を壊したものと、始めて明かに自分の心の働きの筋道が判つて見れば、今更自分に對して耻かしくつて堪らない、馬鹿と罵つて自分の横面を張り著けなければ、收まりが著かない

もう、口惜しいとも思はなければ、腹も立たない、喜代子も無ければ、玉井の家も無い、今日只今から、自分は獨立獨行の人間である、随つて、煙草一本吸ふにも、自分の汗と交換して得た金で買はなければならぬ、お磯の後桶となるにも、これから自分の身を立てるにも、二本の腕より外に便る物がない、氣を引締めて大に奮發しなければならぬ、心細いやうでもあるが、亦愉快でもある「なアに辭アないさ」と、思はず獨語の聲を高くすれば、それに答へるやうに、がちやりと金物の鳴る音がする、ちよつと驚いて、音のする方へ振向けば、御用邸の正門を守る巡査が苦り切つて此方を睨んで居るのである、もう思ひ煩ふ事もないから、氣を變へて早足に歩き出した

麥を茹つた跡の畑に暑い趣がある、此邊からは海が見えず、不規則に立並んだ人家の裏手と屋根とが眺められるばかりで、之に配合する山も松も乾いた色をなし、此夕暮前の一時を殺風景にして居るのである、けれども、風だけは流石に涼しい

六地藏の處から通筋へ出ると、元氣のいい若者に俵を勧められたので、星月樓迄十錢の約束で、急げと命じて乗つた、何だか斯う秋谷の方へ引寄せられるやうで、早々鎌倉を去りたいから、待たして

置いて、歸途も此俵で停車場へ行かうと云ふ寸法なのである

片影が出来ながら、干びて塵埃の立つ鎌倉の町を、海水浴の麥稈帽子を冠つた男女が、三々五々藪の化物然と行列をなして、惰さうに足を引ずつて居る、人が俵を避けずに、俵が人を避けて波を描きつゝ進むのである

其六十八

大佛の石標を右に見て、三橋の角を左に曲り、突當つて又右へ折れると、極樂寺坂から靈山が鼻を前に望んで、虚空藏の堂、星の井戸が、重つたやうに眺られる所が、鎌倉の一隅坂の下の部落である、漁師の家に挟まれた狭い横町を海邊へ向つて入ると、小高い砂地の上に建てられた海を見降す二階造が、即ち目指す星月樓である、立派な普請とは云へないが、手廣くつて新しいのが取柄であらう

岡部と川瀬とは、俊郎へ手紙を遣つて、其返事を待つては居るだらうが、返事の代りに本人が遣つて来やうとは、夢にも思はなかつたらしく、女中が取次に上ると間もなく、階子段を踏躑かして、兩人先を争ひ降りて来た「やア、脚があるから幽霊ぢやあるまい、これア奇妙だ、吉田が生きてる、生きてる吉田が来た」と、態と驚いた顔をして、仰々しく囁し立てるは、赤くつて圓い方である「岡部何云つてるんだ」と笑ひ乍ら俊郎は靴を脱ぐ、赤くつて圓い方が岡部と判つた「吉田、手紙を見て来

「たんだらうね」と、沈著いて仔細らしく云ふは、青くつて長い川瀬である「む、見た、何時も變らぬ岡部の悪洒落には、我輩些も驚かないが、鎌倉へ用があつて来たついでに、ちよつと君等が驚く談話をしやうと思つて寄つたんだ」と云つた時にはもう、双方共に脱ぎ了つて、上り框に突立つて居るのである「おや、態々我々を尋ねて来たんぢやアないのか」と、岡部が頭を掻く「僕等が驚く談話して、どんな談話たえ」と、川瀬は何所迄も眞面目顔「君等は新聞を見て、あんな手紙を寄越したのか」斯う云つて訊く俊郎の心は、東京の新聞も數が多いから、或は、照明に見せられたのより精しい記事の出で居る新聞があるかも知れぬと思ふのである「新聞にどんな事が出た」と、圓を圓くして訊き返す二人の氣色は、明かに彼の記事に氣が附かぬことを語つて居る「いや、新聞に出てるのは僕を扱にした二三行の記事なんだが、それに就いて、僕を中心としての非常の大波瀾があるんだ」「矢張人殺し事件かえ」と、岡部は乗つて来る「おい、冗談ぢやアない、こんな所で談話が出来るもんか、君等の座敷へ案内し給へ」「さうだ、これア失敬だつた、あんまり君の來やうが出し抜けたつたもんだから、川瀬の奴が面喰やアがつて、僕迄もうつかりそれに捲込れちまつた、は、は、は」「此野郎、手前が面喰つて、一個で騒いでる癖に、人を連累にしやうたつて、傍に公平な審判者が附いてるんだ、ねえ諸君」と、川瀬は番頭や女中を振返る

上り框の變つた般ひに、宿の者が大勢寄り集まつて、面白さうに見物して居るのである、其間に、俊郎は詰らなさうな顔をして、すん／＼二階へ上つて行くと、岡部は「相變らず、吉田は氣が短いなと、感心したやうに調子を沈めて云つて、番頭や女中を相手に緩くり何か喋つて居る川瀬をば後に残し、早足に階子段を踏鳴らして、俊郎の傍を上部へ摺り抜けた「君、此方だよ」と、先に立つて案内する岡部に隨ひ「これアい、所だ」と譽めつ、海に向つた欄干附の楹側を通つて、二友が借切りの座敷の前に俊郎は立停まつた

靈山が鼻は近く欄角を壓して、滴るばかりに緑濃く、水を打つて押固めたやうに潤つて光澤やかな由井が濱は、白き赤き黒き人の群を盛つた儘、遠く小坪に薄るゝあたり迄、銀鼠色の三日月を繪いて居る、油を湛えたやうな海の碧みが、遠くの方から煙のやうな糺糊たる紫を浮べて來るのは、夕暮に近い微候である、空は海に浸つて居るあたりから白みを帯んで來て、葉山の長者が崎から三浦三崎の果迄の一帶の海岸が、背景の布地に淡墨を塗つたやうに、宙に浮いて見えるのである「何故入らないんだ」と、後から上つて來た川瀬が俊郎を座敷へ押入れる「い、景色だ」押入れられて楹側に近く大胡坐を掻きながら、首を拵つて外ばかり眺めて居る「おい、景色なんかどうでもいよ、早く僕等が驚く談話をしないか」岡部は前から催促する「大概の事には驚かないぞ」岡部に應じて川瀬が後から俊郎を挟み撃つ

二階へ上がる前に命じたのらしく、氷を持つて來た女中が、氣の利いた面をして「お傳は、此方で

拂つて返しまして御座います」と云ふ、餘計な事と思つたけれども、憤る譯にも行かない「それアどうも有難う」

其六十九

俊郎は、二友に向つて「通り秋谷の變事を物語つた」とうだ、これでも驚かないか」と俊郎が晒ふに「驚いた、實に驚いた、源八と云ふ奴がお磯を引渡つて海へ飛込んだにも驚かない、源八と久平とが波の上で闘つて双方共死んだにも驚かない、唯だ驚いたのは、君にそんな艶的騒動を引起す力のあつた事だ、畜生色男め、あんまり役が好過るぞ、談話に懸値があるんだらう」と、岡部が怪立ましい聲を出す「懸値どころか、資本が切れる程に話してゐるんだ、其上、まだ君等を驚かす事實がある、此問題に就き、喜代子が僕に下劣極まる裏切を試みたのが原因となつて、僕と玉井の親仁との間に大衝突が起り、とうとう玉井と絶縁して出て来た、これから僕は、自分以外に頼む所の無い一本立だ」「やア、思ひ切つた業をするぢやアないか、それア何時の事だえ」と、川瀬が色も聲も變らせる「今さ今縁を切り立てのほや〜さ」「玉井の親仁も秋谷へ行つたのか」と、岡部は目を圓くする「いや、君達知つてないか、鎌倉の扇が谷に水野と云ふ奴の別荘がある、矢張玉井流の俄長者で、玉井とは餘程深い利害的關係があるらしい、其所へ親仁が来て、僕を秋谷から呼び寄せたのさ、何の用かと思

へば、秋谷に居ちやアいけない、秋谷を引上げろつてんだ」「は、ア、それを君のこつたから、露出しに、秋谷は引上げられませんが、お磯の傍は死んでも離れません、勿附けたんだね」と岡部「豈夫さうでもないけれども、久平が末期の委託が重いから、遺族の前途をどうかする方法が立つ迄は、斷じて秋谷を離れることが出来ないツて云つたんだ」「それぢやア打壊した、君は求めて不利の境遇に陥るんだ、もつと恰憫な方法がありさうなものぢやアないか」「不利だつて仕様がな、僕はこんな場合に不利を論ずることは嫌ひだ、獨立獨行か結句潔いと思ふ」「そんなら、お磯の聲になつて二代目久平とでも名乗り、最高の教育を受けた人間が秋谷の漁師になつて朽果てる氣かえ」と、岡部の調子には慷慨の氣が含まれて来た「さうなつてもいいさ、さうなつたつて、僕は、體のいゝ居候上の聲になつて、氣の合はない女を嫁に持つよりは優だと思ふ、けれども、事實に於て僕はさうならない積りだ、これからの僕の責任は非常に重い、僕は奮闘を以て生活としなければならぬ、それで以て自分が立つと共に、久平の孤兒を立派な一人前の女に仕上げてやらなければならぬんだ、云は、久平は僕の爲に死んだやうなものだ、志を懐いて空しく瞑した隠れたる人豪の靈を慰むべく、お磯の後楯になつて、何所へ出しても退けを取らない一人前の女に仕上でやる事を、僕は自分の事業として、位に思つて居る」双の頬に紅を波打して、一節毎に調子を高くし、自分で自分の云ふ事に感心しつゝ述べるのである

川瀬は耳を傾けて謹み聴いて居たが、岡部は始終口を挿みたがつてもちく／＼するのである。で、俊郎の言葉が終るか終らぬに、張切れたやうな頓狂の大声を出した「其お磯と云ふ奴、おつと失敬、お磯君は、辨天様が嬖婦に化けたやうな美人と思はれる、いや、美人でなければならぬ、美人でなければ承知しない」「何故」「何故つて君、喜代子さんのやうな、金持の娘の系敵の美人を打棄つても、同時に、金の蔓、立身の蔓に離れても、どうしても其漁師の娘を取らなければならぬと云ふにやア其娘に君を支配する絶対の大能力あることを認めなければならぬ、女の能力は何であるか、其固有の美を利用する力である、だからいくら利用する力があつたつて、利用すべき美が身體になければ仕様が無い、そこで、論理上お磯が辨天様から釣銭を取るやうな美人たるを推測しても、妨げがあるまいと思ふ、いや、これアどうも、飛んだ演説口調になつちまつた、それとも、君は藜食ふ虫の部類か」「それア、色は白くないけれども、醜い女ぢやアない」と、俊郎は正直である「野郎、圖に乗つてそろそろ惚け出しやアがつた、堪らないね、そんなら斯うしやう、川瀬と二人で、君を先導に秋谷へ行き、其の漁師の娘を實見して、果して、公平の眼で見ても美人だつたら、今後敬意を表して、之をお磯様と呼び奉る、君が其後楯になるなら、僕等は後楯の更に後楯になつて、間接にお磯様の尻押を仕やうぢやアないか、どうだ川瀬」

けれども、どう思つたか、川瀬は冷笑つて相手にならない「おい、どうしたんだ川瀬、厭な笑ひを

見せるぢやアないか」「吉田、要心し給へ、そんな御爲ごかしを云ふのは、岡部に深い野心があるか
らだよ」意外な川瀬の言葉に、岡部は勿論俊郎も「何ッ」と注意の耳を引立てた

其七十

「これア閑棄にならないぞ、おい川瀬、君は時に依ると、出し抜けに妙な事を云ふが、僕に何の野心があるんだ」岡部が嚙著くやうに迫つても、川瀬は平気で何時迄も冷笑つて居る、上り框の仇を討つ積りであらう「其野心の性質を云つて見ろ」と、岡部はやや拍子抜けの體である

川瀬はそれに相手にならず、顔振向けて「吉田」と呼んだ「何だえ」と、俊郎も悶かしさうな調子「岡部はねえ、平生君の境遇を羨んで、嚙語に迄も云つてる位なんだから、これを機会に、君と其漁師の娘とが結び著く事に同意の風を装うつて、暗に喜代子嬢に接近を試み、得意の怪辯を以て玉井の親仁をも籠絡し、今迄の君の地位に取つて代らうと云ふ寸法なんだよ」「何だつて、もう一遍云つて見ないか」「幾度でも云ふよ、岡部の奴がね」「判つたよ、もう判つたよ、覺えてろ、貴様裏切をして、吉田に付きやアがつたな、内腑齋薬め」「憤ることはないよ、裏切は君が崇拜する喜代子嬢の十
八番だから、ねえ吉田」「馬鹿、誰が喜代子なんかを崇拜するもんか、吉田ぢやアあるまいし」

俊郎は、平生口の悪い岡部が、薄ぼんやりの中に何所か非凡な所のある川瀬に翻弄されて、太刀先

が四途路になる光景を、打興じて眺めて居たが、こゝに至つて隙かさす口を挿んだ、おい岡部、沈著いて物を云へ、僕は喜代子に對して冷かだから、玉井の家とも絶縁したんぢやアないか、だから、縦令君が實際今迄の僕に代つたからつて、僕は決して残念だとも口惜しいとも思やアしない、却つて、人身御供の代りが出来て安心したぐらゐに思ふだらう」「酷い事を云ふ」「まア、黙つて聞き給へ、君の手腕で玉井の親仁を籠絡したら、それア、喜代子を得た上に、何か遣る資金を引出すぐらゐの事は出来るだらう、けれども、御氣の毒ながらも駄目だよ、喜代子には、身分相當の新しい候補者があるんだから」「む、それア誰だ、何奴だ」「岡部は我を忘れて詰め寄る」「は、は、は、矢張川瀬の目が高い、取つて代らうとの野心は、事實であつたんだね、それぢやア、念を殘さず成佛させる爲に、其候補者の名前を云つて聞かさう、今、喜代子がお種お京を連れて來てる上に、玉井の親仁迄も自分の家のやうに寝泊りしてる、扇が谷の別荘の主人の作水野春雄、洋行歸りのハイカラ男だ」「む、さうか」「嗚殘念だらう、其代り、水野にも綾子と云ふ娘がある、金持の娘で、美人だかどうだか判らないが、兎に角美人を以つて自任してるとは喜代子と同じなんだから、君の理想の婦人でないと云はせない、どうだ、僕の爲に調停の勞を取ると云ふ名義で彼家へ出入し、そろそろ得意の籠絡手段を試みたら」

眞面目な顔をして俊郎が冷かすを、忌ましくしげに聞いて居た岡部は、やうく相手を折ぐべき機

會を得たと覺しく、俄に元氣附いて「こん畜生、其ハイカラ野郎に喜代子を取られたもんだから、せう事無しに漁師の娘へ手を出したんだな、しみつたれな奴だ」と嗚鳴る「僕がお磯と知り初めたのは先月、喜代子が水野の件を候補者にしたのは此數日來の事、而も、僕が今日水野の別荘へ行つて、始めてさう觀察したぐらゐに過ぎないんだ、だから、君の推測は歴史を無視して居る、時間を蹂躪した暗雲の推測だ、迂論に思ふなら、君達は喜代子を知つてるから、僕と一緒に秋谷へ行つてお磯を見た上で、其優劣を比較して見給へ、お磯が飾りのない天然の野の花なら、喜代子は簪にする造花だ、外觀内容共に爾りだ、見損つて貰ふまいせ」と、俊郎は冷笑ひながら素ッ氣無く云つて退ける「此奴が此奴が、云はして置きやア放圖が無い、今度は惚話で人を中毒やうとしやアがる、これぢやア、意地でも秋谷へ行つて見なければならぬまい」と、岡部は口惜しさうな顔をして笑ふ「ぢやア、これから直ぐ行くか、但し、僕はもう玉井と關係の無い人間だから、あの別荘へは行かない、君達と一緒にけちな宿屋に泊らう」「けちな宿屋でなくつてもいゝやアないか」「だつて、秋谷にやア、けちな宿屋以上の宿屋がないんだよ」「お磯君の家へは泊れないのか」「狭いからさうは行かない」「そんならけちな宿屋でも我慢するが、まア今晚は此方へ泊れ、明日一緒に行くから」「急いで歸らなければならぬ」「歸らなければならぬなんて、もう秋谷を自分の棲家にしてやアがる、さう出られると、此方も意地になつて止めなければならぬ」「無理を云ふな」「無理でも何でも構はない、腕力に訴へて

も止めて見せる」岡部は、二人に翻弄された意趣返しに、肩腰張りの四角に構へるものである。

其七十一

岡部が無理に引止めるので、是非無く俊郎は鎌倉へ一泊する氣になつた「其代り、御馳走しないと承知しないぞ」と俊郎が云へば「御馳走なんかするもんか、秋谷へ行きやア、お磯君がどつさり御馳走するから、其理合せに、此所ちやア酷く冷遇してやる、色男と云ふものは、それくらゐの事を我慢しなくつちやアいけない」と、冗談ながら、意地になつて逆に出るのである。

すると、川瀬は又岡部の反對に出て「吉田、いゝよ、心配する事は無いよ、岡部が冷遇したら僕が優遇してやるから」と、俊郎の肩を持つてかゝる「此野郎、一から十迄、己に反對さへすれア、うぬの役目が済むと思つてやアがる、けれどもな、他の事とはちがつて、此事で敵の肩を持つちやア、平生の好しみに對して済むまいせ」と、岡部はやゝ恨めしさう

之を聞いて、本人の川瀬よりも、俊郎が先づ笑つた「敵とは酷いぢやアないか、何の遺恨があつて僕をさう敵視するか」と、云ひ掛けたが、氣を變へて「それはさうと、君達二人の仲程不思議な友達はあるまい、一方が赤いつて云やア、一方は必ず黒いつて云ふ、一方が東ツて云やア、一方が必ず西ツて云ふ、一から十迄反對の仕合で、誰に見せたつて、こんなに談話の合はない友達は無いと思ふだ

らう、さうして居て、何時も離れることの無い合棒だから、不思議ぢやアないか」と感心するのである。「僕と岡部は、砥石と刃刀との離るべからざるが如しだ」と、川瀬が苦笑ひする「けれども、岡部が折角僕を冷遇しやうと云ふのに、川瀬が優遇して呉れちやア、間に挟まつた僕は、氣の毒で却つて苦しいんだから、寧ろ、川瀬も岡部と一緒になつて二重の冷遇をして呉れ」「いや、僕は敢て、平生の流で故意に岡部に反對するのぢやアない、吉田を優遇するには理由があるんだ」「ふむ、それア又變つた話だね、何故僕を優遇するか、其理由を承らうぢやアないか」と、俊郎は好奇心を起す「僕は、お磯君に對して深い感謝の意を懐いて居る、だから、隨つて吉田をも特に優遇する氣になるんだ」「愈々判らなくなつて来る、縁もゆかりも無く、まだ見たことも無いお磯に、何で君が感謝の意なんかを懐くんだ」

此に至つて、今迄平氣に構へて、云ひたい事を云つて居た川瀬が、急に赤くなつて口籠つた「そ、それは、む、改めて云ふべき機会があるだらう」「何だか、厭に事を重くするんだね、どうも可笑しい」と、俊郎は空しく首を括るに「はゝゝゝ、出し抜けに岡部は肩を波打たして晒し出す「どうしたえ」、俊郎はこれにも不審顔「吉田はまだ知らない筈だ、はゝゝゝ、これア面白い」岡部は譯も云はずに獨り笑ひ興する、川瀬はにやり〜と極り悪さうに笑ふ、俊郎は二友の様子を等分に見比べて、益々不審の首を括るばかりである。

「おい川瀬、焦らさずに譯を云へ」と、是非無く俊郎は川瀬に迫る。「これア、初心な川瀬にやア云へまい、僕が代つて告白しやう」、岡部は時こそ来たれと、先刻の返報をやり始める。「一體どうした譯だえ、僕にやア一向見當が附かない」もう、岡部を相手にするより外に仕様がなないのである。「見當が附かない筈さ、先刻の君の物語の中に、お京君が波に漂はされて死にさうに見えたので、君が救ひにかゝつたけれども、手に餘つて、心にも無い情死の形になりかけたのを、お磯君が来て易々と救ひ上げて呉れ、それから、兩人の仲が不思議に親密になつたと云ふ一條があつたらう、それが其、二重園點を打つべき樞要の部分なんだ」「む、さう云はれると少し見當が附いて来たやうだ」「附いて来たたらう」「さうすれば、川瀬がお京に氣でもあると云ふのか」「氣でもある、でもあるところの段かえ、東京に居て、玉井の屋敷に君を訪問することの頻繁なのは、筆頭第一に川瀬と僕たらう、それがみんな、川瀬にお京君の顔を見せる爲に、僕が相伴して行くんで、君を目的にするんぢやアないんだ有難い仕合せだらう、だつて、川瀬は初心だから、一人ぢやア極まりが悪いッて云ふし、行きたいッて云ふ時に連れてッてやらなければ、一晩陰り明かして、人の安眠を妨害するんぢやアないか、何にしろ、吉田と云ひ川瀬と云ひ、女に夢中になり易い友人ばかり持つてるんで、僕の如き君子迄も、動もすれば御自分達同様の者も見做されるんだから困る」岡部は愈々得意になつて、俊郎と川瀬と二人を鼻に載せて、これから散々玩弄物にしやうとの料簡と見える。

俊郎は其手に乗らず、態と眞面目に構へ「もう判つたよ、自分の意中の人の生命を救うツた者に對して感謝の意を懐く、これ程明白な事は無い、川瀬、確とさうか」と色を正して川瀬に向つた「む、まアさうだ」と、川瀬は固苦しく云つて、又眞赤になる「君は眞面目でい、男らしい、愈々其心なら僕にも考へがあるから、機會を待つて居給へ、お京は久しく喜代子に使はれて居る女ぢやアない、打てば響く奴だ、生きてる女だ、喜代子なんかよりは十段も立優つて居る、む、面白い、俊郎が高調子で捲し掛る激しい勢ひに、岡部も詭辯を用ふべき餘地を失つて押黙つた

「御膳を持つて參つても宜しう御座いますか」何時の間にか女中が敷居外に膝を突いて居るのである

「酒を持つて来るんだ、それから、極つた物の外に、何か肴を見繕つて呉れ」と、俊郎を優遇する筈の川瀬を指して、冷遇する筈の岡部が命じた

其七十二

星月樓の晚餐を了へて、三人微酔の顔を由井が濱邊の夕風に吹かすべく出た、いづれも宿の貸浴衣の揃ひである

陸は既に夜の黒幕に蔽はれたが、海と空との摺れ合ふあたりから、一綫の薄明りが搖ぎ出て、之に映る空と海との角々をまた紫に見せて居る、崩れて砂を噛む波の白さにも、藤の花程の色が見える、

總體に種々の色彩を施した美しい畫面の上に、蒼黒くどろ／＼する油を塗つて光澤消しをしたやうで、滑かな感じと冷たい感じとがするのである。

濱邊の砂地は、鷗の群が一ぱいに降りたかとはかり、幾百千の白い人に満たされて居る、夕暮は唯だ白地の着物ばかりを目に立たせるのである、芭蕉張の脱衣場、砂地に揚げられてある漁船、すべて物あるほとりには、餘計人集りがして居る、二間四方ばかりに板を並べた頑丈の臺の上に、背合せに二段の腰掛を釘附にしたのを、岸に近く波の荒い所へ浮べて、半袖の肉袒神と猿股とで、頭から撒を被りつゝ、其上に群れて居る西洋人の男女も見える。

一際眞黒な人集りは、夕暮の或る潮加減を見て、地引網を下して居るのである、見物の数は、網へ入る魚よりも、恐らくは數倍であらう。

相撲を取つて居る青年の二團がある、投げられて身體を砂まぶれにした奴が、起き上ると海へ驅込むのである。

三人は、海濱の賑ひに興を催して、滑川のほとり近く歩を進めたが、丁度今、滑川に行先を断たれて、徒渉りする氣にもならないらしく、引返して此方へ歩み來る、五人連の男女がある、双方はつたり行違つた「あら、若旦那様」我を忘れた様子で、群の中から二足三足前へ出る女を、誰かと隙かして見ればお京である「お、お京か」、俊郎も思はず聲を掛ける「おい／＼、前へ出る／＼」、立行む

川瀬を岡部は調戲面にお京の方へ押遣る

「お京、お京ッてば」、剃刀のやうな、鋭い聲で呼返す者を、誰かと見れば喜代子である。

俊郎は屹と眼を光らした

喜代子の右に並ぶは水野の倅春雄で、其左に並ぶは水野の娘綾子である、お種と、先刻取次に出た小間使の中の若い方とが、少し下つて後に附いて居る、お京も後に附いて居る中の一箇であつたのを前の列を越して先へ出たのであらう

「はい」と小さい聲で應へて、お京はたちちと後へ下つたが「失禮ぢやアないか」と一際尖つた聲で喜代子に叱り着けられた時には、後さまに春雄に突當り掛けて居たので、慌て、横さまに飛び退いた双方右へ避けて、聲も出さず眼も動かさず、すーつと磨れちがふ、忽ち滑川に行先を塞がれて、三人云ひ合はしたやうに振返る、喜代子と水野兄妹との一行は、崩る、波の白さの薄明りを借りて、黒く後姿を見せて居るが、お京一人だけ、退け者のやうに後に下つて、悄然と俛首れつゝ歩いて居る「傑い見脈だねえ、愈々あのハイカラ野郎を君の後釜に据えたと見える、いくら當世でも、あんまり早過るぢやアないか、けれども、結局あの方が好一對だらう」岡部は歎息半分冷笑半分の妙な調子で斯う云つた、冷笑は誰に對してであらう、俊郎に對してか、喜代子に對してか、將た己れ自身に對してか、恐らくは、三つ共に含まれて居るのであらう「へん、先刻唾を吐きかけて遣つたんだから、阿

魔の憤慨しやアがつて、あれで態度を明かにした積りだらう、御膳が御茶を沸かさア」と、俊郎の舌は氷よりも冷かである「あんまり可笑くもあるまい、ちと焼ける方だらう」「君がかえ」「それア、僕だつて面白くも思はないさ」と、岡部もとうとう正直に落る「は、は、は、それでこそ君も男だ、好く白状した、けれども、僕が唾を吐きかけた女だ、未練を残すな」「僕には僕の主義があるから、君に唾を吐きかけられた物だらうが、どうだらうが、そんな事には頓着せず、不用の品なら譲受けて、自分の商賣にしやうと思つただけでも、買手が附いちやア糶る氣にやアなれない、あ、本來空、鎌倉の海へさらりと投げ込まう」と、岡部は滑稽な調子で云つて、咽喉を締められるやうな奇異な笑聲を聞かせる。

「お京君が餘程不首尾の様子だが、氣の毒で堪らない、今迄黙つて居た川瀬が出し抜けに口を開いたかと思へば、お京の事を云ふのである、それも見えなくなる迄お京の悄然した後姿を見送り乍ら……」「ひ、だから、彼女も長く喜代子なんかに使はれてる人間ぢやアないッて云ふんだ、打てば響く生きた娘だ、僕が自分の身の危きを忘れて救ひにかゝつた事と、お磯に救はれた事を、深く恩に思つてゐるらしい上に、不思議にお磯と氣が合ふやうだから、いづれ其中には、君に不利でない結果となるだらう」俊郎は川瀬の肩をたゝいて、慰めやうにしんみりと云つた。

其七十三

一晚星月樓に泊つての翌朝、俊郎は岡部川瀬の二友を引連れて秋谷へ赴いた。お磯が荒物店の四五軒手前に、粗末な商人宿のあることは、豫て俊郎が目をつけて居るのであるから、二友を一先づそこに落着かせ、自分は當分逗留する約束で、玉井の別邸から例の鞆を運び移した仁藏爺々とお作婆々とは、一部始終を聞いてたゞ呆れるばかりで、果ては涙をながして残念がるのであつた「貴方も氣が短かいが、旦那様もあんまりだ、お嬢様との事は兎に角として、貴方を突放しちやア、亡くなられた貴方の御父様へ濟みますまい、爺々ば前からの事を能く存じて居ります、責めて此別荘でも貴方の物にするやうに、一つ下拙が出掛けて行つて、旦那様へ談判しませう」と、仁藏が意氣込むを、かうなる方が結局自分の望む所だからと断つて、構はないから別荘に居ると云つて呉れるのを、無理に振切り、但だ、爺婆との交際だけは長く絶たずに往來しやうとの約束だけにしてやう、其所を立出でたのである。

狭い土地の事として、宿でも十分に俊郎の事を知つて居る、自分の家には上等過ぎる客として、恐れ敬ひつゝ取扱ふのである、それに就いて滑稽な事は、二友をば、宿の者が俊郎の従者と思ひちがへて待遇を別にしかけたので、最初は三人共其意が解せなかつたが、俊郎がそれと氣が附いて「おい御内

儀さん、僕はもう玉井の家を追出て了つて、あの別荘には居られなくなつたから、此家の厄介になるんだ、誰の助けも無い瘦腕二本の貧乏書生だから、其積りで取扱つて呉れなきやア困るよ、それから此二人は僕の友達で、どちらかと云やア僕より上手の人間だ、どうぞ僕よりも叮嚀に取扱つて御呉れ僕の家來か何ぞのやうに思つちやア、飛でもない間違ひだよ」と、露骨に注意を與へたので、仕舞には、三人も宿の者も大笑ひになつた

洋服を浴衣に著換へて、暫く二人を宿に残し、俊郎は荒物店の様子を見るべく行つた、顔を見るとお磯も母も、飛立つばかりに喜ぶのである「誰も來て居ないかえ」「え、晩には、伯父や何か相談に集る筈ですけれど、只今は母子ツきりで御座います」「それア丁度好かつた、晩の相談の前に、是非話して置きたい事があるから」と、すつと上り込む「ちやア奥へ、鎌倉の御用向は、別に變つた事ちやア御座いませんでしたか」と、お磯はもう極り悪げも無く、母より先に立つて案内するのである「いや、非常に變つた事さ、だから、晩の相談の前に、是非それを話して置かなければやアならないんだ、御母さんもうぞ」と お磯の母に對しても、早や他人らしい呼方をしない「左様で御座いますか」と、お磯は自分の事にして心配顔をする

母も、同じ色で奥へ入り、三人佛壇の前に坐ると、白木の位牌が淋しく目に立つのである、俊郎は線香を繼いで恭しく頭を下げてから、屹となつて母子に向つた「僕はもう玉井の家と縁を切つて來た

んだよ、此瘦腕二本の外にやア、何も無い素寒貧の書生ツばになつて了つた」「まア、どうして」、母は目を圓くして息を呑む「もう秋谷へは行つちやアいけないツて玉井の主人が嚴しく申渡すんだ、それに對して、僕はどうあつても行かなければならないツて云ひ張つたんで、そんなら貴様の事には一切構はない、もう赤の他人だから、勝手に仕たい事を仕ろツてんだ、斯うなる事は初ツから覺悟してたんだから、僕は別に驚きやアしない、そんならと云つて、縁を切つて飛び出して來たよ、それに、喜代子の奴が、磯ちゃんに就いて、碌でもない事を親父へ告口したと判つたから、糞味噌にこなし附けて、唾を吐き掛けて遣つた」斯う云ひつゝ、ふとお磯と目を見合と、お磯は早くも喜代子が自分の懷妊一件を告口した事と悟つたらしく、濫い顔をして首肯した「それと云ふも、元はお磯から起つた事だアから、御氣の毒でなんねえですよ」と、母は太息を吐く「なアに、御母さん、決して心配して下さるな、これが却つて僕の仕合せなんだから」と、無上に元氣附いて、面白くつて堪らなさうな笑顔をさせるに、母子は目に物云はして心配さうに俊郎を見詰めるばかりである「人の厄介になつて、人の引立てや人の金の方で、頭を押へられ手足を縛られながら一段づゝ昇つて行くよりは、自分の腕一つで遣つて退ける方が、どんなに深くつて、どんなに面白いか知れないよ、僕は立派に自分の腕で遣つて行けると思ふ、お父さんに誓つた言は忘れやアしない、お母さんに磯ちゃんは、確と此腕で引受けたから、大船に乗つた氣で安心して下さい」「それちやア、貴方はかしお骨が折れて」と、お磯

が氣の毒に云ひ掛けるを、手を掉つて打消し「まあ聞いてお呉れ、これからどうして世渡りをするか、お前達の呑込むやうに云つて聞かせるから、其代り、僕の考へがいと思つたら、親類の人の中に不承知があつても、切抜けて貰はなきやア困るよ」と、眼中に困難な事が無いと云ふ意氣込である

其七十四

お磯母子は、打首背いて膝を進めるのである

俊郎は一層眞面目になつて言葉を續ぎ、「御父さんの娘として耻かしくないやうな立派な人間にならうとするには、東京へ出て修業しなければならぬ、秋谷で荒物店をやつて居ちやア、食つてだけ行かれるだらうが、一生頭は上りやアしないよ、だから此店は、現在の儘でいくらか格安ぐらゐの人に譲り、家は家賃を取つて貸すことにして、僕と一緒に、御母さんも連れて東京へ出やうぢやないか」と云ひ切つてお磯を凝と見込み、更に眸を轉じて母に及ぼした、其双の眼は熱心に燃えるのである、母子は「え」と應へることは應へたが、又もや頭を低れて深く考へ込「けれど、僕は決して、店の譲り料や、御父さんが貯へた金を盡てにして、それで東京に店でも聞かせ、自分は轉げ込んで食つて居やうと云ふやうな、そんなする、卑しい料簡ぢやアないんだせ、其金は眞逆の時の要心に御母さんが持つてるか、又は貯金でもして置くさ、僕は、玉井と縁が切れたつて、東京へ行つて運

動したら、月に五十や八十の収入があるだけの仕事の口は見附かるよ、僕の價値を知つてる親しい友人に、金のある人や名の高い人の子が少くないから、それ等の者の親父へ頼んだら、乾度何かになられる、だから、三人が食つて着て行く上に、磯ちやんが何か修業する學資も、僕の手で十分に出来るそれから僕の仕事が見附かる迄の暮しの費用も、骨を折らずに才覚が出来るから、一切心配せずに僕に任し給へ」「有難う御座います、私の方の御金だつて、掻き集めて幾何にもなりませんですけれど、どうせこれから御厄介になりますから、貴方へ差上げて、使ひ途は御任せする事に致した方が宜しいぢやア御座いませんか、ねえ阿母さん」父が末期に、自分の身を俊郎に頼んだことを、傍で見聞して居て、これから俊郎の世話になる心になつたお磯である、かう云ふのは當然である

母が口を開かない中に、俊郎は急はしく首を掉つてお磯の言葉を否定した「いや、お前の方はそれで好からうが僕の主義」と云ひ掛けたが、言葉使ひの固苦しいのに氣が附いて「僕の遣り口がさうでないから、僕に任せて其の金は御母さんに預けて置き給へ」と云ひ直し「それから、念の爲に御母さんの御心を確めて置かなければならぬ事がある」と向き直つた「御母さん、貴方東京へ行つて世帯を持つ事が御厭ぢやアありませんか」と、自然に目上に對するやうに言葉が改まる「それで、生れ在所の秋谷を離れるだアから、辛えことは辛えですけど、親仁の遺言もあるつて云ふし、此娘の出世になることなら、何所へでも行きませう」「む、流石は磯ちやんの御母さんです、所が、こゝ

に、ちとむづかしい事がある、僕の考では、晩の相談には、屹度、家を疊んで東京へ引越すことに不同意の人が多いたらうと思はれるが、其時に御母さんはどうなさいます」「それをわたしは考へて居ります、みんな田舎の者だから、親仁が彼方此方飛んで歩くことさえ、八釜しく云つたアで御座えます、況して、親仁が死んだのに、私達が世帯を疊んで東京へ引越すべえなんて云つたら、第一わたしの兄が承知しねえでせう、だけど、お磯の身の世出になつて、草葉の蔭で親仁が喜ぶ事なら、誰が何と云たつて、宜う御座えます」譯の判らない田舎の娘のやうであるが、かうなると、久平の妻お磯の母に耻かしくない決断も出れば希望も見せる、俊郎は涙の出る程喜ばしくなつた「御母さんが其氣で居て下されア、何も心配な事は無い、これで僕も一層刷みがでた、屹度御母子は引受けました、磯ちゃんも屹度立派な婦人にして御目に掛けます」「どうぞ宜しく」と、お磯は嬉しうに頭を下げる急に氣が附いたやうに立身になり掛けた俊郎が「僕はもう別荘に居られないし、それに友人が二人鎌倉から遊びに来たから、あの伊豆屋とか云ふ宿屋へ泊る事に極めて、友人を置きツ放しにして、大急ぎで此家へ来て見たんだ、だから、一先づ宿へ戻つて、晝過には二友を連れて來やう、二友は磯ちゃんを見たがつて態々此所迄遣つて來たんだから、其積であしらつてお呉れ」と、笑ひ乍ら早口に述べる「あら厭で御座いますよ」と、お磯は先日來や、青白いやうになつた顔に美しい紅を刷く

其七十五

秋谷の宿屋の晝飯を、魚は新しいけれども料理方の拙い副食物で濟まし、俊郎は二友を連れて立出でた、指して行く先はお磯が荒物店である「君達、此處だよ、入り給へ」と、俊郎が先に立つて、どやくと入る「御出でなせえまし、どうぞ御上りなさつて」と、店番をして居た母が叮嚀に迎へる、「どうだ君達、上がらないか、奥の方は風通しがいいせ」と、俊郎が先づ上り込む「此所でいいしやう」と、二友が腰を掛ける「さう云はずに上り給へ、眞誠に奥は涼しくつてい、から、それに、此所に居たんぢやア、折角君達が見やうと思つて來た本尊は、何時迄待たつて出て來やアしないせ」と、強いて引張り上げる「御上りなせえまし」と、お磯の母も俊郎に助勢する

二友は除儀無げに且つ氣の毒げに上つて店と奥との境の暖簾を潜り、俊郎の指圖に隨つて、八疊の程好い所に座を構へた、店番をして居るお磯の母の粗野な風采に似ず、父が在世の時と少しも變らずに奥が片附いて居る、谷から吹上げる風が、甍に臨む大樺樹の下を潜つて、冷々と裏手から吹込むと疊も柱も涼しく光る、青々として海の底に居るやうな氣持である「これアい、宿より餘程涼しい」「むゝさうだ」二友は氣持が好さうに、心から譽める「いいだらう」と、俊郎は自分の家のやうに自慢をして、切りに譽められたのを嬉しがるのである

「おい、本尊が見えないやうぢやアないか」と、岡部に小聲で云はれて「むむ」と、裏手を見渡したが、臺所にも物置の方にも、庭の草花の中にも、お磯の影が見えない。「御母さん、磯ちゃんが見えないやうですね」「え、貴方等が御出でなさるのを遠くから見ると、崖下の冷たい水を汲んで来るだアつて、裏口から飛んで出ましただアよ」「あ、さう」と母に挨拶して「此家の横の、井戸へ入るやうな急な坂を降りると、冷くつて、非常に質のいい水がある」と、二友に説明する

其間に、母は煙草盆へ火を入れて出す
暫く経つて、せい／＼息を切る音と共に臺所の外に人の氣配がする「お磯けえ」「え」と、彈む息を無理に鎮めたやうな返事であるが、それでも、聲は清く徹る、二友には爲の初音である、川瀬は勿論皮肉屋の岡部迄も、やゝ容が改まつた「藥籠に入れて、茶碗を三つ添へて持つて来うよ」「今持つて参ります」と答へた時には、もう落着いて、如何にも淑かな物の云ひ振になつた、水が垂るばかりの美しい聲である、二友が驚き顔を見て、俊郎はぞく／＼する程嬉しくなつた、もう、お磯の外には天下に女が無いと思つた

けれども、あの急な坂をば、一手桶の水を提げて昇つて来たのであるから、定めし汗みづくになつたであらう、上氣して居るであらう、初めて二友に見せるのに、成るべくならそんなでない時がい、何だつて餘計な氣を利かして、一通りの骨折りぢやアないのに、態々下迄水なんか汲みに行つたらう

と、唯だお磯が容貌の崩れたかを氣遣ふのである

ふと又、これに就いて、お磯と一緒に水を汲みに降りて、歸途に源八に突當られたことを思ひ出すあ、憎い源八だが、それも今は亡き人である、亡き人と云へば、更に久平の事を思ひ出す、あの、剛勇で、男兒的意氣があつて、而も、寛大で、慈愛に富み、學ばずして自然に大體に通じて居た、隠れたる人物の久平が、どうして、あんな、源八如き者の爲に犬死しなければならぬ非運に陥つたのであらう、それもお磯と自分との爲である、どうしても死んで了つたやうには思はれないのに、もう二度とあの偉人の風格に接することは出来まいか、あ、懐しいと、佛壇を仰ぎ見れば、白木の位牌が動き出すかと思はれる、これに附けても、自分はお磯の爲に全心全力を盡し、或意味に於ては犠牲とならなければならぬと、尙ほ一層心に誓つた

扱て、そんな事を考へながらも、傍らお磯の事が氣になつて、早く入つて来るといふとも思ひ、又緩り休んで容貌を整へて来て貰ひたいとも思ふ、見ない振はして居るけれども、一々お磯の舉動が判るのである、始めは、大藥籠を滌いで、水を一ばいに汲み入れ、残る手桶の分を半ば手水盥に移してそれに手拭を絞し、搾つて顔から頭を拭くのである、果ては双の腕を脇の下迄拭き「こんなに汗になつて」と、氣持が悪さうに獨語して、胸へも背へも手拭を差入れた様子である
「お磯や、早く持つて来ないかよ」、母は待兼ね催促する

其七十六

衣紋を繕つて、お磯は徐々に入つて来た、大きな塗盆に煎茶々碗を三つ載せたのを左に捧げ、右には地肌を湿りに曇らした大薬鐘を提げて、びたりと座に著くや、下に置いた盆の一部分に薬鐘を据ゑるそうつと推し進めた

それが了ると、やゝ座を下つて「被入いまし」と禮法の中に育てられた大家の令嬢も、かうは行くまいと思はれる程、自然に身體のこなしの優美な御辭宜をした

言葉のなまりが直つて居るのと、割に行儀作法を辨へて居るのとは、葉山の別荘に奉公した効だらうと思つたのであるが、例の事があつて後のお磯は、物に觸れて光が出たやうに、そんな行儀見習の効などより以上に、自然と身に備つた優美を表はして来たやうである、俊郎でさへ不思議と見直す程品が好くなつたのである

況して、二友はどれ程案外の思ひをしたか判らない、固くなつて唯だ御辭宜をするばかりである、「磯ちゃん、これは僕の友人で、彼方が川瀬、其方が岡部つて云ふんだ、お前を見やうつて、態々僕と一緒に来たんだ」「あら」とやうく聞こえるやうに云ひ、赤くなつて俯いたが、其儘又も御辭宜になつて「どうぞ宜しく」と述べた「初めてお目に掛ります、吉田君の親友ですから、今後宜しく御

願ひ申します」と川瀬が眞面目になつて、幾度も頭を下るに、岡部も負けじと例の辯舌を振ひ「吉田君とは兄弟同様にして居ります、互に相談し合つて、萬事力を添へたり添へられたりして居る仲ですから、どうぞ、何時迄も御心易く願ひます」と抑揚を巧みにやる、お磯は唯だ言葉少なに「どうぞ宜しく」と繰返すばかりである、白地の縮に粗い堅縮のある、瀟洒した新しい單衣を着て、帯は俊郎が見覚えのある縹子の幽禪と唐緬縮との腹合せを御太鼓に結び、緋縮緬の腰紐きり、と引締めて、前掛をば今草所で外して来たと見える、頭は改めて申す迄も無く、握るに餘る毛を惣髪の銀杏返しにして、櫛も簪も餘計な飾は要りませんと濟ました風、あれ以来日焼け潮焼けが洗つたやうに抜けて、一旦は透徹るやうに青白くなつたのが、すん／＼回復して肉も血も殖ゑて来て居る所へ持つて来て、一手桶の水を提げて急な坂路を昇つた上氣の名残が、冷い手拭で拭いた後にも、まだほんのりと紅潮を残して居るのである、其水際立つた美しさ、すつきりとした品の好き、秋谷の海濱にどうしてこんな娘が生れたかと怪まれるばかり……

冷たい水を飲んだ上に、菓物や煙草を進められ、三人や、一時間ばかり居たが、岡部も川瀬も、平生の無頓著無遠慮に似ず、至つて言葉少なに、謹んで控へるのである

晩には大事の相談の寄合だから、俊郎一人で来ることに約束し、一先づ暇を告げて荒物店を立ち出でた

戶外へ出ると、岡部も川瀬も、一度に感歎の聲を漏らした。「實に、今度と云ふ今度こそは吉田に敬服した、學識ばかりでなく、斯道でもこれから君を兄貴と頼む、いや、なか／＼どうして、喜代子なんか足許にも及ぶもんぢやアない、けれども、どうして、こんな土地にあんな尤物が生れたんたらう」と、岡部が先づ口を極めて譽め立てる、俊郎に自慢を聞かせられる前に、先を越した積りであらうが實際現在のお磯には皮肉屋の岡部にも缺點が拾へない程、人を打つ光がある。「感心したか」と、俊郎は軽く笑ふ。「あれなら、君が何物をも打棄つて全力を傾けるのも尤もだよ、折角大事にし給へ、僕大に賛成する、第一微塵も厭みの無いのが氣に入つた」「口の悪い君にそれ程譽められるのは、お磯に取つて分外の名譽と云はなければならぬ、けれども、實際彼の女は、交際へば交際ふ程美點が出て来るよ、それも、親父が非常の人物でなければ、あんな娘は生れやアしない」「おい／＼、此方が譽めたら、君は謙遜するもんだよ、岡に乗ると厭になるよ」岡部はそろ／＼本色を表はして來た「いや全く、僕から見ちやア神様としか思はれない、後光に打たれて目が晦むやうだ、あれでどうして、海の中でお京を助けたや／＼な恐ろしい働きの出来るんだらう、あ、お京も果報者だ、僕はこれからお磯さんを崇拜する」川瀬の感心しかたは、更に／＼岡部以上である。「君の崇拜は怪しいせ、直き何かに變化するから」と、岡部が冷し掛けるを「馬鹿云へ」と、川瀬は眞誠に憤る

俊郎は總てを打消すやうに高く咽つて「そんな事はどうでもいゝが、晩には親戚が寄合つて、遺族

處置の協議會を開く筈で、僕も重立つた役者として出席するんだ、萬一結果が面白くなかつたら、君達に智恵と力を貸して貰はなければならぬから、今晚は此地に泊つて居て呉れ給へ」と、實地の問題に移つた

かう云ふ中に宿屋の前へ來た

其七十七

晩の相談の席へは、人の揃つた頭を見計らつて行くが好からうと、宿屋の夕飯を緩々と済まし、二友を後に殘して立出でた

荒物屋へ行くと、もう日は十分に暮れ果て、居る、お磯が母方の伯父を始めとして葬式の時に顔を見知つた誰彼が、五六人車座になつて、俊郎の來るのを、今か／＼と待つて居るのである、上座が明けられてあつて、しきりに一同に勤められるので、一應辭退の後に人々の後に廻つてそれへ進んだ

「どうです、もう相談が始まりましたか」と、様子を覗ふべく俊郎は口を開く「いゝえ、まだ始めません、貴方にいゝ御考へがあるさうですから、皆がはア、今か今かと御出でを待つて居たです」と應へるはお磯の伯父で、他の者は唯だきよと／＼と眼球ばかり動かして居る、此中での口の利き手は伯父一個で、あとはどうでもなる者ばかりと見える「それぢやア、久平親方の末期の頼みに就いて、僕

が何所迄も遺跡の事を身に引受けやうと覺悟した次第は、先づ認めて下さるでせうな」「え、其事は今も妹に聞きましたアだが、愈々引受けて下さると云ふ事になると、どう云ふ具合に引受けて下さるだアか、その所を能う御聞き申してえもんで」「ぢやア、僕の考へを御話しますから、一通り聞いて下さい」

茶を啜つて舌を潤し、先刻お磯親子に云つた事を、繰返して精しく述べてると、伯父は眉を擡めて、恐ろしくむづかしい顔になり、首を捻り／＼聞いて居たが、言葉の了るを待つて突と膝を進めた。「旦那の前だけど、私等に云はせると、世の中にこんな腑に落ちねえことがねえでさア、だつてさうだんべえ、これが、玉井とか云ふ大金持の聲と極つてる時なら、どうにか胡魔化して、それくれえの金は骨を折らずに出されもしやうが、自分が稼いで食つて、其餘りで他人の娘や娘の口を引受けやうなんて、あんまり酔興ぢやア御座えませんか、私ア田舎者で、そんなせえな言葉よか知らねえだけど、ちよつと人に頼まれたぐれえで、そんな損な真似をする馬鹿があるもんけえ、御負けに、大金持の聲になれるのを、自分から態と打壞して、直ぐに仕事の口を捜さなければやア食つていけねえやうな身に落ちて迄も、何所迄も他人の娘と娘を引受けて、自分と一緒に苦勞を嘗めさせなければならねえと云ふ法は何所にあります、そんな事をして呉れねえつたつて、妹もお磯も、かうして店せえやつてれア、氣樂に食つて著て行かれるし、漁師の子は漁師の子のやうに、若え漁師の能く稼ぐ奴でも聲に貰つたら

久平どんの跡も立派に立つてきますよ、お磯の事は此伯父が引受けて、自家の次男とでも夫婦にしますから、そんな事を御心配下さらずに、旦那は旦那で、玉井の大將に詫を入れて、矢ッ張り金持の聲になつて下せえまし、さうすれア、旦那も立ちやアお磯母子も立つ、さうでねえと、何だか、旦那がお磯をどうかしやうとでもなさるやうで、第一世間體が悪いぢやア御座えませんか、どうでえ、一同の所存は十分言葉に針を含んで、俊郎をば憤らして退けやうとの魂膽と覺しい、お磯の従兄に當る自分の子に嫁はして、荒物店を控へながらの漁師稼業、久平が在世の頃と同じ寸法にしようとは、別に野心でも何でもなく、伯父として穩當の所存であらう、して見ると、左なきだに都の者を口先ばかりで鷹が無いと思つて居る田舎人が、俊郎がお磯母子に對する肩の入れ方の尋常でないのを見て劍呑に思ひ、極力之を排斥してかゝるのも、亦無理がないと云はなければならぬ

失敬な事を云ふと、一時は俊郎も憤となつたが、かう考へ直して、自分で自分を宥めた

「さうした方がよかんべえ」「さうしなきやア、あの執念深え源八に崇られるかも知れねえ」云ふ事はちがふが、いづれも伯父の意見に同意する者ばかりである

俊郎も最初は、漁師風情の奴儂がいくら理窟を云つて反對したからつて、切り捲つて自分の意見の下に押伏せて了ふに、何のむづかしい事があるもんかと、多寡を括つて掛つたのであるが、かうなつて見ると案外の難場である、もう理窟を云ひ合つたつて、此伯父が屈服しさうはなし、敵は大の男が

大勢、味方はお磯と其母とだけで、而も、頼む所はお磯の覺悟一つであるから、思ひ切つて宣告をする前、屹とお磯の顔に目を注いだ

其七十八

どうせ此場は喧嘩にして丁はなければ収まりが著かぬと覺悟を極めて、口を開く前に屹とお磯の顔を見れば、燃えるやうな目をして、睨むやうに此方を睨めて居る、確り遣つて呉れと、頼みつ激ましつつする氣色である

俊郎は思ひ切つて唇を開いた「成程、御尤もの御意見です、けれども、一應は御尤ものに承はられるだけで、それア實地に行はれない事せう」と、幾分か相手を冷笑する語氣を用ゐる、お磯の伯父が態とらしくぞんざいな言語を使ふのに對して、此方は態と叮嚀に物を云ふのである「何故です」伯父は膝を一つ揺つて氣色ばむ「磯ちゃん、それから、あの折玉井の別荘に来て居たお京と云ふ女の外には、傍に聞いて居た者が無かつたもんだから、證據が無いッて云はれ、ばそれ迄だけれども、久平親方が末期に臨んでの一言は、男と男とが心から心へ頼み頼まれたので、磯ちゃんの事は何所迄も、引受けやうと心に誓つた以上、他人からは、馬鹿とも見え、損得の勘定も知らない奴とも見えるだらうが僕は生命のあらん限り飽迄も遣る覺悟です、それも、本人の磯ちゃんに厭と云ひ、又、磯ちゃんが承

知でも御母さんが斷つて不可ないと云はれるなら、相談を仕直さなければなるまいが、二人共に異存が無いやうです、第一、僕は久平親方と互に心の中を知り合つて居る積りだが、あの人は、失敬ながら一生秋谷で漁をして終る人間ぢやアない、時に依つては、天下を動かす大きな働きをなすべき人でした、それが空しく、こゝ迄云つた所、悲憤の涙に突掛られて暫し語が斷え、更に、身を震はして腸を搾るやうな痛烈の聲を迸らした「蛆虫同様の小さく安つばく汚らしい野郎の爲に、犬死させられなければならぬ、非運に陥つたのだ、世間の有りふれた凡暗な奴儕なら、千萬人一度にくたばつたつて、惜しいことも悲しい事もないんだが、久平一人を亡くしたのが實に残念だ」と、壁も柱も震動する程の恐ろしい聲である

一番驚いたのはお磯の母で、親類の誰彼も皆色を變へた、流石の伯父もや、劈易の氣味である「其久平殿の子だ、それが男なら、縦令久平殿の末期の頼みは無くとも、僕が後楯になつて、二代目の久平として耻しくないやう、立派な人物に仕上げてやらうが、残念なる哉磯ちゃんは女だ、僕は、磯ちゃんは何故男に生れなかつたかと残念に思ふ、けれども、流石は久平殿の胤だけあつて、女ながら確りした氣象を持つてる所が頼もしい、飽迄も遣つて退けやうと云ふ、志しもあれば意地もある、だから、僕は磯ちゃんを男と見做して、力のあらん限り後楯になり、何處へ出しても退けを取らない立派な人間に仕上げない中は、決して挫けまいと覺悟した、若し、僕が斯うするのは、何か汚い魂膽が

ある爲だらうなど、推測する者があるなら、それア、其者の心が汚いから、自分に引くらべて人もさうだらうと思ふのに過ぎない、眞誠の男の腸と云ふものはそんなものぢやアない、義に依つては一文の得にもならない事に、生命を投出してかゝるのが男だ」力のある辯舌で、漲る水を切つて落したやうな勢ひに、滔々と捲くし立て、一息繼いで茶を啜ると、伯父は何か云ふべく唇を動かし掛けた。それを見るや、俊郎は又も押冠せて大聲を擧げ「玉井の家の聲になるのならないのと、そんな事は僕に取つて屁を放つた程にも當らないんだ、自分で稼いで食ふなんて、そんな食ふことを氣にするやうぢやア、何が出来るもんか、玉井の聲になつたつてならないたつて、金なんか、入要なだけいくらでも出来るよ、そんな事は心配し給ふな、金が何だえ、金が儲からないなんて泣言を云ふのは意氣地無しの骨頂だ、金なんか、儲ける氣になつてかゝつたら、漬物で茶漬飯を食ふよりも造作が無いんだ」と、叱るやうに盛み掛けた。

一座氣を呑まれて化石したやうに静まりかへつた、中に唯一個頻りと咳拂ひする者はお磯の伯父である「お磯、手前の心はどうだ」と、鋒を姪に轉じた「御父さんの遺言は、今でも骨身に應へて居ります、どうぞ、わたしを此御仁の被仰る通りになすつて下さい、東京へ出て、一人前の女になりとう御座いますから」お磯の答へは鮮かなものである「む、手前も其氣だな」と思ふ／＼しげに云つて深く考へ込む「親仁も此旦那を頼もしがつて居たアだし、折角さう云つて下さるだアから」と母親が

やう／＼口を開き掛けると「手前は引込んでろ」始めて當りどころを得たとばかり、額に痲痺筋を立て、雷よりも激しい聲に嘸鳴り附ける

嘸鳴り附けては、又伯父が考へ込むのである

其七十九

暫く考へ込んで居た伯父は、ふと氣を變へて頭を擧げた、其様子に依つて推測るに、俊郎の意氣込と其正大な諸論とに辟易はしたが、他迄もお磯の事を俊郎に任したくはなく、どう云つて俊郎を遣り込めやうか、どんな難題を出して閉口させやうかと、肝膽を砕いた末に、やう／＼妙策を案じ出したと云ふやうに見えるのである

五十餘りの親仁の、頑丈造りの身體に獅噛みツ面、人の云ふ事は理でも非に曲げ、自分の考へる事は非でも理にして、何所迄も強情を張り通さうと云ふ人相である、こんな人間に限つて、底には毒も工らみも無く、案外に正直な所があるものであるが、兎に角、頑固の皮が厚い爲に、底迄此方の云ひ分を徹らせることが難いのである

頭を擧げた伯父が、誰に向つて何を云ふかと思へば、今度は、改まつて行儀正しく俊郎に向ふのである「まことに、御志は有難う御座えます、お磯は勿論、此伯父からも御禮を申し上げます、けれど

妹も姪も東京へ連つて行つて下さるのはいいが、後をどうなすつて下せえます、此家や店を」「それア、伯父さんを始め親戚の方々に御周旋を願つて、店は現在の儘格安で人に譲り、家は店を譲受けた人に貸して、家賃を取ると云ふ事にして、それらの金は貯金にして御母さんが持つて居なすつてもいいし、又伯父さんに預つていただくと云ふ事にしてもよからうと思ひます」と、俊郎が何氣無しに云へば「それア駄目です」伯父は得たりと首を揮る「此店を譲受けて商ひをしやうなんて云ふ人間は、金の草鞋で搜したつてありやアしねえです、それア、一年も二年も掛つて、遠い所を搜して引張つて來たら、どうかしたまぢげえであるかも知んねえけど、其中にやア、店の品がみんな汚つたり毀れたりして了ふだんべえ」と空嘯く「そんなら、店の品は東京へ移して、御母さんの内職に、東京で矢張り荒物店を開き、家だけを人に貸してはどうでせう」「それも駄目ですア、店を譲受ける者なら一年も二年も掛つて搜したらあるかも知んねえが、百年経つたつて、此家を借りる者は出て來やアしねえですよ」「そんな筈は無ないが……第一、新しい家がだん／＼建て來るぢやアありませんか」「家を建てる者はあつても、家を借りる者の無え土地です」仕済し顔に云ひ切つて、烟を横に吹く「そんなら伯父さんに監督して頂いて、御家の人でも、或は如何かの隠居婆さんでも、留守居に頼む譯にやア行かないでせうか、多分の事は出來なくつても、月々の禮は僕から仕ますから」「駄目です、わたしの家や、留守居に寄越すやうな餘計な人間はないし、又、秋谷の村中を搜して歩いたつて、そんな閑

暇な隠居なんかありやアしねえです」と、木で鼻を括つたやうな挨拶

俊郎は憤となつて、思はず顔色を變へたが、待て暫し、こゝで無暗に癪癪を起しなどしては、却つて先方の思ふ坪へはまるやうなものと胸を擦つて、無理に苦みのある笑顔を作つた、元來こんな驅引などのある男ではないが、僅の月日の間に種々の變異や葛藤に當つて、知らず／＼揉まれて來た結果なのである「ぢやア、話の纏まらない要點は、店を譲り受ける者も家を借りる者も無いから、秋谷を離れることが出來ないと云ふだけで、磯ちやんが、東京へ出て身を立てる事にやア御異存はないのですね」と、沈着て云へば「いや、む」と、少し面喰つた様子に見えたが、ぐつとそれを呑込んで、抜からの顔に首肯き「それア久平が死際に頼んだつて云ふし、當人のお磯も其氣で居るだから、わしに異存はありません、だけど、店を譲受ける者も家を借りる者もねえ中は、何時迄経つたつて此所は動かれねえ、だからさう思つて貰えませう」と、又もや得意の仕済まし顔になる、何でも、自分が頑張つて、譲受けやうとする者や借りやうとするものがあつても、邪魔を入れて打壊さうと云ふ料簡と見える氣の短い俊郎は、もうむしやくしやになつた、相手が玉井照明や何かなら、此所で癪癪玉を破裂させなければならぬが、自分以下の相手と思ふし、且つは、此場合自分が事を経なければならぬ地位に居ることを十分心得て居るので、胸を擦つて、一先づ此席を無事に納める方針を取ることにした、「これぢやア、何時迄経つたつて話が煮え切らないんだから、今晚はもう御仕舞にして、纏まりの著

さうな、今少し智慧のある方法を考へ出してから、改めて又御相談を願ふことにしませう」
 お磯の伯父は、もう自分の勝利と思つたらしく「そんならそれでもいいけど、能う考へて、漁師の娘は漁師の娘らしく渡世するやうに、お磯に意見してやつて下せえまし」と、厭味らしく笑つて今宵の會を閉ぢることに同意した

其八十

宿へ還ると、岡部に川瀬が、友人の情誼頼もしく、自分の事のやうに心配して、今宵の相談の結果如何にと待つて居るのであつた

俊郎も、隠して置くべき事ではないから「いやどうも、お磯の母方の伯父と云ふ奴が、案外に拈くれ者で、なか／＼相談が纏まらない、僕も、痴癡玉を破裂させかけたのが一度ツきりぢやアなかつたが、やうやう胸を擦つて歸つて来た、もう、君達の智慧を借りなけれア、僕一個でどうにもならなくなつた」と、全く屈托して、一部始終を精しく話し「詰り、久平の遺囑とお磯が人となりとに重きを置いて、自分を没却して彼女の爲に盡さうとする僕の態度は、漁師仲間の頭腦ぢやア解釋されないことなんだから困るのさ」と結んだ「若しそれが戀愛問題を含まないとすれば、漁師の頭腦ばかりぢやアない、僕等にだつて解釋されない不思議なんだからなア」と、例の岡部が、にやり／＼笑ひながら遣

り出すを、俊郎は眉を顰めて「そんな冗談なんか云はずに、眞面目に聞いて呉れなくつちやア困る」と睨む

川瀬は又不相變で、首を拈り／＼考へて居たが、溷然大悟したやうに膝を打つて「要するに、金さへあれア纏まるべき話なんだね」と、頓狂な聲を出す「悔りさせるぢやアないか、それア、金さへあれア纏まるべき話と云はうよりは、金が無けれア纏まるべからざる話と云つた方が適切なくらゐるんだよ、僕が萬の字の附く金を持つてるか、さうでなくつても、自由に金の運轉が利くことを確に見せたら、伯父の野郎だつてあんなに拈くれた出様は仕ないのだらう、なアに、店を譲受ける者も家を借りる者も無いつて云つて、此方を困らせやうとしたつて、金さへありやア、何所からでも人を引張つて来て、あの店を遣らせることが出来るんだよ、奴が、僕の云ふことに重きを置かない第一の要點は僕を、玉井の家を追んで出て金の蔓に離れた素浪人と見るからなんだ、どうだらう、君達の方で、假に一時、奴等の目の前へ、うんと金を積上げて見せる方法はあるまいか」金さへあれアと云ふ川瀬の言葉に附いて俊郎はこゝに荒物屋の相談會とちがふ相談會を開き掛けたのである

「それア、無い譯でもないね」と、川瀬は平氣なもの「む、あるかえ、どう云ふ方法か教へて呉れないか」俊郎は思案に餘つて川瀬に絶る氣になる「おい吉田、川瀬は君子然たる顔をして人を欺ぐことが上手なんだから、要心しなければいけないせ」と、岡部が混せツかへす「貴様は黙つてら、川瀬

眞誠に方法があるかえ」「岡部と僕とが働さへすりやア、屹度金が出来やうと思ふ、主として岡部の外交的手腕を待たなければならぬがね」「おい、くだらない事を云つて、出来もしない事を引受けた上に、人を突き出して自分は隠れるなんて、悪い戯をするなよ、貴様と己とで何の金が出来るかえ」「今度は正當に口を出す権利があると云はぬばかりに、肩肘張つて膝を乗出すのである」「出来る事だから引受ける」「川瀬は益々平氣」「そんなら、どんな事だえ」「岡部は冷笑の語氣「うんと金が出来て、君も僕も、其餘澤に沾ふことが出来やうと云ふ筋道なんだ」「そんな旨過る事を云つて、人を欺がうたつて、滅多に其手にやア乗らないぞ」と鼻であしらひながら、やゝ顔色が動いて来た「そんならいよ、僕一個で働いて見せるから、其代り、金が出来たつて、君は餘澤に沾ふことが出来ないんだぞ」「畜生、厭に氣を持たせやアがるな、己も働いてやるから、其事柄を云へ」「慾張だから、とうとう乗つて来やアがつた」「川瀬は始めて白い齒を見せる「何でもいゝから、其方法を聞かう」岡部は唯だ一條に進むばかりである「君と僕とで、玉井の親仁を説破して、吉田の身が立ち行くやうに三萬か五萬の金を出させるのさ」、路傍に轉じて居る石ころでも拾ひ上げるやうな、無難作な話である聞くと岡部は目が覺めたやうな顔になつて、幾度も滑稽な程首肯「むゝ、さうだ、それに氣が付かなかつたんぢやアないけれども、吉田があんまり、事をむづかしく云ふもんだから、つひ釣込まれて其考へを超越しちまつた、全くそれいゝ考へだ、玉井の財産は、吉田の御父さんが立てた方

案に依つて造られたもんだと云ふ事實は、殆んど公然になつてゐるんだし、玉井の親仁は馬鹿に世間體を氣にする奴だから、貴様と己とが、今年の法科大学卒業生全體を代表して來たとでも云つて、嚇かし込んだら、三萬や五萬は屹度出すにちがひない、いや、出さないつたつて出させずに置くもんか、あの大神上から見れば、三萬五萬は端下金だ、事に依つたら、もつと大きく吹き掛けても出すかも知れない」と、夢中になつて膝ばかり進め、果ては踊り出すやうな身振になつた

其八十一

「岡部、何をするんだ」立上つて其邊を迂路々々する岡部に向ひ、俊郎は屹と鋭い調子を響かした「これから鎌倉へ行つて、玉井の親仁へ談じ込むんだ、鎌倉を引上げた後だつたら、何所迄でも追掛けて屹度取占て見せる」「何を玉井に談じ込むんだ」俊郎の調子は益々引締まる「知れた事ぢやアないか君を空で突放しやア玉井の義理が立つまい、だから、親仁に義理を立てさせて、君の身が立ち行くやうに、纏まつた金を取つてやるのが當然ぢやアないか」と、口尖らして「おい川瀬、貴様も一緒に行くんぢやないか、早く仕度をしろよ、氣の利かない奴だなア、兵は神速を尙ふつて事を知らないか」と面膨らせる

けれども川瀬は緩りしたものである「人の立てた方案に随つて動く癖に、自分が智慧でも出したや

うに、大威張で居やアがる、先に立つて動き廻るのが其方如き雑兵の役で、大將は斯う泰然と構へて居るものだ」平生に似合はず悪く巫山戯るぢやアないか冗談ぢやアない、早く仕度をしろッてば」岡部はやゝ焦れ出す「だつて、君と僕とだけで極めたつて、肝腎の吉田の意向を聞かすにア、實行が出来ないぢやアないか」「好いッてば、吉田の意向は聞かないッたつて判つてるよ、誰が困つてる時に大金を貰ふことを拒む奴があるもんか、それに、吉田の意を受けて行つちやア、體のいゝ強請になつて拙い、吉田が毛頭そんな氣が無くつて居る所を、友人共が見るに見兼ねて、本人に知らさず玉井へ談じ込んだと云ふ形にしなければアならないんだ、第一貴様が行きやア、お京君の顔が見られると云ふ得がある、己よりすつと割がいゝ癖に、何をぐすくすることがあるんだえ」説き了つて岡部は仕たり顔である

「餘計なこつた、止して貰はう」俊郎の調子は、引締つた上にやゝ憤りを含んで来た「何故？何故？」岡部は驚きに打たれて反りかへるばかりである「僕だつて男の端くれだ、一旦絶縁して、世話をしまし世話になるまいと、立派に誓つて出て来た上は、縦令先方から進んで呉れると云つたつて、頭を下げて貰はれた面の皮かえ、餓死するツたつて、僕にやアそんな事は出来ない、況して、僕が知らない形にして置いて、此方の側から金を請求するなんて、そんな小刀細工の下劣な真似は断じて不可い、何所迄も謝絶する、君達の好意は有難く受けるが、そんな方法を講ずることは止して呉れ給へ」「こ

れア驚いた、お磯君に思ひ附かれた程の色男の癖に、金の事にはかりさう堅ッ苦しくしたつて仕様がなないぢやないか」「何でもいゝから、玉井に金を強請ることだけは止して貰はう、それとも、君達がゆすりかたりをして、其金を勝手に使はうと云ふんなら、これア別問題で、僕の知つた事ぢやアないから、宜しく遣るがいゝさ」と、もうぶりくして憤るのである「はゝゝゝ、又吉田の十八番が始まつた、我々は君の爲を思ふから、勞を厭はず働かうと云ふんで、何も自分が無理に仕たいんぢやアないから、不可いなら不可いでいゝよ、そんなに憤らないたつて事が判るよ、君が厭なら止す迄の事さ」俊郎の氣質は十分に呑込まれて居ると覺しく、随分極端な事を云つたけれども岡部は憤らない、但し、「けれども、惜しいぢやアないか、なア川瀬、看すく取れる金を」と、如何にも諦め切れない様子である「そこが吉田君の價値なんだ、美點なんだ、我々は其美點に敬意を表して、之を保護すること力をめなければならぬ、そんな所が友人の情義と云ふもんだらう」と、川瀬は歎息するやうな沈んだ調子「ぢやア、別に方法を考へて、多くは出来なくつても、兎に角吉田の爲に金を造らなければならぬね」と、岡部もそれに連れられて、俄に別の人間になつたやうに打情れる、此男も亦見掛より實意があるやうである

三人暫く無言

「かうして居たつて詰らないし、寝るにもまだ早いから、玉井の別荘の方へ、鳥賊釣りの漁火を見なが

ら散歩に出やうぢやアないか」と、俊郎が無理に屈託顔を直して云へば「それも好からう、ぢやア、外を歩きながら方法を考へるとしやう」と、岡部も面を起す

其八十二

三人打連れて宿を立出で、玉井別邸の方に向つて、ぶらり／＼歩みを進めた

疎に星を見せて、總帯にどんよりと奥の深い空である、湿つぽい風が、海の方から肌を舐るやうに吹いて来る、沖の方に幾十の漁火が一塊り、物に包まれたやうに朦朧として居る、時に、薄腥い磯の香が鼻を掠めて来る、海坊主の嘯きさうな宵である、船幽霊の呻きさうな夜である、あゝ、此海で死んだ久平の魂！源八の魂！

「いゝねえ君、鎌倉の海岸ぢやア、此趣味は得られないよ」と、川瀬がしんみりと云へば「此海岸は景色を眺めるに丁度適宜の高さを保つてゐる、それに、今夜の空気の濕り加減がいゝから、景色が一段立優つて見えるんだ、斯う、人を惱ますやうなのが、何と無く湖の趣があつていゝ」と俊郎が調子を合はせる

すると、岡部は又例の通り「僕には鎌倉がいゝだつて、今頃海岸へ出て見給へ、流行の装ひを競ふ美人が前後左右にうよ／＼してゐるんぢやアないか、それと自然の景色との配合がどんなにいゝと思ふ

此處だつて、お磯君のやうな、喜代子嬢のやうな、お京君のやうな尤物共が、ぞろ／＼海岸を歩いて見せて呉れたら、それア或は鎌倉よりもよくなるかも知れないけれども、人ツ子一個通らない空ッ景色ぢやア、てんで物になりアしない」と、反對に出る「俗物は話せないね」と、先に立つた川瀬が吐くと「何、もう一遍云つて見ろ」と、追ッ掛けるやうに岡部は詰寄る「俗物は話せないッて云ふのさ」川瀬は蒼蠅さうに言葉を早くする「へん、非俗物はちがつたもんだ、見ろ、尻尾を引ずつてらア」
「やア、これア失策、けれども、鎌倉のやうな徹南半分塵埃半分の所を引ずつたとはちがひ、こちらの土は汚くないから、かうすれア奇麗になるんだ」川瀬は香氣にも、帯が解けて引ずつて居るのに氣が附かなかつたのである、岡部に氣を附けられて、左迄驚きもせず手繰り上げ、講釋云ひながらばた／＼打振ふと、夜目にも塵埃の薄白く飛ぶのが判る
「な、なにをする、これア堪らない、風下に人が居るのに、突然塵埃を踏く奴があるか」と叫びつゝ、岡部は横さまに飛退く「之は失敬、今夜の風はちと不都合に吹くね」平然として、解けた帯をぐるぐる捲著け、端をちよと挟んで、それで済ましたもの、どうかしたら、又解けて引ずりさうである
「おい岡部、前面を見ろ」、俊郎は出し抜けに斯う云つた「何だえ」、川瀬を打棄て、突と前へ出る「君があんまり此海岸を貶すもんだから、所謂美人らしい者が、前面から遣つて來たせ」と俊郎が小聲になる「むゝ、成程、輪廓だけしか判らないけれども、慥に東京風だね」と岡部もひそめく「どうしたん

「帯を挟み了へて、後から追附いた川瀬が、何も様子が判らないので間の抜けた大聲を出す、そこへ、前面から来た若い女が近づいて「あら、若旦那様ぢやア被在いませんですか」と、そこら邊明るくなるやうな花やかな聲を出す「お、お京、お京君かえ」、餘りの意外に俊郎の言葉は四途路になつた「やア」と驚いたのは岡部で「えッ」と驚いたのは川瀬である、中にも川瀬は、二足ばかり後に下つて立登んだ「お京さんが、是非若旦那様や磯ちやんに御話がおあんなさるさうで、態々御出でなすつたんで御座いますから、只今、伊豆屋迄御案内申して参るところで御座います」と、お京の後から現れるは、俊郎に好意を有つて居る、別荘守の仁藏爺々いである

昨夕の由井が濱の對面も變つて居たが、今夜の秋谷の海岸の對面は、更に變つて居るのである川瀬の感み方は、昨夕よりも更に一層甚だしい、流石の岡部さへ、川瀬を調戲ふことも忘れて、一ばんやりした程であるから、其意外さ加減のどれ程であるかが窺はれるであらう

其八十三

朦朧として仄にはほふ星明りと汐明りとに、品は判らないけれども、煙を身に纏うたやうな薄白い著物の、優れて長い袖が、ひら／＼と翼のやうに翻り、帯は絹縹珍か、色も模様も判らないけれども御大鼓の結び目が軽げに見え、頭は思ひ切つて根の上つた島田で、脊は低く／＼ない方であるのに、臺の

高い駒下駄を穿いて居るから、何と無く斯う繪から抜け出たやうな薄すりした姿で、輪廓だけながら昨日迄に見ない品と趣とを表して居るのが、秋谷の海岸で三人が思ひ掛けなく逢つたお京である

俊郎でさへ斯う見直したのであるから、川瀬からは、此時のお京が天女の化身と見えたのかも知れない、女は實に怪物である

「どうして此地へ来た、君一個で来たのか、日が暮れてから著いたのか」、俊郎は唯だ不審と思ふ節々を切れ／＼に並べ立てるばかりである「わたくし既う、玉井さんから暇を出されましたんで御座います」お京の答へは案外の更に案外である「えッ、どうして、昨夕も喜代子と一緒に由井が濱を歩いてたんぢやアないか」「え、あれが原因で追出されましたんで御座います」「あれが原因とは」「あの折に、わたくしが若旦那様つて御呼び申して、前へ出ましたのが、大變御嬢様の御氣に障りましたやうで御座います」「む、成程」と俊郎は頻りに首肯く「それから、水野さんの御別荘へ戻りまして、皆さんと御一緒に水菓子を頂いて居りましたら、御嬢様や、水野さんの御嬢様や若旦那様や、お種さんだのが、口を揃へて、若旦那様とお磯さんの悪口を被仰るんで御座います、それは／＼、あんな御上品な方々に御似合なさらぬ酷い事はッかり被仰いましたんで御座いますよ」「さうだらう」俊郎は首肯き通しである「で、御存じの通り、わたくしは御轉婆の出しやばり者で御座いますから、こゝぞ生命を助けて下さつた御恩のある、若旦那様やお磯さんの爲に出しやばつてもいゝ所と存じまして、

躍起となつて、お磯さんを譽めたり、若旦那様を御譽め申したり致しましたんで御座います」「お京君はお京君で、何處迄も特色があるね」と、俊郎は感心したやうに吐く「さう致しますと、お種さんがわたくしへ食つて掛りまして、やれ、不斷から出過るの、生意氣だの、小癩だの、御饒舌だのつて、色々な悪口を申しました末に、まア、酷いちやア御座いませんか、わたくしが、以前から若旦那様と後暗い事でもあつて、仕舞にやア、お磯さんと二人で若旦那様を持合にする氣で、もあるやうに、申すんで御座いますもの、誰が貴方、畜生ぢやアあるまいし、そんな真似をして居ながら、二人が仲を好くすることが出来るもんで御座いますか、わたくし口惜しう御座いましたから、散々お種さんと云逆つて、とうとうやゝめたんで御座いますの、さう致しますと、今度は御嬢様が太層御憤り遊ばして、お磯はもう一時も傍へ置かれぬから、早々東京へ歸ろつて被仰るんで御座います、此所迄立て續けに云つて、吻と息をする

後では、岡部が小聲で川瀬に調戯ふ様子である「ちと遣り過ぎる程の遣り手だ、いゝかえ、君に制御し切れるかえ」なほ、平手で脊中をたたく音もする、けれども、川瀬は息もしないかと思はれる程押黙つて居るのである

「それで君は、東京へ歸つて玉井の邸宅に居るのかえ」と俊郎は問ふ「いゝえ、何もわたくしは下女奉公をして居る譯ぢやア御座いませんし、行儀見習の爲に、給金なんか一文も頂かない上に、自家から毎月相當の御禮をして、御嬢様の御相手に上つて居るんで御座いますから、お種さんなんか口汚く云はれる趣意は御座いませんです、況して、御嬢様迄がお種さんとぐるになつて、わたくしを、下女か何ぞのやうに出て行けなんて、人中で耻を御搔かせなすつたんですもの、もう、恨こそあれ、御返し申さなければならぬと思つて申すものは御座いません、わたくしはもう、東京へ歸つても目白の御邸宅へは伺ひません、直ぐ藏前の自分の家へ参りまして、事由を精しく兩親へ話し、父に御邸宅へ上つて、公然に暇を頂いて、荷物を持つて下つて貰はうと存じます」「やア、益々特色を發揮するね」と俊郎もやゝ呆氣に取られた形「如何でせう、御荷物が随分重う御座いますから、御話は御歩行ながらになすつて下すつては」苦しげな仁藏爺々の聲に、氣が附いて見れば、老人の脊中には、行李だの合財囊だの、色々な物が載つかつて居るのである

其八十四

「やア、爺やに荷物を背負はして、何所へ行く積りかえ」と、俊郎が不審を打つ「え、御話申上げる事があんまり多いもんで御座いますから、まだ此地へ参つた譯を申しませんでした、わたくしは、若旦那様とお磯さんに生命を助けて頂いた御恩が御座いますし、それに、どうした譯で御座いますかお磯さんが懐しくつて堪りませんんで御座いますから、東京へ歸ります前には是非御二人へ御目に掛つて

此事を申し上げました上に、これから長く御交際を御願ひ申したいと存じまして、今晚はお磯さんのお家へ泊めて頂く考へで参りまして御座います」と、歩きながらお京が話す。「成程」と俊郎が首肯くに折重ねて「それで、もう此地の御別荘の前は素通りをしまして、真直に俵を荒物屋さんへ著けやうと存じましたが、あの結構な爺やさん婆やさんに知らない顔をするのも不人情だと思ひ返しまして、ちよつと暇乞に寄りましたら、荒物屋さんには、込み入つた相談の寄合がある筈だから、もつと後に行くが好からう、荷物は背負つていつてやるからまあ上れつて、親切に云つて下さるもんで御座いますから、つひ上がり込んで色々御馳走になりました上に、かうして御苦勞を願ひまして、これから荒物屋さんへ参るんで御座います」と、こゝに全く一部始終を述べ了る。

すると、其尾に附いて、仁藏爺々は深い溜息を吐き「若旦那様が、玉井の御家と縁を御切りなすつて、追ん出て御了ひなさる、まあどうした事だらうと、悔りした胸の動悸がまだ収まらない中に、又候お京さんが出し扱に御出でなすつて、聞けア矢ッ張り玉井の家を出なすつたんだ、これぢやア、爺や婆やの身の上も心細い、玉井の御家が頼もしくない、わたくし共もどうかしなけれアなるまいと、もう心で覺悟して居ります」と、つくづく考へたやうに訴へる、俊郎も思はず嘆息を漏らしたが「我々は自分勝手な追ん出るので、爺や婆やはそれとちがふんだから、まあ穩當に玉井の家に居るがよい、玉井の主人は、損得の勘定に扱目がなくつて、利のある所に附くと云ふ人間だけれども、あれで

義理人情を知らない奴だと世間の人に思はれることが、非常に嫌ひな人だから、決して、年を取つた爺や婆やを悪くすることはないよ」と慰めた

これからは、五人揃つて無言で足を進めたが、伊豆屋の前へ行くと直と立停つた。君達は宿で待つて、呉れ給へ、お京君を連れてつて、荒物屋へ頼んで来るから」と岡部川瀬の兩友に向つて云ひ「お京君は、真代子なんか長く使はれて居るべき人間ぢやアないから、何時かこんなはめになるだらうとは思つてたが、こんなに早く片が附いたのは案外だ」と、獨語のやうに續ける「ぢやア、僕等は宿で待つて居やう、君、今夜は荒物屋へ泊るんぢやアないのかえ」と、又岡部が皮肉をやる。馬鹿云へ何しに僕が泊るもんか」「差支が無けれア、川瀬を連れてつたらどうだ、野郎行きたがつてうぢくしてるから」「失敬な、貴様ぢやアあるまいし」と、川瀬大いに慣る「おは、これア可笑しい己が何で行きたいことがあるもんか、奴さん、腦中の秘密を云ひ當てられて、甚だ狼狽の様子だ」と岡部が身を揺つて打興する「おい、岡部、ちと口を慎まなにか」と俊郎は沈んだ調子で窘める「ぢやア行かう」と氣を變へた俊郎は、仁藏爺々が背中中の荷物から、大きな合財囊を一つ引抜いて手に提げた、これだけでも可なりに重い「これで少し楽になつたらう」「これア、どうも濟みません、もう直きですからよう御座いますのに」と、爺々は只管恐縮する「若旦那様、わたくしに持たして下さいますし」「君には荷が勝ち過ぎるよ、いゝから僕に持たせる」「だつてあんまり失禮で御座います

もの」と、手を掛けさうにする。「二人で持つのかえ」「ほ、お磯さんと御二人で水桶を御提げなすつたことが御座いますのね、お磯さんが見て、氣を悪くなさるといけませんですから、勿體ないけど、若旦那様だけに御持ちを願ひませう」「厭だよ君、人を冷かしちやア」と、俊郎は少し照れる。「ほ、」「は、」「爺や迄が厭に笑ふ
 其中にお磯の荒物店が近くなる

其八十五

「お京君、先に行つて驚かしてやり給へ」と俊郎が云ふに、お京は一秒時も早くお磯に逢ひたいらしく「お磯さん」と懐かしさうに聲を掛けて、突と店へ入る。「何方？」と現はれ出でたお磯は「おやお京さん、どうしてまア」と、意外の喜びにお京へ飛び着く、そこへ、俊郎と仁藏爺々々が、重荷を持つて入つて來、しかじかと其事由を話す。「それちやア、貴女も矢ッ張りわたしの爲に、まア、どう致しませう、御氣の毒様ですわえ」と、お磯はお京を念じるやうに見上げる。「なんの貴女、わたし却つて斯うなつた方がいゝのよ、これからは、貴女とわたしとは姉妹よ、貴女も御同胞が無いし、わたしも、兄が一人あるだけで、女の同胞が無いんですから、いゝでせう、そして、今晚は泊めていたゞくことよ、貴女の御傍へ寝かして頂戴よ」「それはわたしの方から御願ひ申すことですよ、今晚と被仰

らず、幾日でも飽きる迄御泊りなすつて下さいまし、さア、どうぞ御上がりなすつて」彼事以來、血色勝れぬながらも、日に増し白くなつて、物云ひ身のこなしに沈着が見えて來たお磯は、だゞ子らしく御俠なお京に比べて、却つて姉らしいのである。

「まア、若旦那様から」とお京は讓る。「ちやア、暫くお邪魔をしやうか」と、荷物を跨いで俊郎が上がる。「御免下さいまし」お京も續いて上る。「どうぞ此方へ、爺やさんも、上つて憩んでゐらつしやいまし」「わたくしはもう御暇します、夜分は、婆を獨り殘して置くに淋しがりますから……、あれでも、自分の物だと思ひますと、鼠に引かせるにやア、ちとばかり惜しう御座います、へ、」「爺やさん、此所に獨者が居ますだアよ」と、お磯の母が暖簾を潜つて現はれる。「やア、御内儀さんにさう云はれちやたまらない、御免々々」と頭を掻き「お京さん、明日は、若旦那様やお磯さんと御一緒に、別荘へ御出でなすつて下さいまし、へえ、何方も左様なら」と御辭宜をしいく出て行く。「御苦勞様でした、眞誠に有難う御座いました」と、お京が後から禮を云ふ

四人打揃つて奥へ入る

「若旦那様もお磯さんも、これからどう遊ばす御考へで被在いますか、それがわたくしの氣になりますんで御座います、御差支が無くば、わたくしのやうな者でも、どうぞ御相談相手になすつて、下さいませんでせうか、お京は座ると直ぐ斯う云ふのである、てきはさきと事を進行する性分、何でも道つて

退けさうで、如何にも頼もしく思はれる、喜代子の下を離れて、もう誰に遠慮も要らないと、思ひ切つて満艦飾を施したのであらう、始めて秋谷へ来た時の銘仙の緋とはちがつて、明石縮の白地に水色で矢絣を置いた單衣に、朱鷺色縮緬の長襦袢、帯は果して紹縮珍で、兩の袂を長く膝の傍に引き、頸筋細く島田の鬚高く、生きくした顔は、層生きくして、頬に薄紅を刷いた鮮さ、令嬢風にあらず粹肌にあらず、由緒ある町家の娘と見えるのである。

之を思ひ込む男のあることは怪むに足らないが、どちらかと云へば、岡部が好きさうな肌合で、川瀬が此娘に夢中になるとはちと案外である、けれども、氣質のちがふ所が、却つて相投する所以かも知れない、川瀬に無い物がお京にあつて、お京に無い物が川瀬にあるのかも知れない、さうして、事に當ると態度は飽迄も眞面目で、人に雷同せず自分の主張を貫く所と、それからお磯に格別重きを置く所とが、二人がちがふ氣質の中に一致する點なのである。

ちよつとの間に俊郎は斯う考へて、獨り興味を覺えたが、たゞそれを味つてばかりは居られない、お京の云ふ事に答へなければならぬ、「實は其事で途方に暮れてるんだよ、僕はお京君も知つてる通り、磯ちやんの御父さんの死際の頼みを受けたんだから、何所迄も磯ちやんの爲に盡くさうと覺悟し其爲に玉井の家も追ん出て了つたんだが、秋谷に斯うして居たつて仕様がなから、御母さんにも磯ちやんにも東京へ出て貰つて、僕は相當の職業を見附けて金を取り、それで二人が暮らして、磯ちや

んに何か修業させやうと思ふんだがね」と云ひ掛けて語を切る「それア、まア、御大抵ぢやア被在いませんですねえ」と、しみじみ身を入れて聞く「それアなアに、暮らし向や何かの事は、困らないだけに金の取れる見込はあるんだが、こゝに一つ、差當つて困ることが出来たよ」云ふとお京は目にはばいの張りを持たせて、すつと膝を進め「失禮で御座いますが、わたくしの家は、藏前で酒屋を致して居りまして、ちつとは貯へも御座いますから、若し御引越しや、東京で世帯を御持ちなさるに就いて御入要が御座いますのなら、百や二百の御金はどうでもなります、それに、父は俠氣の御座います方で、頼まれ、ア、随分見知らずの人の爲にも肌を脱ぎたがる癖が御座いますんですから、わたくしの生命の親の御二人さんが御困りなさるのを、黙つて見て居る筈は御座いませんです」と、自分の言葉を保證するやうに首肯いて見せる。

其八十六

俊郎が困ると口を切つたのは金の事ではないが、氣の早いお京は、先を潜つて俊郎がまだ云はない事情を握つたのである。

一有難い、事に依るとさう願はなければならぬかも知れないが、それより先に、差當つて困る妙な問題があるんだ」「へえ」と、お京は拍子抜けの體、且つは多少極りも悪い様子「其事も君に聞い

て貰はなければならぬがね、實は斯う云ふ譯なんだ」と、お磯の伯父が俊郎に久平の遺族を引受けさせることを厭がつて、東京へ出る妨げをする次第を話し、此家と店との處置に困つて居ることを告げ、田舎は斯う云ふ場合に仕様が無いと歎息する

小首傾けて聞いて居たお京は、暫く間を置いてから屹と顔を擧げた「出過ぎるやうで御座いますけど、詰まり、それも御金さへあれア片の附くことで御座いますんでせう」「結局はさうさ」「左様で御座いませう」と、又深く考へ込む「僕が玉井の家を出て、金銭の自由が利かなくなつたと思ふから、詰まり、磯ちゃんや御母さんの行末を案じてさう云ふんだ、だから、伯父さんとしちやア、別に悪い料簡ぢやアないんだけれども、僕を信用して呉れないのが些と残念だ、家と店の始末に困らして、譲受ける者や借りる者があつても邪魔をしやうとは、御母さんの前だが、あんまり意地が好くないよ、それア、君の云ふ通り、金さへあれアどうでもなる、東京からでも何所からでも、人を備つて来て留守居をさしてもいゝし、又さう迄仕なくつても、金を見せて相談をし直したら、伯父さんも安心して、むづかしい事を云はないだらうと思ふが、其金がちよつと纏まつて居なければ話にならないからねえ」と下目を使つて云つて、屈托の溜息を吐く「差當り二三千御座いましたら、御間には合はないでせうか」と、口早に云ふ「それだけあれア十分だけれども」「ちやア、一つわたくしに働かして下さいませんか、わたくしを嫁入させる時の費用にと、確かそれぐらゐの御金は別にしてある

筈で御座いますから、一生懸命父に説きましたら、御用立てないとは申さないでせうと存じます」と熱心を以つて鐵石をも動かさうとの意氣込み、双の頬は燃ゆるが如くになつた「有難い、其志は有難く受ける、けれども、實際君にさうして貰つちやア濟まない、唯だ志だけを受けさせて呉れ給へ、俊郎の面は輝き渡つた「お京さん、御親切は死んでも忘れませんよ」と、お磯も顔に血を漲らせる、「いゝでせうお磯さん、若旦那様はあゝ被仰るんだけど、貴女とわたしとは姉妹ですもの、姉妹の仲でする事ですから、貴女は受けて下さるでせう」「だけと」「いけなくつて、何故」「貴女の御嫁入のお金を貸して頂いて、萬一御返し申されなかつたら」「いゝことよ、又阿父さんに出して貰ふんだから」「だつて」「面倒臭けれア、わたし御嫁になんか行かなくつてもいゝのよ、それでもお金を返せつて云つたら、わたし自分で商ひでもして、儲けてから御父さんへ返すわ」

深紅の寶玉が春の日に輝くやうな、お京が爛熳の美に打たれて、俊郎は思はず恍惚となつた「あゝこんな所を川瀬に見せたら、直ぐに生命を召上げられても満足するだらう」と、我を忘れて漫に友人の秘密を漏らす「……………」お京に怪慳の顔を斜にする「何と被仰いました、お磯は不審を聲に表はす「やア、こんな事を云ふ場合ぢやア無かつた、いやなに、僕と一緒に來てる背の高い方の男は、先刻も紹介した通り川瀬と云ふが、大學に居る時分も、勉強しないのに人より好く出來、氣が利かないやうに見えて凡人の及ばない傑い所がある、第一體の厚いことは此上なした、其男が、お京君を娶めて

「神様のやうに有難がつてるんだよ」と、せう事なしに、半分だけほめかして「さう、さう」と、お京は今迄の紅みとちがふ紅みを目の周囲に刷き、普通の乙女とちがはない唯だ耻かしい色になつたが「只今申上げましたことは如何で御座います」と、腰が折れて立消になりさうになつた金銭問題を、立て直して撥ぎ出す

俊郎も真面目になつて「ぢやア、斯うして呉れ給へ、川瀬や岡部と相談しかけてることもあるんだから、宿へ歸つて、君の折角の志をも二友へ話し、明日又改めて此家へ御邪魔をして、一同で相談をし直す」と云ふ事に、重苦しく述べる

これで俊郎は引上げるのである、今日は二度荒物屋へ来て、結局一つも話に極りが着かずに了つた荒物屋に取つては、久平が横死した以來の波瀾の多い日であつたのである

其八十七

宿へ戻つて見ると、二階の一間に、裏手の窓を明けて海の風を納れながら、其風に灯を消されまいと、洋燈を片隅の壁際に置いて、遠く離れた所に盤を据ゑ、二人が半分手探りのやうに將棋を指して居る

「氣の長い眞似をしてるぢやアないか」、入りながら聲を掛けると「だつて、君は左右から別嬪に扱ま

れて、急に歸つて來る摸様が無し、態々秋谷迄引張つて來て座敷半へ入れられたやうで、退屈で仕様が無いから、些も面白くないけれども、暇潰しにやつてるんだ」と、岡部が面を膨らせる「岡部の奴、弱いもんだから詰らながるんだよ」と、川瀬は勝に乗じて居るらしく、ほく／＼顔をして、盤の横を駒でばかり、又ばかり「へん、野郎お京君を手に入れやうなんて、柄にも無い野心を懐いてるもんだから、指し方が悪く執拗くつて、いやになつちまふ、面倒臭いから態と俗を舐めさせてやつたら、嬉しがつてやアがる、僕はこれで、女に甘い奴は何にも甘いと云ふ原則を發見したんだから、得る所盡し小ならずだね、結局大勝利大勝利」、岡部は倦じ果てた顔で、泥酔漢のやうに手を拍つ「さア、王の居所の隣は雪隠だ、桂馬もあれア香車もある、どうする／＼」「え、面倒臭い」と、ばら／＼手に握つた駒を投出し、盤の上を渦巻に掻き廻す岡部の無法に「何をすると、川瀬が口を尖らす

「おい川瀬君、そんな事はどうでもい、ぢやアないか、お京、いやお京君、僕もこれから、君に對する敬意と本人に對する敬意とからして、お京君或はお京さんと呼ぶが、いや實に見上げたもんだ、今晚こそは僕も實に敬服した」俊郎が、感に堪へた聲を押し出すと、見る／＼川瀬の尖つた口は平になつて、だんだん横に廣がつて來た「ゑ、君、彼女がどうかしたのかえ」、もう將棋なんかの事は忘れて了つた様子である「見ろそら、涎が垂れる、彼女がつてやアがる、へッ」、岡部は傍で憎さげに唇を反らす「一口云へば、後は使替若しき女だわ、自分の嫁入の時の費用にと、父が驛み立ててある二三

千の金を出して、僕とお磁に難關を通り抜けさせやうつて云ふんだ。それが、お世辭でも、自分の家の自慢でも何でも無い、熱誠を面に漲らして、下手に此方が謝絶したら、たゞで済ますまじき見脈なんだからね、萬一其金が無い爲に嫁入が出来なかつたら、嫁入なんかしなつてもいいとよ、何と云て形容したらいいか、真誠に、あの時のお京君の顔は、一目川瀬に見せたかつた」「む、そうか、川瀬は身動きもせず首ばかり括る「感心して聞いてやアがる、嫁入しないと極めたら貴様の物にもなるまい、それに感心してどうする、馬鹿な奴だ」と、岡部が又混せッ返す「若蠅いッ、貴様は斯う云ふ時に黙つてるもんだ」「斯う云ふ時にも口を明かなければ、俺が一番儲からない役だ、混せつ返されるのが厭なら、俺にも一人周旋しろ」「岡部、頼むから黙つて、呉れ、真面目の話なんだから」と手をかざして「それで君は、お京君に其金を出させる氣かえ」と、息を弾まして川瀬は俊郎に向ふ、「真逆そんな事がされるもんか、けれども断ると憤るし、又、断つたら却つて意地になつて、どんな事でもして金を持つて来て僕とお磁の間に投げ出しもし兼ねない氣性なんだから、僕も持て餘しちまつて、君達二人と相談し掛けてる事があるから、二人と打合はして見なければならぬ、仕様が無いから逃げを張つて置いたんだが、今迄は金が出る當てが無くつて困つたのに、今度は金が出る當てがある爲に弱らせられる、世の中と云ふものは妙なものだなア」

俊郎が此語は、川瀬に腕を組んで目を瞑らした上、混せッ返し屋の岡部にも感心の眸を輝かした

やゝあつて、組んだ腕を解いた川瀬は、涙と兩眼を開いて「宜しい、僕は國へ行つて来る」と、眞二つに物を断割るやうに云ひ切つた「何故國へ歸るんだ」俊郎が不審の訊ねに岡部も同じく眉を顰める

其八十八

川瀬はインスピレーションに打たれたかとはかり、びりりと顔の筋肉を動かしたが、その鎮まるを待つやうに凝乎としていさゝか時を移し、愈々説き出だした時には、もう例もの通りの、平氣で少し間の抜けたやうな態度に復つて居る一國へ行つて、先づ母や叔父や親類共と喧嘩するんだ」と濟ましたもの

「益々判らなくなつて来る、何故態々喧嘩なんかしに行くんだ」俊郎は呆氣に取れる

「何時か君達へも話した筈だが、僕の家は伊豫の東部の舊家で、僕が其戸主だ、可なりに財産もあるけれども舊弊の頑固な家で、僕はまだ若いから財産を自由にすることが出来ない、母がやかましい上に、叔父が監督者で、屁を放つたやうな事にも親類會議と来る」切れくゝの調子で、緩々と語り出す「不相變、話が藪から棒で、お負けに廻りくどいから、要領を得る迄には、餘程辛抱しなければならぬ」と俊郎が咄く「止せ、眠くなつて来る、ごうく」岡部は身を横にして鼻を掻く真似をする「真誠に君、だんく、夜が更けるばかりだから、手ッ取早く話して呉れ給へ、蚊が居ないから吞氣

に斯うして居られるんだ」と俊郎も焦れ出す「いよ、我々が勝手にやるからつて、蚊帳も寝床も隣の座敷へ置かしたから、何時迄起きてたつて、誰に氣の毒な事もありやアしない」「困るよ君、其親類會議がどうしたつて云ふんだ、それが、お京君が自家から金を持って來ると云ふ問題と關係があるのか、俊郎は益々焦れる「大にあるさ」「ある?」「まア焦らずに聞き給へ、僕がお京君に代つて、自家から金を持って來て、君とお磯君とに用立てやうと云ふんだから、さうすれアお京君のすべき事を僕が代つてするんだから、彼女の顔も立つし、嫁入の費用を無くして彼女が困ることも無いんだらう」「ふむ、さうすれア、君は國へ歸つて、舊式な御母さんや叔父さんや、親類の八釜いし先生達と衝突を始めて、無理に金を持ち出さうつて云ふんだな」「少し話の形が附いて來たな」と岡部は目を開いて頬杖突く「僕は、こんな事が無くつても一度は遣らうと思つてるんだ、何かの資本にするつて嘘を吐いて、どうせ田舎の家には現金が無いから、山なり田なり賣り飛ばしてやる」「嘘を吐くのは酷いね」と俊郎は少し反身になる「僕の物だけけれども、八釜いし事を云つて出しやアしないから、嘘を吐くけれども、嘘を吐いたつて滅多に出さないから、喧嘩をする決心だ」中音で無難作に云ひ切る「酷い決心だね、けれども、其好意だけは感謝する」「僕に感謝しなくつてもいい、お京君に感謝するのが正當だ」「さうかね、俊郎もせう事無しに眞面目な顔になる「吉田、やらせろ、此唐變木に金を出させろ、そんな田舎の片隅に、木や土にして腐らして置く金を、引出して使つてやるのが却つて慈善だ」

と岡部は起上がつて胡坐になる「川瀬君、君眞誠にさうする氣かえ」と笑顔になつて俊郎が云へば、當人が答へる前に蚤くも岡部は引取つて「大丈夫だよ、かうなると川瀬は遣れないことを云はないから、それに、野郎此機會に乗じてお京君に接近しやうとの野心があるんだ、二三千圓とは高い接近料だね」と冷笑ふ

俊郎は暫く考へて「又一つ困る事が殖えた、金が出る當てが多くなればなる程、困る事が随つて多くなるよ、世の中にこんな不思議があらうか、ぢやア斯うして呉れ給へ、お京君の發案に就いて、明日君達にも行つて貰つて、改めて相談すると云ふ事にして來たから、其の場で一つみんなの考へを極めた上に、何方も無理だけれども、何方か一方に働いて貰ふことに」と云ひ出した「それも好からう」と岡部は同意する「僕はお京君がそんな金のある家の娘であることを遺憾に思ふ」と川瀬は痛く慨嘆の思入になる「いよ川瀬屋ア、これで暮だ」と叫びながら、岡部は立ち上がつて隣座敷へ飛んで行き、蒲團や枕をどしどし抛り込む

其八十九

目を覺まして見れば、日影が三人の顔に蚊帳の布目を繪いて居る

俊郎は枕許の懷中時計を取つて見て「起きろ、もう十時だ」と叫ぶ「なに、十時だ?」と岡部

が飛び起る「十時になるのかえ」と川瀬ものろく起き出る「なんだ、人を起して置いて、自分が寝てるッて法があるか」と、岡部は俊郎の枕を引ツたくる

葵乎と蒲團の上に頭を置いて、「昨夜は目が冴えて、殆んど眠らなかつたもんだから」と、だるさうに両手を長く延し、指を開いて碯々疊を打つ「へん、近い所に本尊が居るから、心が引かれて寝られないんだらう、大概にしう」と、岡部は、俊郎が延ばした兩腕の真中を攫んで、身體を半分疊の上に引ずり出す「僕も昨夜は眠られなかつた、自分の枕許に胡坐を掻いて、欠伸をした涙を拭き、川瀬が殖やけたやうな聲で云ふ「畜生、此奴もか、さう左右から浴せられちやア、堪らないぞ」と背中をどやし着ける「痛いよ」「それで目が覺めたらう」

こんな事をして巫山戯て居る中に、何時の間に階子を上がつて来たか、廊下から「御免下さいまし」と聲を掛ける者がある「爺やの聲らしい」と、俊郎は起上がつて蚊帳を潜り出る

首だけ見せて居る者は果して仁藏爺々である、田舎の宿屋の呑氣さ、豫て知合つて居る仲であるから、取次もせずに通したのであらう「どうしたえ爺や」「へえ、旦那様が只今御見えになりました御座います」「なに、旦那様？王井の叔父さんかえ」「へえ」「玉井の叔父さんが別荘へ来たのかえ」「左様で御座います」「何しに来たんだらう」お京が突然遣つて来たのさへ既に案外であるのに、玉井の主人が遣つて来た——而も朝から——とは、案外の又案外でなければならぬ、俊郎は驚きと怪

とに全く我を忘れた、岡部も川瀬も唯だ目を圓くして居る

や、あつて俊郎は氣を沈著け「それで、何か僕に用でもあるのかえ」と、力めて物靜に問うた「へえ、まことに失禮で御座いますが、些と御話し申したい事が御座いますから、暫時別荘へ御出でを願ひたう御座いますッて、又、御都合に依つては、此方から伺ひましても宜しう御座いますッて、これは使者の口上で御座います、へ、仕舞に自ら嘲るやうな輕少の笑ひを添へる「いやに可憐で、何か態と人に氣味悪からせるやうだね、相對で絶縁した以上は態態僕に逢ひに来る必要は無い筈だが、何の用だらう」と首を拵つたが「兎に角行くことにしやう」と、屹と首肯いた

爺々は尤もらしい顔をして「これ迄は、旦那様に吩咐かつた通り、使ひの口上を述べましただけで御座います、小子の考へちやア、これア、若旦那様に御悪い事ぢやアなからうと存じます」と俊郎を見上げる、けれども「さうかね」と云つたけれど、俊郎は別に喜ばしい色も見せない「御承知の通り旦那様が世間體を御考へなさる仁で被在いますから、一旦の御腹立で、縁を切らう、他人にならうとは被仰つたけれども、後で胸に手を當て、御考へなすつて、どうもそれぢやア、自分が斯うして榮耀榮華に飽いて居るのに、かうなる本を造つて下すつた仁の御片見の若旦那を、ミア申さば路頭に迷はせるやうなもの御悟りになり、どうも濟まなかつた、まことに悪かつたと後悔なさると、矢も鉈砲も堪らばこそ、早く宥めて元の鞘に收め、御姫様との御婚禮も近い中にしやうと、それで朝早く鎌倉

を御立ちなすつて、大急ぎで被入つたものと存じられますが、如何のもので御座いませう」爺々只管勢ひ込んで臆測を逞しうするのである

聞いて俊郎は顔を盛めた、自分も爺々と同じやうに推測して、迷惑至極に思つたからである

其九十

二三十分経つてから伺ひますと云つて爺々を返し、急いで顔を洗つて、急いで座敷を片付けさせ、急いで飯を食つて立出でた俊郎は、途々考へて確と料簡を定めた

玉井照明が縦令本心から其身の非を悟つて僕を呼戻す氣になつたにもせよ、或は單に世間體の爲にさうするものにもせよ、そんな事は問ふの要がない、一旦奇麗に縁を切つて追ん出た上は、どんな事があつたつて臆面々々と戻られるもんか、戻つて、あの高慢ちきな、虚榮心の權化の、裏切者の、一旦顔に唾を吐き掛けてやつた奴と、許縁の關係を復舊することが出来るもんか、お磯を敵視しお京を追い出した奴を未來の妻とすることが出来るもんか、假りに百歩を譲つて戻つてやるとしたらどうだ、僕に手を掛けさせずに、どうにかお磯の片を附ける氣だらう、そんな事をされてたまるもんか、そんな事をさして済むもんか、僕が今玉井の別荘へ行くのは、彼が禮を以て招くから此方も禮を以て答へると云ふだけに過ない、これ以上に進んでは不可いし、亦これ以上は進むことは好まない、何と宥

めたつて、何と嚇したつて、密の垂るやうな甘い言葉を掛けられても、地獄の底に突落すぞと迫られても、頑として刳著けてやらうと、仁藏爺々の推了に自分の臆測を加へて其事に極めて了ひ、勢ひ込んで足を早めると、間もなく玉井別郎の門である

眞直に玄關に向はうか、横に向つて通用門から入らうかと、ちよつと立淀んだが、もう玉井の進家族でもないのに、遠慮に過ぎるは却つて禮でないと思つて、臆を固め、堂々と玄關から乗込んだ

「御免下さい、御頼み申します、頼まう」次第に聲を高くして三段に呼ぶ

奥から出て来る人の氣配がして、正面の簾戸が明いたので、現れる顔を爺やかと見れば、案外にも照明自身である、例の愛嬌ある肉の多い顔に、一ぱいの笑みを充たし「さア、上がつて呉れ給へ、聞けば一緒に友達も来て居られるさうだから、此方から伺はうと思つたのを遠慮して、失敬ながら御足勞を願つたんだ、さア、どうぞ此方へ」と、氣味が悪い程重きを置いて待遇する、愈々甘言を以て臨んで来たなど、俊郎は心に首肯いて、導かれる儘に奥へ行き、初めて来た家のやうに坐に著く

「買入れる約束をする時に一度、半分建直して出来上つた時に一度、それから此度と都合三度しか来て見ない上に、夏に来たのは今が初めてだが、暑い時分は思つたよりいゝ所だね、今日は、人の來るのを待つて晝過ぎまで居るんだから、まア緩り遊んで行くがいゝよ、何も御馳走は無ければ、は、御馳走の無いことは、私より俊さんの方が熱く知つて居なさる筈だが」と、用向でもない呑氣な

話をして、機嫌のいい事夥しい

「後から何方が被入るんですか」と問ひ掛けたのが、俊郎の口開きである「いや、聞いて御呉れ、實は、此別荘を譲受けたいと云ふ人があつて、話は大抵極つたんだが、家族を連れて来てもう一度熟く視たいつて云ふから、私は一足先に來て、此方で待つてゐることにしたんだ」と、更に方角のちがつた案外さ加減である、此別荘、僅の月日に種々の波瀾を作つた自分の歴史と、大關係のある此建物、急に人手に渡ると聞いては、何と無く胸が波立つのである、けれども、俊郎は單に其感慨を味はつてばかり居られはしない、態々自分の爲に來たのではなく、別荘を賣りに來たついでに自分を呼んだものと判つては、少からず張合が抜けるけれども、それでも、特に呼んだには特に呼んだだけの理由が無ければならぬ、「それで、僕を御呼びになつたのは、別段御用ぢやアないんですか」と切り込む「さう詰問的に出給ふな、なアに、こんな別荘一つを賣ることだけの用なら、態々私が身を動かすにも及ばないが、それ以上に重大な問題がある爲に、朝から斯うして遣つて來たんだ、適切に云へば、別荘の處分が却つてついでの用向に過ぎないんだ」と、玉井は何所迄も笑顔である

俊郎は何か云ひたくつて口を動かしかけたが、玉井の云ふ事を仕舞迄聞いてからにしやうと思ひ直して黙つた

其九十一

爺やが茶を入れて持つて來る「あゝ、網蕨の方に奉果が入つてゐる筈だから、出して來て呉れ」「へえ」と、爺やは退く

「俊さん、君は時代の新しい人だから、我々のやうな頭腦の古い人間と、まるつきり考へがちがふのは、少しも怪むに足らない、だから私としては、それは此方の考へとちがふとだけ云へるけれども、いゝとか悪いとか、君の料簡を批評することが出來ない、詰まり批評する資格が無いんだ」「おやおや、此方が云はうと思つて居ることを、あべこべに先方から云ひ出されたら俊郎は臆を消す「だから私は一切俊さんの行動に干渉しない、君は君で自由に遣つて貰はうと思ふ」こんな判つた事を云つて貰へる筈ぢやアなかつたのにと、俊郎は益々案外に思ふ「それに、喜代の事だが、私の見る所ではまるつきり俊さんと肌合がちがふやうに思はれるが、どうだらう、二人夫婦になつたつて圓滿な家庭は造れまいと思ふが、どうだらう、彼女は天性の我儘者でもないやうだが、甘やかして贅澤に育てたのが親の過ちだよ、君だつて、義理で彼女を背負込んで困るだらう」とどうして斯う人の肺肝に分入つて、此方の云はうとして居ることを云つて呉れるだらうと、少し氣味が悪くなる「だから、御互に城壁を設け合はずに、こゝでさつきばらんに打明けて、君に都合のいゝやうに極まりを著けやうぢやアな

いか、いや私は御爲ごかしを云ふんぢやアない、さうした方が此方の爲にも都合がいゝんだ、今の中ならどうでもなるけれども、これから一步進んでは、双方共取返し著かない不幸に陥るかも知れないからね、成程、むゝと俊郎は始めて玉井が遠廻しに云ふ眞意を會得して、冷笑を含みつゝ首肯いたけれど、玉井は俊郎の様子などに頓著せず、すん／＼話を進めて「そこでだ、話は早い方がいい、から、無駄を省いて直ぐ要點に入ることにしやう、喜代は喜代で、柄に相應した所へ嫁入させ、俊さんは又俊さんで、自由に適宜の細君を求めて貰ふとしたらどうだらう、けれども自由の行動を取つて貰ふからと云つて、何の筋道も附けずに君を突放すやうな、そんな無情なことは私に出来ない、又さうしては君の亡父さんに濟まない」話が更に案外の方向を指して来たので、俊郎は又譯が判らなくなつた「第一、確に俊郎の事は引受けたと誓つた私の言葉が反古になる、私の男が立たない」男が立たないなど、柄にも無い事を云ふと、俊郎は可笑しく思つたが、扱て、肝腎の玉井の眞意はまだ判らないから、黙つて其先を聞かうと構へる「少いけれども、君に自由の行動を取つて貰ふ門途の贖けとして、現金で二萬圓進呈したい、但し、何か事業の資本にしやうが身を立てる迄の生活の費用にしやうが、人の爲に使はうが、湯水のやうに使ひ果さうが、私も、一旦君を自分と時代がらがつて解釋することの出来ない人間と極めた以上は、其使ひ途を問はないのみか、使つて了つた上にも、決して残念だとか惜い事をしたとか云はない」

281

二萬圓！二萬圓の聲は俊郎の胸に激しく響いた、口で云ふ二萬圓は左迄の大金でない、云ふべき場合に於いては、二萬圓の百倍でも僅に二百萬圓と云へることがある、けれども、今金の入要があつて困つて居る場合である、二三千の金があれば立派に片を附けることが出来るけれども、其二三千さへ友人知己に一生の運命を犠牲にするやうな酷い工面をさしても、確に出来るか出来ないか判らない場合である、そこへ持つて来て、思ひ掛けなく、二萬圓の金が現に耳を揃へて自分の手に下らうとするのである、大金と思ふまいと思つても、事實大金だから仕方が無い、尤も、考へて見ると、それは、玉井が自分の身の爲を親切に思つて呉れて出すのではないと云ふことが別る、眞誠に自分を思つて呉れる慈悲の心から出すのなら、そんな、自由の行動を取つて貰ふ門途の贖けたの、湯水のやうに使ひ果さうが構はないのだと、芝居じみた小説じみた、血の氣の多い青年や、淺薄な突飛漢に、譯も無く呀と感心さして場當りを取りさへすればいゝと云ふやうな態度は、取らない筈である、要するに、自分を今迄に仕上げて呉れた上に、纏まつた大金を出して、將來獨りで立ち行くやうにしてやつたと、世間に觸込む材料を造るのである、天晴れ義の固い人だ、俠氣のある富豪だと、世間の同情を買ひ、人氣を集むる手段に外ならぬのである、二萬圓を與へられる自分は、玉井を輝かす引立役になるのである、犠牲になるのである、其結果として玉井の更に利得する所は、何百萬圓か何千萬圓か判らぬ、詰り、今出す二萬圓は遠からず其百倍千倍になつて戻つて来ると云ふ、ちやんと算盤を立てた上の事

にちがひないのである、其上、推測を進めると、或ひは、自分に喜代子を呉れては不経済であるといふ考へが、玉井にあるのかも知れない、己れと同等若くは同等以上の者の子に呉れて、其縁者となり兩方の金力を一つに固めて財界を切り崩しやうと云ふ魂膽がある爲、これを機會に體よく自分を引離し、後で自分にも苦情を云はせず、世間からも非難を受けまいとの爾後策かも知れないと思はれて來る、いづれにしても、有難い志でないことは確である、けれども、どう否定して見ても、今自分の手に下り掛けて居る二萬圓の、事實上自分に對して大金であることは打消されはしない

斯う考へて來て、頭腦が糸の亂れたやうにこんがらかつて居る所を「どうだね、異存無く受けて呉れるなら、今直ぐに出すが」と、貰うことを催促される、有難がらして出さうと云ふのであらう

其九十二

有難う御座います、頂戴致しますと云へとはかりに、玉井は盛み掛けて催促する

二萬圓！現金！俊郎は今絶壁の上に立つて、其下の深い淵に棲む妖魔の手に引入れやうとするのである、ぐら〜と目が眩んで、よろ〜と身體が前へ傾く、危い！實に危い！

二萬圓と云へば、十圓札で二千枚、百圓札にしても二百枚である、それを今引摺んで行つて、あの意地悪く出るお磯の伯父の前へ、すらりと並べて見せたらどうだらう、何と云ふだらう、どんな面をす

るだらう、あゝ、それが見たいものである、それだけの金があれば、荒物屋の留守居を東京から頼んで來ても差支へがないし、伯父がいくら妨げやうと焦つたつて、痛みも痒みも此方の身にやア通りやアしない、それに、伯父だつて腹の底をたけば、何も無意味に妨げをしやうとばかりの料簡ではないらしく、お磯の聲に其方の次男を据ゑやうと云ふ當てが外れた故もあらうが、第一は、自分を金の蔓に離れたものと認めて、妹と姪との身の上を劍呑に思ふ親身の情が働くのであるらしい、して見ると、それだけの金を見せたら無論喜んで意地悪い態度を改めるべき筈である、それでもまだ面倒臭かつたら、百圓札の二三枚も、あの獅嚙ッ面へたゞき著けてやつたら、いさこさ云つたつて、泣寝入になるだらう、さうしてから、お磯と母を連れて東京へ出る、お磯には思ひの儘に何かを修業させることが出来るし、自分も其金で何か遣つて見ることが出来る、先方が呉れたがつて居るのである、呉れるのが先方の爲に利益なのである、氣の毒な事も濟まないこともありアしない、えゝ、貰つてやらうか現金二萬圓！

「どうだね、さう考へることはあるまいと思はれるが」と又も玉井に催促されて、思はず「えゝ」と答へたが、急に骨髓の底から迸つて激しく胸を衝く所の、一種の暗潮のやうな感念がある、いや〜、今此所で、金の欲しさに玉井の恩恵を受けては、今迄負うて居る義務の上に又一つ重荷を加へるやうになる、何時か一度は報ひをしなければならぬのに、其方針も立てずに恩恵ばかり矢鱈に受けるは無

責任である、陋劣である、況して、一旦玉井の助けは受けまいと心に誓ひ、其人に向つても立派に口に出した上である、其娘の面に唾を吐き掛けた上である、金と聞いて、前後を忘れて、夢中になつて誓ひも言葉質も忘れ、咽喉から手が出るやうな醜態を現して、唾を踏潰したやうに身を平つたくするなどは、吉田俊郎縱令餓死するとも爲すべからざる事である、そんな事をするは亡き父を汚すものである、亡き父は、自分で方案を授けて玉井を儲けさせながら、勞力に對する正當の報酬の外一厘も請求せず、且つ之を受けることを拒んだのである、さうして一生を清貧に送つて、其志未だ成らざるに病の爲に壽命を奪れたのである、自分は新時代の子であるから、父の如く唯だ片意地にばかり世を渡つたつて仕様が無いと思つては居るが、社會の調子に應じて駆引をしても、氣品だけは、父の子に耻ぢぬやう高く清く持たうとの心掛を忘れないのである、然るに、今玉井が二萬金を自分に贈らうとは父の御蔭を被つた昔を思ふからではないか、父が受けなかつた金を子に受けさせやうとするのではないか、父は受くべき趣意があるのをも受けなかつたのに、子として受くべき趣意のない金を受けられやうか、これを受けるは侮辱を受けるに齊しい、人の侮辱を甘んじて受ける上に自分で父を侮辱するものである、どうしてそんな事が出来やうか

双の拳は何時しか知らずくに握られ、それが膝の上に打震へるを覺えた時に、俊郎は凜として顔を擧げた、同時に胸を衝いて來る感念は亡き父の遺傳性から發したものだと思つた、亡き父が自分

の胸に懸つたと感じた「折角ですが、それは頂戴致しません」と眞四角に身體を固くして云ひ切つた「受けて呉れない？」玉井は呆れたやうに手を突出す「若し、二萬圓で不足なら、株券か何かで、もうその半分ぐらゐ出していいが」と吐くやうに言葉を續ける

其所へ、爺やが卒業の剝いたのを四つ宛に割つて、小楊枝を添へて持つて來たが、目を圓くして玉井と俊郎との顔を等分に見比べ、暫し立つことを忘れた態である

「決して、不足だから頂戴しないなんて云ふ譯ぢやありません、頂戴しちやア僕の主義に背くからです、主義は千萬金よりも重いんです」胸りして息を引込む爺やが咽喉の響は、異様に高く聞こえた、「爺や、用があつたら呼ぶから、彼方へ行って居て呉れ」「へえ」「へえぢやアない、早く立たないか」「へえ、へえ」残り惜さうに立つて、振り返り行く老人の足取りの可笑しさ

其九十三

「俊さん、君は金を貰つちやア、主義に背くと云つたな、聲は妙に細く鋭く變つたが、顔は不相變笑を合んで居る、却つて、一際餘計に頬の皺を深くしたやうにも見える」「え、さう申しました」と俊郎は胸を張る「何時からそんな主義を推へた？」「大人になると一筋にです」「それぢやア、まア大學に入つた頃からだね」「其少し前からです」「纏まつた金を貰つちやア主義に背くが、少しづつ貰つ

たり、金のかゝることをして貰つたりするのは構はないのか」玉井は稍調戲面になつた「場合にも依りますが、まあそれもいけません」「ぢやア、君は主義に背いた事をして、大學を卒業したんだね」と、ざらり眼を光らしたが、直ぐ又笑顔に戻る「それが子供の時分から繼續して来た事の結果で情性で自然にさうなつたんです、ですから、僕は、其中に自分の出来得る最上を極めて、貴方或は貴方の御家の爲に、其報をせやうと考へて居ります」斯うは仕たり顔に云つて退けたもの、俊郎は自分乍ら随分勝手な云ひ草だと思はない譯は無い、理窟に外れた理窟であることは自分にも判つて居るけれども、騎虎の勢ひ、もう無理を通すより外は無ないのである「まるで、だゞツ子を強ねらしたやうだ」と、玉井は是非も無げに笑つた「其外に、もう御用は無いですか」ぐづぐづして居たら、内心金が欲しいのであらうなど、推測されるかも知れぬと、俊郎はもう暇を告げさうな構へになる「困るねえ、さう氣が短くつちやア、君のやうぢやア、とても世の中は渡つて行かれるもんぢやアない、もつと氣を煉つて、もつと腹を太くしろ」玉井は憤る張合も無いと云つたやうに、底から打解けた顔になる、笑顔の底から笑顔が湧き出した

それを耳にも掛けない體に見せて、御辭宜をせやうと兩手を突くと「まあ待つて呉れ、私が頼むから、どうぞ金を貰つて呉れ、眞誠に頼むよ、願ふよ、君だつて有爲の青年だ、二萬や三萬の端下金を持餘すこともあるまい、一つ之を活用して、玉井の親仁を驚かしてやらうとの意氣込になつて呉れた

ら、どんなに私が喜ばしいか、頼むから、もう強情を張つて呉れるな」と、玉井の聲は暖かみと潤ひとを含んで、人の肺腑に浸み入るばかりになつて来た

手を突いた儘、頭を低れて長まつたやうな形で、やゝ暫く黙つて居た俊郎は「宥して下さい、外にも頂かれない譯があるんです」と、苦しげに軋り出した「どんな譯かね」玉井は耳を傾ける「僕は喜代さんの顔へ唾を吐きかけたんです」「それは聞いて居る」と、平氣なもの「これ程迄にして飛び出したんですから、僕は、今後決して再び御家の御厄介にならない覺悟です、且つ、どんなに被仰つて下すつたつて、何の面目あつて再び御世話になられませう、況して、そんな大金を頂くことなんか、思ひも寄らない事です」と、句々及物で刻むやうにして出す「は、は、は、玉井は高く笑つた「そんな事に拘泥して、氣の小さい男だ、い、ぢやアないか、喜代は君が唾棄したものだから、勿論どう身が極らうとも異議などはあるまい、そこで、喜代だつて可哀相だから、君に棄てられたのを水野の件に拾はしてやる約束にした、だからい、ぢやアないか、もう濟まないことも氣の毒なこともありアしない、遠慮せずに金を受けて御呉れ、それから、君も勝手に細君の候補者を選ぶがい、は、は、は、もう候補者があると云ふ噂だね」云ひやうに依つては大變むづかしくなるべき事を、事も無げにさらさらと遣つて退ける老巧さ加減、何とも云はれぬ味がある

俊郎は、煙に捲かれて一時ぼんやりしたか、我に歸るといやな氣になる、何も喜代子に未練が残る

爲ではなく、推測した通り、自分が許嫁を破つたを幸ひと、同じ一代長者仲間の俵に喜代子を嫁はして、利害の關係を厚くしやうとの、玉井の料簡を確めたので、今更淺ましいと思ふ心が加はるのであるで、折角氣の毒になり掛けたのが又引つくりかへつた、なアに、先方は先方の勝手で金を呉れたがるんだから、此方ばかり人間らしく構へて遠慮するのは馬鹿々々しい、一つ圖々しく出て貰つてやうかと、むら／＼と其氣になり掛けたが、思ひ直して、いや／＼、それならそれでなほ貰ふことが出来ない、貰つたら自分の人間としての價値は零になる、乞食よりも陋劣に豚よりも醜穢になる、金輪際どうしても金は貰はれないと、確と最後の覺悟を極めた「思召は有難う御座いますが、どうしても頂戴する氣にはなれませんですから、どうぞ、金の御話はこれッきりに願ひます」

其九十四

親譲りの意地ッ張り、俊郎は飽迄も二萬圓を謝絶して、とう／＼態度を改めずに玉井別邸の門を出た、もう再び之を潜らない覺悟である

宿へ歸ると、岡部に川瀬は、氣配を聞き著けて下迄迎へに出ると云ふ待兼ねやうである「どうだつた、世間體が悪いから君に復舊して呉れるツてんだらう、矢ッ張り喜代子嬢の聲になれるんだね」と氣の早い岡部は、顔を見ると直ぐ斯う云ふ

それには答へず、階子を上つて二階の座敷へ入ると、後から岡部が追掛けて来て、俊郎の塞ぎ込んだ顔を覗いたが、又かと言はぬばかりに舌打した「どうしたえ吉田、それアあんまり固ッ苦過ぎるよ、復舊して呉れるツて云はれたら復舊するがい、ちやアないか、喜代子嬢の聲になれるのは幸福ぢやアないか、喜代子嬢を嫌ふなんて、冥利に盡きるせ、あ、判つた、お磯君と手を切つて了へつて云はれたんだな、一時にいくらかの金を出してそれッきり顧みないことにしろツて云はれたんで、それで塞ぎ込んでるんだな、い、ちやアないか、はい畏まりましたツて、其通りにするさ、さうして、五百なり千なり出さした金で、何か修業させるツて名義で、東京へ出さして荒物屋をやらせ、時々君が通つてくと云ふ寸法にするさ、そんな事に何心配が要るもんか、融通の利かない男だな」と冷笑ふ「なアに、そんな事ぢやアないんだ、まるつきり見當ちがひだよ」と、俊郎は詰らなさを表す苦笑ひ「なに、見當ちがひだ、そんなら復舊しろツてんぢやアないのか、可笑しいぢやアないか」「可笑しいツたつて仕様が無い」「ちやア、何故君を呼んだんだ、飽迄も君を憎く思つて、迫害しやうと云ふのか」「そんな下らない事があるもんか」「ちやア、どうしたツてんだ、焦らさずに早く云ひ給へ」「僕へ二萬圓呉れやうツて云ふんだ」「えッ、二萬圓ッ」「さうさ」「君へ二萬圓呉れやうツて云ふのか」「さうだよ、しつこい、而も、現金で今直ぐに」「えッ、現金で二萬圓を今直ぐに?」「馬鹿だなア、そんな孤憑見たいな面をして」と、俊郎は淋しく笑ふのである

息を弾まして、目を据えて、姑くは氣を鎮めるやうに黙つて居た岡部は「む」と唸ると思ふと膝を進めた「成程、尤もだ、口でこそ二萬圓と輕々しく云へるが、これだけ今直ぐに現金で呉れられて而もそれが思ひ掛けない事であつたら、君でなくつても一時はぼんやりするよ、喜び極まつて悲み生ずだ、寒き込むのも尤もだよ、流石は玉井照明だ、一代で大金を儲ける程の人物だから、凡庸の徒の企て及ばない傑い所がある、君が勝手な真似をして、お負けに我儘を云つて追ん出たんだから、當り前から云やア、それツきり構はないツたつて、別に不都合な事はありやアしない、それを、態々自分から遣つて来て、百とか千とかなら兎に角、二萬圓と纏まつた大金に熨斗を附けて呉れやうとは偉い實に偉い、今迄何の蚊のと玉井氏を悪く云つたのは、皆君の僻み根性であつたんだね、君は玉井氏を解釋することが出来なかつたんだね、玉井氏の人物は、君に解釋せらるべく餘りに大き過ぎるんだね、もう夢中になつて感心するである

俊郎は、不相變の寒き込んだ顔に、相手を卑む色を泛べて、物を云ふも馬鹿々々しいとばかり、唯だせ、ら笑つて居る「何にしる目出度い、吉田君大萬歳だ、どうだ、其金を資本に、三人共同で、一つ世間の目を驚かすやうな事業を企てやうぢやないか、兎に角先づ祝宴の準備を宿へ命じやう」と、自分其金を貰つたやうに、岡部は有頂天になつて騒ぎ立てる「おい〜」俊郎は手を鳴らさうとする岡部を制して、深く眉を擡めた「い、ぢやアないか、祝宴ぐらゐ開いたつて、君の幸運を賀する爲に、川

瀬と僕とで開くんだから」「さう君のやうに、獨吞ぢやア困る」と俊郎は澁い顔「む、成程、君のことだから、おいそれと貰つて來るのも輕卒だと思つて、一應僕等の意見を聞きに戻つたのか、それア金錢問題に就いて君の相談を受けてる我々だから、さう重きを置いて呉れるのは有難い、けども、いゝ方に——而も豫想外のいゝ方に解決するんだもの、何で異存があるもんか、川瀬だつて、態々國へ歸つて波瀾を起さなくつても濟むんだから、どんなに仕合せだか知れやアしない」「困るねえ」と、俊郎は思はず苦しい長歎を放つた

其九十五

川瀬は、最初から俊郎の様子を窺つて、時々首を捻るばかり、まだ一度も口を開かない

けれども、岡部は一切夢中で、人の顔色や云ふ事など目にも耳にも入らない様子である、一圓に、俊郎が玉井の好意に對し羨え切らない挨拶をして來たものと思ひ込み、天から降つたやうな大金を逃がすまいと氣を揉むのであらう「一體君は、不淡泊だからいけない、虚飾に過ぎるからいけない、おいそれと手を出したら、あんまり現金なやうに見えるだらうの、安ッぼくなるだらうのと、下らない所に見得を張つて、しなくつてもいゝ瘦我慢をするからいけないんだ、君のやうな態度で此せち辛い浮世に處しちやア、今に大道にのたれ死をするせ、くだらない體裁に拘泥するは小人の態度だ、清濁

併せ呑むと迄は行かなくつても、もう少し腹を太くしろ、胸を廣くしろ、我々に相談をするも英も要るもんか、何だつて淡泊に貫つて来ないんだ、早く引返して行つて、友人は大賛成ですつて貰つて来い、二萬圓の金を此所の床の間へ積んで見やうぢやアないか、こんな貧乏臭い床の間の、石版繪の掛物の前へ置いちゃア、金に對して濟まないんだけど、一時の間に合せだから我慢して貰はう、おい、早く行かないか、ぐすくして居る間に、本尊が憤つて還つて了つたらどうする」焦りくして膝をたたく岡部、それを面白さうに、俊郎の様子を不審さうに、見比べて居る川瀬、俊郎は全く相手にならずに外方向いて了つた

「吉田、おい、どうしたもんだ、君が一人で行きにくけれア、僕が附添うツて行かう、そして、君の云ひ悪い事は、僕が代つて云はう、それがよからう、其方が却つて圓滑に行くだらう、川瀬も人敷に加はつて、軍容を盛にして呉れ、さア立ち給へ、餘計に世話を焼かすなよ」岡部は立上つて、俊郎の二の腕に手を掛けた、引立て、連れ出さうとするのである、「困るぢやアないか、さう獨で極められちやア、僕はもう、きつぱりと断つて来たんだよ」と、俊郎は言葉に込めた力と共に手を振離す「えッ断つた？断つたつて云つたか」と岡部は自分の耳を疑ふやうに詰める「断つたよ、きつぱりと断つた」「何故？」血眼になつて、手先をびりくさせる「何故つて、厭だから断絶したんだ」「そ、そんな、ば、馬鹿な奴があるか、貴様は、貴様は、人の好意を空しくするばかりぢやアなく、併せて、

天の恩命に背く大罪人だ、ば、罰當りだ」火のやうな息を吐き掛け、胸をたいて憤る岡部の見張、今にも俊郎に掴み掛りさうである、自分の貰ふべき大金をば、俊郎が仲に入つて邪魔でもしたのを憤るやうである、案外な岡部の憤り方に、俊郎も呆氣に取られて目を瞪るばかりである

「さッ、立て、己が謝つてやるから一緒にに行け」又も手を掛けて引立てやうとするのである「止せ、蒼蠅いッ」さうでなくつてさへ、頭の中が引くりかへるやうに混乱して居る場合であるから、岡部が餘りに深く立入つての干渉に、我を忘れて一時ぐツとなり、力任せに激しく振もぎり、片膝立て、突飛ばすと、岡部は不意を打れて、跟々となり、床柱に背中を持たせて、やうく踏み止まつた「うぬ、己を突飛ばしやアがつたな」齒を切ばり腕を捲つて、飛掛らうと身構へする、飛んだ騒ぎになつたものである

其九十六

「おい岡部、君はちとどうかして居るぜ、二萬圓の聲を聞いて逆上したのか、それッばかりの金の事で立派な教育を受けた大の男が、見苦しいぢやアないか、今迄笑ひ乍ら面白さうに見物して居た川瀬が見るに見兼ねたと云ふ様子で身を起し、俊郎へ飛掛らうと身構へする岡部の前に立塞がつて、嚴しく斯う極め著ける「生を云ふな、そこ退け」「いや退かない、君の貰ふべき金を、吉田が妨げて貰へなくし

たんちやアなし、貰はうが貰ふまいが吉田の勝手ちやアないか、何も、君がそんなに腹を立てる事も残念がる事も無いよ、可笑しいぢやアないか、見つともないから止して呉れ」「やかましい、貴様の知つた事ちやア無いから、引込んでろ、貴様は眞の友人の情と云ふものを知らないから、そんな生煮えの事を云つてるんだ、生死苦樂を共にしやうと云ふのが、眞の友人ちやアないか、同身一體利害相感するのが、眞の友人ちやアないか、其友人が、馬鹿ともべら棒とも、何とも云はうやうのない眞似をして、人に背き、天に背き、併せて自分の損を招き、仕舞には野たれ死をしさうな運命に陥るのを、貴様見たいに笑つて見ているのが恰憫か、むむ、それが恰憫だらう、けれども、己は馬鹿だから貴様の眞似が出来ない、己は、吉田と喧嘩をしても、ぶん撲つても、打殺しても、決して、そ、そ、そんな間違つた行ひをさせないぞ」と、狂人のやうになつて嗚る「岡部、君は妙な事を云ふね、眞の友人の情と云ふものを、僕は知らないのかも知れないが、吉田の爲を思へばこそ、態々國へ行つて、一家一門の間に大波瀾を起して迄も、出来得るだけの金策をして來やうと云ふんぢやアないか、僕が吉田の爲を思ふ心は、敢て甚だしく君に劣らない積りだ、けれども君と僕とは思ひ方がちがう、いや、思ひ方はちがはないかも知れないが、思つた事を實際に行ふに就ての方針がちがう」「え、面倒臭い、又諄々と廻りつくだい事を云ひ始めて來やアがつた、い、から退けッてば」「岡部は地纏踏んで身を揉む「待て、其中に氣が鎮まる、君は、何でも、金さへあつたら人間は幸福なものやうに思つてゐる

らしいけれども、それより貴い男の意地と云ふものがある、むづかしく云へば男子の氣節だ」「そんな事判つてらア」「判つてるなら尙ほの事だ、男の意地を立て、世間の判らす屋共に、馬鹿と云はれやうが、べら棒と云はれやうが、犬と呼ばれやうが、畜生と呼ばれやうが構はず、何所迄も利を棄てて羨を取らうと云ふ吉田の氣節は、僕双手を舉げて稱讃する、僕は何所迄も吉田にそれを守らせる、遣り通させる、かうなると、僕は愈々金を造つて來て吉田の氣節を保護しなければならぬ、二萬と纏まつた金は僕の手に出來る見込がないけれども、どんな工面でもして、二三千は屹度持つて來る、君もそんな判らない事を云はないで、まア沈著いて座り給へ」

だん／＼言葉を優しくして、岡部が双方の肩口に手を掛け、そこへ押据えやうとすると「何しやアがるんだえ」と、荒々しく振切つて「何が判らない事だえ」と嗚りさま、平手でびしやりと川瀬の横ッ面を張附けた「野郎、亂暴なことをしやアがるな、川瀬は斯うなつてもまだのろ／＼して居るがそれでも流石に、拳を固めて打返すべき擬勢を示した「利いた風を」と罵りさま、もう一つびしやり岡部は氣が早いだけに手も早い、喧嘩の火の手は移つて、岡部と川瀬との立合になり、俊郎は却つて仲裁に飛込まなければならぬ始末である、驚くべき事は驚くべき事に相違ないが、あまりに途方も無い飛び方であるから、俊郎は立上がつて兩人を引分けたもの、云ふべき言葉が急に出なくつて、先づ大きな聲で「あは、／＼」と晒つた

其九十七

「何だつて晒ふんだえ、人を馬鹿にしてやアがる」と、岡部は唇を反らして俊郎に食つてかゝりながら、やゝ拍子拔の體は掩ふことが出来ない「だつて、あんまり馬鹿々々しいからさ」と、俊郎は又も底が抜ける程に晒ふ

俊郎の後にのつそりと立つて「野郎、酷い事をしやアがつたな、頬ツべたがびり／＼して仕様がな」と、ぶつ／＼小言を云ひながら頬を撫でる川瀬が様子の可笑しさ、無理に怵へて、憤つた顔を保たうと力める岡部も、とう／＼堪り兼ねて吹き出した「人の面を張つて置いて笑ふ奴があるか」川瀬は恨めしさうに岡部を睨む「岡部、君が悪いよ、金を断つて来たのが癪に障るんだつて、僕に撥み掛りさうにしたのでさへ、もう十分に不穩當だのに、仲裁する川瀬を張り附けるつて法があるか、幸ひに川瀬は度量が廣いからよかつたんだけど、これが若し氣の短ツかい僕であつたらどうだ、掴合ひの大喧嘩になつて、どちんばたんの活劇を演じなければ、收まりが著くまいせ、天下にこんな馬鹿げたことがあるかえ」俊郎は眞面目になつて極め著ける「さう云はれると、僕が悪かつたやうだね」もう一時の腹立が収まつて、岡部に再び憤る元氣は無い「悪かつたやうだところか、非常に悪いよ、川瀬に謝り給へ」川瀬、勘忍して呉れ、悪氣があつてしたんちやアないから、何なら、氣が済むやうに僕の

頭なり横ツ面なり、二つ三つ張り附けて呉れてもい／＼い／＼よ、そんな事をしなくつても、それに僕も、君の氣が立つて居る時に長々しく理屈を云つたのが悪いんだから」と平氣なもの、川瀬は何所迄も川瀬らしく非凡である「頬ツべたに指の痕が残つてる、痛むだらう」と、岡部は氣の毒顔「む、假りに頬ツべたを舌として形容すると、唐辛でも食つたやうに、びり／＼して熱く痛んだ」呑氣な比喩を眞面目な顔で云つて、そツと又頬ツべたを撫でる、其緒はぬ自然の態の滑稽さ、俊郎も岡部も心から可笑しくなつて、思はず「あは、／＼」と笑顔をはせる「は、／＼」川瀬も連れられて晒つた、これで又始めに變らぬ仲のいゝ友達である、友達の間は、喧嘩するも仲直りするも子供の子供のやうに罪のない所が價値である「此喧嘩は、撲られたけれども川瀬が勝て撲つたけれども岡部の負だ」と俊郎は打興する

「けれども、もう一つの大問題はどうする、あんまり残念だから、吉田が行きにくければ、僕が一人で行つて、然るべく取なすことにしちやアどうだ、直接談判で纏まりにくい事も、さうすると却つて圓滑に局を結ぶもんだよ」岡部はどうしても二萬圓に未練が残る「まだそんな事を云つてる、それはもう解決した事にして貰はうぢやアないか」と、俊郎に顔を凝められても、まだ沮む色を見せずに、「だつて君、玉井氏の手許に在つちやア、二萬圓は端下金に過ぎないんだらう、それが、我々——いや君の手に渡ると、夥しい大金になつて、國家の爲め、社會の爲め、有益の事に活かして使ふことが

出来るんちやアないか、又、我々三人の如き有爲の人間も、之に依つて、才を懐いて空しく不遇を嘆するやうな運命を免れ、想ひの儘に手腕を試みる事が出来るぢやアないか、僕は元來品性の低い人間だ、造り飾らず有の儘に思つてゐることを述べると、其二萬圓を敢て自分の物と思ふ譯でもないが、十分にそれを當てにしてゐることは自分の物と同じだ、三人の間柄だもの、其中誰に下つたつて、幸運は三人の物だと思ふ、だから、吉田が行き悪ければ、僕が行つて貰つて来る」と、一風變つた我流の理屈を拵り出す「それぢやア仕方が無い、そんなに欲しければ、玉井の親仁へ逢ひに行つて「決して僕の名を利用せずに、君一個で貰つて來給へ、吉田は要らないつて云ふから僕に呉れろつて、それだけの勇氣があるなら、品性が低くつても何でも君は傑い」岡部は暫く考へて居たが、頭を擧げて屹と俊郎を見た「む、これ程迄に云つても聞かないとは、君も流石に吉田俊郎だ、強情もそれ程迄に張り通せれば傑い、あんまり癪に障り過つて氣に入つた、そんなら僕も、潔よく思ひ切らう、其代り、川瀬に確り頼むよ、三千でも五千でも持つて來て遣れ、貴様は金で吉田を助ける、僕は腕で助ける、吉田にお磯君で、それに貴様と僕の後楯があつたら、世界に恐ろしい者はあれやアしない、けれども、川瀬にやアお京君と云ふ目的物があるが、僕だけ何も無くつて詰らないな」と、自ら憫み且つ嘲るやうに笑つた

今に始めの事ながら、俊郎は岡部を口程現金主義の人間ではないと思つた、口が悪い爲に、友人の中でも岡部を誤解して居る者が少くないけれども、實際腹の汚い人間では無い、醜い處から清い泉が滴るやうな、一種の趣致がある強ね者であると思つた

其九十八

晝飯を済ましてから、三人打揃つて、又も荒物屋へ赴いた、今日は、お磯母子及びお京を相手に、此方の一派だけの相談會、要するに、お京が自家へ金を引出しに行かうと意氣込むのを思ひ止まらせ川瀬を國へ遣つて金策する事に、一同の同意を得やうとするのである

扱て、荒物屋の八疊に、六人それの座り方をなし、一應俊郎から川瀬の意向を話して、主としてお京の同意を求めると、其尾に附いて川瀬も膝を進め、例の覺束無い口調を以て「僕は、お京さんの高く清い義侠心に深く感服しますから、其立派な御心を頭に戴いて、自分が下働になつて、實地金を造る役目を引受けたいと思ふんです」と、極まりが悪さうに述べる

お京は當惑顔をして、暫しの間不思議さうに川瀬の面を打眺め、それから頭を低れて考へ始めた、もぢく膝の上で手を捏て居るは、此場合、どう口を開いたらいかと氣迷ふのであらう「お京ちゃん、川瀬君が折角あゝ云ふんだから、任してやつて呉れないか」と、俊郎が言葉を添へる、お京の呼び方が此所で又變つた

お京は迷惑さうに身をくねらして居たが、遂に思ひ切つて唇を破つた「折角の思召で、存難う存じますけれど、どうぞ、わたくしにはわたくしだけの事をさして下さいますやうに、若旦那様から宜しく御願ひ申します」、俊郎に向つて、断つて呉れと頼むのである「川瀬君、聞かれる通りの次第だが、俊郎は是非も無く川瀬にそれを取次ぐと」「ぼ、僕は、どうあつても道らして頂かなければならぬ」と血相を變へ、平生の何所か俗を離れて吞氣な所のある趣は、全く見えなくなつて了つた「わたくしも、どうぞ遣らして頂きたう御座います」、お京もさつと顔に紅を刷く「お京さん、さう被仰らずに、どうぞ僕に譲つて下さい、僕は、け、決して、貴女の功を奪はうなど云ふやうな、そ、そんな卑劣な料簡ぢやアないんです、貴女の御心を受けて、貴女の御考への通りに事を運ぶ爲に、僕が其下働きになりたいと云ふだけです、僕が働いて成功したつて、みんな貴女の功です、どうか、僕を、貴女に向を張る敵と御覽なさらずに、貴女の味方、而も……」と云ひ掛けて口を嚙み、眞赤に額を染めて俯く

お京は、川瀬の心を測り兼ねたらしく、腑に落ちない顔をして、要心するやうに相手の様子を窺ふばかりである、どうしても亦俊郎が口を開かなければ収まりが著かない「お京ちゃん、川瀬君は實際君に感心した餘りさうする氣になつたんで、云ふ事が皆赤心から出てるんだよ、だから云ふ通りに任したつて、決して心配な事は無いよ」と言葉の加減を取つて、角立たぬやうに勸めて見る、お京の意氣

込みに依つて推測るに、若しお前は手を引いて川瀬君に任せろなどと露骨に云つたら、どんなに口惜しがるか判らないからである

「理屈張つた事を申すやうで御座いますけれど、其御仁がなさいましても、わたくしが致しまして、詰り同じ事ぢやア御座いませんでせうか、わたくしが折角、樂みにして仕様と思つてる事を、何も其御仁がわたくしの爲と被仰つてなすつて下さらなくつても、宜しいぢやア御座いませんか、わたくしは、若旦那様とお磯さんの御爲を思つて、御二人の御爲に働くのが樂みですんで御座いますから、眞誠にわたくしの爲を思つて下さいますなら、どうぞ御構ひ下さらずに、御任せなすつて下さいまし」

川瀬の赤心は、どうしてもお京に通じ兼ねるやうである、尤もこんな場合にこんな現はし方では、二十にならぬ少女に通じる筈がない、さればと云つて、もつと踏込んだ現はし方をしては、此場合却つて打壊しになる、川瀬の立場も亦苦しい哉である

「川瀬、羨え切らないぢやアないか、何だつて淡泊に打明けないんだ、面倒臭い、己が代つて云つてやらうか」と、岡部が又からかい半分に出しやばり掛けるに「君は黙つてろ、君が出しやばつちやア打壊した」と、俊郎は手をかざして制止止めた

一座暫く水を打つたやうに鎮まりかへつたが、斯くては果てじと、俊郎は自分に事を廻める責任があることを感じた

其九十九

俊郎は、少し容を改めて、今迄黙つて居るお磯母子に向つた「ねえ磯ちゃん、これちやア困るだらう、かうなると、もう、兩方に仕て貰ふか、兩方共奇麗に斷るか、何方か一つを取るより外はあるまい」「左様で御座いますね」と、お磯は唯だ俊郎の決するに任せると云ふ色

母は、何が何やら薩張判らぬと云つたやうに、唯だ呆れ顔をして居るばかりである、金を出さぬと云つて争ふのなら判つて居るが、金を出さうと争ふのに、二千三千の大金でありながら、何故争ふか其趣意を明かにしないのが不思議なのであらう

お京は、本尊のお磯を相手にした方が早判りと思つたらしく「お磯さん、わたしの志を受けて下さるでせう、貴女はわたしの生命の親で、わたしと貴女とは姉妹ぢやアありませんか、だから、其御仁の方は御断りして、わたしだけにさして下さいな、ねッ、い、でせう」と、祈るやうに一心にお磯を見込む、お磯は返事の仕様が無くつて、唯差俯向くばかりである、それを見てお京は近く摺寄り、叫くやうに小さい聲を出し、「ねえ其御仁に仕て戴いちやア、若旦那様へ濟まないでせう、判つて？」と、残りの意味をば目に云はせる「わたしも、仕て戴くのなら貴女にだけ願ひたいと思ふんだけど」と、お磯も其意を悟つたと云ふ目で、俊郎の顔色を窺ふ

俊郎は訝しさに兩女の様子を見て居たが、ふと其意味を悟ると崩れるやうに高く晒つた「は、大變な見當違ひだ、川瀬君の心のお京ちゃんに通らな加減が、これ程迄に極端だらうとは思はなかつた、川瀬君が好意を運ぶのは、磯ちゃんの歡心を買はうとする爲でもあるやうに、肝腎の人に見當ちがひをされちやア、いくら大度量の川瀬君だつてやり切れないね」「は、これア尤もだ」と、岡部は無上に面白がる「何を笑ふんだえ、兎に角僕は金を持つて来るから、さう思つて貰はう」と、川瀬は自棄になつて我を張る「わたくしも持つて参ります」と、お京も負けて居ない「ぼ、僕が、川瀬は赤みを通り越して紫になり、吃つて物が云へない」「わたくしのでなければ、お磯さんが厭ですつて」と、お京はもう我を忘れて御轉婆の地金を現はし、調子鋭く舌滑かに、頤をしやくつて相手を嘲弄するのである、今日は、鮮かな白緋の帷子に、水色縹子の細めな丸帯を假初に結んで、昨夕に變る粹装りであるが、額に汗の珠を綴り、頬を火のやうに燃やして、見得も嬌態も無くしての意氣張りやう、川瀬に取つては、こんな案外な結果があらうか

「これア面白くなつた、岡部の興がること一通でない

俊郎は愈々自分が此場の極まりを著けなければならぬ必要を感じたので「どうもこれちやア、双方共に御断りをするより外に仕方が無いね」と溜息を吐いた「断られたつて構はない、僕は持つて来る」「そんな無法な事があるもんか、人が要らないものを呉れるなんて」「だつて、僕は一旦持つて来る

と極めたから、持つて来なければ、気が済まない、要らなければ、紙屑籠なり掃溜なりへ打棄つて貰はう」「わたくしも、気が済みませんですから、持つて参ります、破つて打棄るなり、火へくべるなりして頂きませう」「さう張り合はれちやア、仕様がなないねえ」と、俊郎も持て餘して、お磯母子を振向見るばかりである「面白い、實に面白い、吉田、構はないぢやアないか、兩方に金を造つて貰ふさ、二千づつと見ても四千圓、三千づつなら六千圓だ、願つても出来ない旨さ加減ぢやアないか」「岡部のからかひ面が眞面目になる「僕は知らないから勝手にしたまへ」、せう事無しに俊郎は斯う投げ出して、「巻煙草を一つ貰ふよ」と店へ出る

所へ遣つて来た者は仁藏老爺である、「若旦那様、愈々別荘は、日本橋の安田と云ふ新米の俄長者へ買れました」「む、さうか、そして、爺やはどうするの」「今迄の通りにして呉れてもいゝッて云ひますけど、面白く御座いませんですから、引渡す迄の五六日は居ても、それから先は婆々と二人で東京へ戻つて、ちいッばけな店でも開かうかと思ひます」「玉井の家へ戻らないのかえ」「え、戻れつて云つちやア下さいますが、面白く御座いませんですから、もう目白へは参りません、長年の間給金や貰ひを溜めたのが、ちとばかし御座いませんですから、それを力にやつて見やうと思ひます」「あ、爺や婆やに、此家の留守をして、荒物店をやつて貰ふと、跳へたやうに都合がいゝけれどもなア」と、金の話の纏まりにくい本で、何に附けても出るものは、溜息である

其百

川瀬とお京とは、妙な行掛から互に意地になつて、其日の中に、双方別々ではあるけれども、兎に角秋谷を去つて了つた、お京は東京へ、川瀬は伊豫の國へ

俊郎とお磯母子の現在の身の上程なものはあるまい、秋谷に居やうと確に極めることも出来なければ、東京へ出やうと固く定めることも出来ない、金が無ければ困るが、此方で頼みもしないのに、大金を呉れやうと云ふ者が二人も三人も出て来て、而もそれが、貰はれない意地づく義理づくになる結局、此方へ呉れるべき金を持つて来やうと、二人の者が自分の家へ向つて立つては行つたが、第一何時持つて来るかどうして持出して来るかも判らない、それが判らないので、詮じ詰めると、金が出るか、出来ぬかも判らなくなる、縦横又、二人に二人が金を持つて来るか、二人の中一人が持つて来るかの場台となつたにしても、結局それを受けることになるか、或は何所迄も刃着け通すかは、自分達の事ながら今から定めることが出来ないものである、遠くでは、玉井一家の者が高みの見物をして居るし、近くは意地の悪いお磯の伯父が人を見くびつた笑ひを含んで居る、意地を張り通した報ると云はば云へ、俊郎は、自分が正しいと信ずる所に随つて断行し、結果、こんな煮え切らない捉まへ所の無い、濃霧の中に迷ふやうな、變てこな境遇に陥らうとは思ひ設けなかつたのである

仕方が無いから岡部に相談する「君どうしたらいいだらうか」と岡部は、例の癖の唇を反らして「どうしたらいいだらうとは、此方の云ひ草だよ、こんな所へ引つ張つて來られて、相談相手にされて、此方が正直に構へて、自分のことのやうに身を入れて、喧嘩までもして其方の爲めになることを勧めてさ、いゝかえ、お負けに自分から進んで、其方の拙い遣り方を繕ふ厭な交渉の任に當つてやうつて、云ふのに、誰に聞かしたつて譽められる氣遣ひの無いくだらない瘦我慢を張つて、勝手にこんな譯の判らない結果を求めて、今更仕様が無いからどうしたらよからうとは、あんまり虫が好過るぢやアあるまいか、それよりは、僕がどうしたらいいか君に差圖をして貰はなけれア仕様が無い、此儘にして去つたら薄情だつて恨むだらうし、さればと云つて、ぼんやり君の御招待をして、天地開闢時代の人間見たいに無意義にこんな所で、日を送つて居られもしなからうぢやアないか、お負けにそろゝ懐中が怪しくなつて來たよ、ちと僕の身になつても察して呉れ給へ」と、不平を鳴らすこと一通でない「さう云はれると一言も無い」、俊郎も今は唯だ頭を垂れるより外の事を知らないのである

岡部は詰らなさうに俊郎の様子を打眺めて居たが、しほらしくもだん／＼氣の毒顔になつて來た、「人を殺さば血を見るべく、人を救はゞ終を見るべしだ、僕には君を救へる程の力がないけれども、どうせ乗りかゝつた船だ、極まりが著く迄は此所に居やう、其代り、僕の云ふ事もちと聞いて呉むなけれアいけないせ」と太息吐いて云ふ「有難い、平生は輕薄らしく卑劣らしい事はばかり云つて居るけれども、かうなると君の價値が現はれて來る」「畜生、下手に煽立てるなえ、譽めるんだか貶すんだか、判らないことを云つてやアがる」「そこで、どう極まりを著けたらいいだらう」と、俊郎は氣を變へる「どう極まりを著けるツて、まだどうとも極まりの著けられやうがないぢやアないか、だからお京君と川瀬の結果を待つのださ」「待つてどうする」「兩方が金を持つて來たら此上無いし、一方が出來て一方が出來なくつても構やアしない、むづかしい事を云はずに、其金を役に立て、やれ、金さへありやア途が開ける、途が開けたら進める、進んだらいい、事に打突かるさ、小節に拘はつて、女のやうにくよくよするな」勵ます積りか、救圍荒く罵る「ぢやアさうしやう」と、俊郎もやう／＼其氣になる「吉田、君は、友人間で男子の標本と呼ばれるだけあつて、確りして頼もしい男だか、金の問題になると、いやに偏屈に構へて、すら／＼と苦も無く解決すべき事を、態とむづかしくして打壞す癖のあるのが疵だよ」「は、／＼、／＼、坪評の仕返しか」、俊郎は仰向いて高く晒ふ

八月中旬の日は熱いけれども、海の上を行く雲の脚早く、其形も散漫になつて來た、波の音や、角を帯んで、風の外に空を渡る氣がある、二階に近く立つて居る柳の太い幹が、擦られるやうに身震ひすると、小魚のやうな形に反つた黄色の葉が二片三片、生命ある物のやうに舞込む、何かは知らず大きな鳥が一羽、遠い沖の空に輪を描いて居る「君、秋が來たね」俊郎は凜とする「あゝ、さうだね、舊曆の盆が過つたんだから、もう秋も來る筈さ」岡部も平生に無くしんみりと物を云ふ

川瀬とお京とが秋谷を立去つた翌の日の夕方、東京からお京の電報が来た「ツガフヨシアスカノモツテユク」と云ふのである

三日目の晝前、觸込にたがはずお京が遣つて来た、俵から降りずに、恐れ入りますが御二人に直ぐ荒物屋へ御出でを願ひますと申傳へを頼み、直ぐお磯が許へ急いだと、宿の者の知らせである、なほお京の外、もう一臺の俵には、番頭とも覺しき分別臭い四十男が乗つて居たとの事

そこで、直様岡部を引連れて荒物屋へ行つて見ると、お京は餘程神經が充つて居るやうに、額から頬先に掛けて上氣の紅を浮べ、目を異様に輝かして居るが、それで妙に菱乎と力の抜けたやうな様子も見える「どうも、思ひ掛けなくお京ちゃんに御苦勞を掛けるやうな羽目になつて、飛んだ濟まない事をした」と、氣の毒さに先づ俊郎が口を開くと「どう致しまして」と、平生に似合はぬ細い聲で、極まりが悪さうに答へ「長藏どん、それを」と、後に控へた男に顔を向ける、すると、分別臭い男は更に分別臭く構へて、先づ俊郎に向つて叮嚀に御辭宜をなし「これは、御初に御目に掛ります、手前は武藏屋の通ひ番頭長藏と申す不束者で御座います、どうぞ御見知り置き下さいますやう」と挨拶してから、大事に抱へて来た萌黄の風呂敷包の固い結び目を解き、中から小さい支那袍を取出して鏡を

明け、そーッとお京の膝元へ押進めた

固い人間と極印が附いて居るので、靴を守護させられて、お京に附いて来ただけの役目であらう。「若旦那様、これを御検めなすつて下さいまし」十圓紙幣中はぎッしり「大變あるやうだね」と漏しつゝ、取出して束を數へた俊郎は、數へ了つて疑と考へ込む「君、それア二萬圓あるやうぢやないか」岡部は我を忘れた様子に頓狂な聲を出す

お磯は流石熊きを外形に現はさないが、母のお崎となるとさうは行かない、岡部の聲に連れて「えッ」と色を變へた

「む、二萬圓ある」と、沈着いて岡部に答へはしたが「お京ちゃん、これは君の家から持つて来たのかえ」と問ふに至つて、俊郎も息の弾むを掩ふことが出来ない「え、此御金に就きましては、色々お話が御座いますんです」お京は只管謹しんで答へる

當り前から云ふと、これ程の大金——始めの約束の十倍もあつて、而も玉井照明が呉れると云つた高と同じ二萬圓を持つて来たのであるから、お京の氣性として、得意の色は、掩ふに掩はれない筈でなければならぬ、然るに、打つて變つて、態とらしく謙んで居るはどうした譯であるか、秋谷を去る時に、川瀬と争ひをして我を張り通した態度が、少し不穩當であつたことを、今更極まり悪く思ふ爲であらうか、どうも、さうとでも推測しなければ解釋が出来ないのである

お京は暫し唇を結んで上目を使ひ、話の順序を考へるやうな様子に見えたが、懸て徐に口を開いて居住居を直した、「一昨日東京へ歸りまして、始終の事を精しく父へ話しましたら、兎に角玉井さんへ上つて、一通りわたくしが御嬢様に追出されて歸りました次第を御話申した上に、先方様の被仰る事をも承はり、改めて奇麗に御暇を頂いて、荷物を引纏めて歸つてからの事にしやうと、昨日行つて呉れましたんで御座います、さう致しますと、丁度旦那様が自白の御邸に被在つて、打解けて色々の御話が御座いましたさうで、父もさつくばらんが好き人間で御座いますから、わたくしが御金が要るつて申した事迄も、旦那様の御言葉に附いて、つひ申上げて丁ひましたら、「それを云つて呉れたのが」と、俊郎は慌ただしく言葉を挟む、「え、」とお京は首肯いて、少しもひるむ色無く續ける「さう致しますと、ちやア此金はどうせこれくの譯の物で、自分はまだ勘定の外に置いてるんだから、どうか、お前から出た分にして遣つて呉れ、決して此方から出したと云ふことを知らしちやアいけないつて、父を見込んで、預り状をも取らずに御渡しなすつたさうで御座います」「む、」と俊郎は唸つた「さうか」と、岡部は捲り出したやうに細く息を吐く

お京は、これから肝腎の所だと云はぬばかりに、小さい咳拂ひをして身を構へ直す

其百二

お京は少し調子を高めたので、父は御金を持つて歸りまして、己を男と見込んで、度胸のいゝ事を仕て呉れたのが有難い、これを持つてつて遣れア、金の事を引受けたお前の顔も立っし、お前に強請られた己の役目も済む、玉井さんとは、以前まだあゝならない中から心易くして、困る時には助けてやつたともあるが、他人は御金が溜れア汚くなるのに、あの仁はかしは、以前より却つて男を上げた、いや實に見上げたもんだつて、何だか滅茶苦茶に感心するんで御座います、それで、玉井さんはあゝ被仰るんだけど、豈夫其御金を此方から出したんだとは云はれまい、第一吉田さんが眞實になさるまい、寧ろこれを持つてつて、これくの譯と、打明けて吉田さんへ御話をしたら、玉井さんの御心も好く判つて、吉田さんだつて又も厭とは被仰るまい、何所迄も御断りなすつた吉田さんも男なら、何所迄も御出しなさる玉井さんも男だ、吉田さんも氣に入つたが、玉井さんも氣に入つた、かうなれア、もう御受けなすつたつて、決して吉田さんの男振が悪くならないんだから、御承知なさるやうに好く申上げろ、己が行つてもいゝんだけど、角が立つて却つて悪いかも知れないから、御預り申した大事の御金を確り長藏に持たして附けてやらう、お前だけで旨く事を收めて呉れるつて、一人で吞込んで申すんで御座います、あんまり案外で、わたくしも拍子抜けが致しましたけど、どうも、それなら厭だつて申し悪く、妙な羽目になつちまひまして、若旦那様の思召も覗はずに、とう／＼持て参りましたんで御座います」約束したよりも幾倍の大金を持つては來たが、要するに自分の功でない

から、自分に對しては物足らず、俊郎等に對しては耻かしいのであらう、これが若し、自分が嫁入の時の費用にと別にして置かれた金を、自家から持つて来たのなら、縦令金額が少くとも、どんなに得意顔になつたか知れないのである

俊郎は、始めて成程と、お京が元氣の無い理由を悟つて、川瀬と争ひをした遣り過ぎ方を後悔するのではなかつたと判つた、けれども、それはそれとして、事實斯うなつて見ると、今更意地も我慢も折れて、玉井を有難がる心の湧起るを禁することが出来ないのである、濟まないやうな、氣の毒のやうな、云ふに云はれない感念が簇り出る、さればとて、敢て、今迄玉井を見損つて居たことを悟つたからではない、今でも矢張玉井を見る自分の眼を信じて居る、決して、自分の亡父の徳を思ふが故でもなく、自分に對する厚情が溢れて自ら已むに已まなくなつたのでもなく、世間體の爲め、名を取る爲め、取つた名を材料に、失くした金の十倍百倍を儲ける爲めと、確に判つて居る、斯く十分に判つて居ることは少しも以前に異ならないけれども、之に對する悪感情だけが、今此金を見ると共に消え失せて了つたのである、そんなら、金に目が眩んで、唯だ滅茶々に二萬圓を貰つたのが嬉しく、其爲、玉井に對する悪感情も消えて、急に有難くなつたのかと云ふに、俊郎はそれ程貫目が軽く、それ程底が浅い人間でもない、只だ、玉井の遣り方の、如何にも名優の技藝の神に入つて人を恍惚たらしめるやうに、美を極め妙を盡して、小刀で彫つた痕も糸で縫つた痕も無い奥に達したのに打たれ、何

の事も思はずに呀と感心しただけなのである、此時の俊郎の全部を満たすものは唯美感のみである、悪感情なんかの残つて居る餘地が無いのである

「此方が御便利でせうツて、態々百圓札を十圓札に兩替して下さいましたさうで御座います」と、番頭殿が恐るゝ言葉を添へる

あゝ、實に至れり盡せりである、俊郎は餘りに感に打たれ過ぎて、自然に涙を催して来た、これは嬉し涙でも有難涙でも無い、演劇を観、音楽を聴いて、其美妙に打たれた時我知らずそゝろに出る感涙と同じものである「吉田、餘計な事は一言も半言も云ふな、黙つて貰へ、黙つて貰へ一岡部が聲を震はして叫ぶ「む、貰つた、お京ちゃん、禮は君に云ふぞ」

其百三

やう〜事が極つた

「ぢやア、愈々此地を引拂つて、東京に御出になりますんですか」と、お京の訊ねは俊郎に向つてだけであるが、中にお磯母子の身の上をも含むことは勿論である「さうしたいと思ふ、極つた上は早く取連ぶ方がいゝから、僕はこれから伯父さんの家へ行つて、纏まるか破れるか、もう一度相談をして見やう、けれども、愈々破れる段になると、差當り此家の留守居に困る」一段を外れば更に一段、俊

郎は又も首を捻つて考へなければならぬのである。

けれども、此考へは容易に附いた「む、丁度都合のいゝ事がある、玉井の別荘が人手に渡つたに就いて、爺や婆やの身體が明く筈だから、店の物をすつかり呉れて、家も無料で貸したら、豈夫厭とは云ふまい」と膝を打つて云ふに「それだ、それに極まつた」と、岡部は穴の中から明い所へ潜り出たやうな顔をする「それが宜しう御座いますねえ、ちやア、わたくしも、極まりが著く迄此家の御厄介になつて居りまして、皆さんと御一緒に東京へ参ることに致しませう」とお京も勇み立つ「御母さんも磯ちやんも、それに御異存はありませんか」、俊郎はこゝで又お磯母子の意向を確める、「え、く、死んだ親父が喜ぶやうに、お磯の身が好くなるやうにツて、仕て下さるだアもの、わたしなんか、お磯の傍にせえ居られ、ア、どうなつたつてよう御座えますよ」お磯の母が斯う泣くやうな聲を出して云ふは、あんまり好過る案外の話ばかりで、此末どうなる事か、ひよつとしたら、お磯の身分が馬鹿に高くなつて、親でも滅多に傍へ寄ることも出来なくなるのちやアあるまいかなど、自然に心配になつて来た爲であらう、縦合非常の幸福でも、境遇があまりに激しい變りやうをするに臨むと、大抵の人間はこんな心になり易いものである、まして、お磯の母お崎は、漁師の子と生れ漁師の妻となり、漁師の子を生んだと云ふ事より外に、経歴も無く意味も無い女ではないか、良人久平の如き非凡の人物をさへお崎は唯の漁師として、其妻となり、其子を産み、其子が年頃の娘となる迄、意

味も無く連れ添うて来たのである、而も、其人が死んで了つた今日、なほ唯だの漁師であつたと信じて居るのである、若い時は縹緞で人に評判もされたらう、又、此邊で生れて此邊で育つた女としては割合に伶俐でもあり、割合に確りもして居るであらう、けれども、要するにお崎は尋常の女に過ぎないのである

それに引換へ、お磯は母の言葉に眉を蹙めて「阿母さん、何云つてるの、どんなに御禮を申し上げたつて、口ぢやア述べ切れない程の事を仕て頂くのに、どうなつてもよう御座いますなんて、罰が當るぢやアありませんか」と、注意を與へると云ふ始末

俊郎は苦笑ひ、お京も、俊郎の氣を測り兼ねてか黙つて居る、又、岡部が例の特徴を現はさなければならなくなる「いや、お磯さん、實際阿母さんがさう云はれるのも無理は無いよ、吉田、君に御母さんを安心させて上げなければならぬ責任がある」と、續けて云ひながら、二人に云ふ聲と調子とを劃然と使ひ分ける

俊郎の顔の苦笑ひが消えると、一つ鮮かな首肯が見えた「御母さん、御心配は要りませんよ、磯ちやんが出世をしやうと願ひのは、第一には御父さんの位牌へ供養、それから御母さんを安樂にして上げる爲めぢやアありませんか、何所へ出たつて、磯ちやんは御母さんの傍を離れやアしませんよ、又、誰も離さうとする者はありませんよ」と固く云ひ切る、「難有う御座えます」と、お崎は始めて沈著い

た鑑をして、それだけで二百圓あるのけえ、二百圓あつて、こんな家なら百も儲かるねえ」と、賤し
 さうに目をしばたく、恍惚となつて云ふお崎が頭脳には、此家が久平と夫婦になつてから建てたの
 で、二百圓かゝつて、其二百圓が餘程骨を折つて造られ若しくは貯へられたので、大金を持つたやう
 に嬉しく、それを使ふのが惜かつた昔が、夢のやうに繰返されるのではあるまいかと思はれる程、言
 葉の端に感慨が含まれて居る

「ちやア、ちよつと伯父さん所へ行つて来やう、磯ちゃん案内して御呉れ」と、俊郎が立上る、此時
 店先から奥を覗く十歳ばかりの女の子がある

其百四

お磯は目早く女の子を認めて「お、お倉」と、俊郎の後から呼び掛ける

顔も身體も眞黒で、頭の毛が赤く、紅木綿の古びた腰巻の上に、鼠に化けた白の袖無半纏を羽織つ
 た女の子は、俊郎を先に立て、一同が店迄見送りに出るのを見て、慌てて往來へ逃げ出した

「可笑しな子だねえ、何か用があつて来たのかえ」と、お磯が聲を高くとれば、往來の真中より向側
 に近い所に立ち、正面に此方へ向き直つて、こつくりを一つやる

「見馴れない東京の御人が大勢被在るもんだから、極りを悪がつて逃げるんだよ」と獨語のやうに云

ひ、「伯父の末ッ子で御座いますから、家に居るか居ないか訊いて見ませう」と、俊郎に會釋して、
 突と先へ出、土間へ足を降すよと見えたが、蚤くも下駄を突掛けて、小刻みに駆け出した、「逃げなく
 つてもいいよ、使ひに来たらだらう」と聲を掛けられて、後歩みに迷腰をしながら首を掉る

俊郎を始め、一同は店の空間に立つて笑顔を並べ、滑稽な子の態に目を集めて居る、中にも長藏は大
 事に支那靴を抱えて居るのである、豊夫、こんな田舎で、僅の隙間に裏口から泥棒が入るだらうと氣
 遣つた譯でもあるまいけれども、大事に大事を取るのが此番頭の性分と覺しい

「ちやア、遊びに来たのかえ」とお磯が訊き直すと、女の子は矢張これにも首を掉る「判らないちや
 あないか、一體何しに来たんだえ、笑ひながらも少し焦れる「姉やの家を覗きに來ただアよ」と云つ
 て、店の人々を上目で盗み見る「家を覗きに來たんだつて、可笑しいちやアないか、覗いてどうする
 の」「父ちゃんが見て來いッて」「そして?」「東京の人が來てるか見て來いッて」「東京の人が來
 てるかどうかするの」來ると父ちゃんも來るッて」來てなけれア」來ないッて」「ちやア、ちよいと待
 つて、お呉れ」と、女の子をば其所に立たして引返し「あの、東京の御人が御出でなすつて被在るな
 ら、伯父は此方へ參ると申して居りますさうで御座います」と俊郎を仰ぎ視る、俊郎及び東京方の人
 人に向つては、お磯が言葉使ひ身のこなし、日に増し恭しきが上に恭しくなり、淑かなるが上に淑か
 になる、百合の花を持つて、俊郎を別荘へ送つた時分などに此べるとまゝで對人の森である

「む、伯父さんは餘ッ程僕を氣にしてるらしい、磯ちゃんや御母さんを騙して東京へ連れて行きやア
 しまいかと、そればかりを心配するんだらう、玉井の家を退んで了つて、食ふに困るやうになつ
 たんで、磯ちゃんを食物にする氣だらうぐらゐに思つてるのさ」冷かに斯う云つて、俊郎は唯だ笑ふ
 ばかりである「それでも、伯父の家へ被入つて下さいませるか」此「それでも」は、伯父がそんな惡意を有
 つて居てもと云ふ意味と、伯父が此方へ來ると云つて居てもと云ふ意味とを、二つながら兼て居るの
 であらう、けれども、俊郎は唯だ其一つに解釋した「さうさね、此方から行くよりは、伯父さんに来て
 頂いた方がいゝかも知れない、ちやア、磯ちゃんが其の子と一緒に持つて、伯父さんを御連れ申して
 來るかね」「さう致しませう」とお磯が受けるに打重ねて「それがいゝ」と岡部の合槌
 お磯が一禮して立出でると、女の子は先に立つてはた〜と騙け出す

其百五

お磯と一緒に伯父が遣つて來た、萎えた萬筋の單衣に得體の知れぬ三尺帶、襟は鳩尾迄露し、裾は
 膝迄見せて年齢は久平よりは若いらしく、また頭が禿げないけれども、苦勞が多いのか白髪が目立つ
 て、眉間の皺は何時見ても珍らしい程に深く、への字の口の結び方は見直せば見直す程澁い
 「今日は」と云つて御辭直をしたツきり、久平が生前坐り附けた所へ、膝も臙も堂に食ひ込むやうに

重苦しく坐つて、黄銅の錆びた煙管へ固く詰めた臭い煙草をすばりすばりとやり、始めから人の顔も見
 ずに苦虫を噛み潰して居る、何奴でも構はないから何か一言喋りて見ろ、云ひ破つて取占めて、た
 き出してやるぞ、縁もゆかりも無い己等に、此家を掻き廻さして堪るもんか有象無象の雜輩を何匹
 加勢に頼んで來たつて、何が畏いんだえ、女と子供ばかりの家だと思つて、馬鹿にして騙す氣か、多
 分こんな事だらうと思つたから、毎日自家の子を斥候に寄越すんだ、へん、御臍が御茶を沸かさアと
 口には云はないけれども、眉間の皺の動きが文字を描いて示すかと思はれる

俊郎は暫く伯父の様子を覗つてから、簡單に口を切つた「伯父さん、此家へ店の品をそつくり付け
 て、貴方へ進上すると云つたら、受けて下さいませんですか」意外の言葉に、一座皆目を圓くした、
 就中相手の伯父は、噛み潰した苦虫を吐き出さなければならぬやうに景色を變へた「だ、誰が私へ
 呉れるです」と、肩張つて身を促り出す「僕が」と俊郎は済ましたもの「君か?」「伯父の眼のくり
 球は聲と共に飛び出しさう「左様、吉田俊郎がです」「ど、どうして私へ呉れる、他人の家を勝手に
 そ、そんな事が出来るか」顔を蒼くし目を赤くし、身を震はして慄るのである「此家はもう僕の物で
 す」「さ、君の家だ、ど、どうして」僕が買ひました」「か買つたも、だ、誰に買つて、いゝから、金を
 出した」「御母さんと磯ちゃんに買つて、二萬圓出しました」俊郎は益々平氣である「に、二萬圓?」
 とかすれ聲で叫んで、後に反りかへり、兩手を突いて身を撐へたが、弾かれたやうに又起き直つた「ど、

ど、何所に其金が」と、きよろ／＼周囲を見廻す

俊郎は、徐に支那靴を引寄せて蓋を刎ね、中から無雑作に紙幣の束を掴み出して、ばた／＼前へ積み上げる。伯父は殆んど化石したかとはかり、息もせず身動きもなさず、一心にそれに見入つて、魂が眼から抜け出しさう、さうして居る中に、身體中の筋肉がびり／＼と電氣に打たれたやうに動き出し瘡のやうに震へ出し、色は、青くなり、赤くなり、紫になり、ぼたり／＼と汗が滴り、笑ひたいやうな泣きたいやうな、痛いやうな操りたいやうな、珍無類の顔になり、だん／＼延び上つて、立膝になり、前のめりになり、紙幣の上に押冠さるやうになり、さうして又だん／＼元に復して、べつたり腰を落し、草臥れたやうにはア／＼息を吐いたが「旦那、ど、ど、どうぞ御仕舞えなすつて下せえまし、目の毒ですから」と、泣くやうな聲を出して云つて、惡に面型の着くやうに突伏す

潮に焼かれ、風に焼かれての、波の上の辛い世渡り、お磯が伯父の家は、足腰の立たない年寄を數へて十人餘りの世帯とは、別荘守の婆々の話で豫て知つて居る、子は上の方が二人役に立つて、漁のある時は可なりに遣つて行かれるが、高が其日着しの時化を食つた時の見慮さは、此村でも二と下らない火の車組と察しられる、眉間の堅皺も頂邊の白髪も、貧苦が之を刻み、貧苦が之を染めたもの、貧苦は此親仁の骨髓に浸み込んで居るのである、三圓の金でも、五圓の金でも、之を得た時の嬉しさは暗い家をも明るくするのであらう、百圓は現にも思ひ、千圓は夢に見ることもあるであらう、が萬と

なると、自分等とは世界のちがつた段格である、天上界極樂界で數ふべき金高であると、勿體なくも馬鹿々々しくつて、夢にさへ断じて見なかつたのであらう、然るに、それが今思ひ掛け無くも現實の耳に雷の落ちたる如く響いたのである、現實の眼に日の躍るが如く閃いたのである、どうして、驚き且つ懼れないことを待やう、「あんまり失禮な事を申上げたもんだから、旦那が一つ親仁を慮めてやらうッて料簡を起したアでせう、恐れ入りました、ちつとも悪いいたづらちやア御座えません」と、頭が上がりない「ちやア、此家も店の品も、文句を云はずに受けて呉れますか」「そ、そんな、そんな事を云はずに、ど、どうぞ勘忍して下せえまし」「そんなら、どうしたらいいんですか」「どうもかうも、私はこれから口を利きません、すつかり旦那のいゝやうに御願え申します、それ程の御金を紙切か何ぞのやうに掴み出す旦那に、どうして向き合つて口が利かれませう、全く驚き懼れて神の如く思ふ様子である

俊郎は、餘りに馬鹿げ切つて、むら／＼と蔑り卑む意を起したが、考へ直すと、結局は唯だ不感になる「ちやア、先達でも云つた通り、此家に留守居を置いて、店をやらしてもいいんですか」と、言葉も色も柔かくなる「よう御座えますとも」「其人は此方で極めていいんですか」「え／＼、よう御座えますとも」俊郎は、此時何故か痛切に人間の慕無さを感じて、急に荒野にさまよふやうに淋しくなり、覺えず眼の底に冷たい涙を催した

其百六

俊郎が黙つて俯いて居るを見て、お磯の伯父は心配さうに恐るゝ口を開いた「旦那、先達ての失禮、又只今も色々の事を申上げて、まことに済みませんでした、家を借りて店を譲受ける者も、捜したら無えことは御座えますめえから、急いで見附けませう、もう、け、決して意地の悪い事は申しません」伯父さんにさう被仰られると、僕も此家を買つたの、伯父さんへ無料で進上するのと調戲面であつたのが悪いんだから、謝らなければならぬなりません、もういゝから、そんなに氣の毒がらすに下さい、かうなると慥々此家を人に貸して家賃を取つたり、店の譲り料を勘定に入れたりしなくつてもいいんですから、唯だ店を遣らせながらの留守居を置く事に仕ませう、それにやア丁度今迄玉井の別荘守をして居た爺や婆やの身體が明くんだから、まだ話しちやアないけれど、さう云つたら屹度喜んで来るだらうと思ひます、あの老人夫婦なら、家も清潔にして住んで、毎日御父さんの御墓へ水や花も手向けて呉れませう、僕は此家を何時迄も御父さんが生きて居られた時分の儘にして置きたいと思ひますどうでせう伯父さん僕のかへは「結構で御座えます、それアい、都合で御座えます」と頭を二つ下げたが、恐れるやうに紙幣の小山を見遣つて「どうぞ、金を御仕舞えなさつて下せえまし」と尻込する

俊郎は、又も無雜作に紙幣の束を引摺んで支那靴の中へ押込み、ばつたり蓋をして見えないやうに

し、後ろの方へ押遣つたが、ちよつと首を捻つて獨り首肯さ、一旦押遣つた靴を更に引寄せて千圓束を一つ取出し、それを等分に二つに割つて、一つをお磯が伯父の前へ差出した、伯父は胸りとして、重つた紙幣の小口と俊郎の顔とを、さよろ〜見比べる「伯父さん、決して伯父さんを馬鹿にするんぢやアないから、憤らないで下さいよ」「へえ」と益々怪慥顔「これはほんの、これから伯父さんと御心易く願ふ印だけ上げるんですから、少いけれども御受けなすつて下さい、五百ばかりありませう」

「えッ、五百、五百圓、こ、これを俺に呉れる、わ、私へ下さるで御座えますか、こ、こんな大金をた、た、た、で御貰え申す譯が……」譯も何も無い、たゞ僕の土産です、砂糖袋や手拭と同じです土産ですから、伯父さんの御家へ持つて上るのが普通なんだけど、御免蒙つて此所へ上げます」「ぢやア、御貰え申してもよう御座えますか」「どうぞ」「眞誠に御貰え申しますよ」決して冗談に上るんぢやアありません」「あ、勿體無えな、五百圓、ほう、こんな大金は、手に取つたことも見たことも無えだ」と、囁語のやうに云つて、おつかなびつくりと手を出し掛けて引込まし、極威の見得になつて、首を斜に暫くは眺めやるのである

「嬉しかんべえ」二萬圓の惣體が自分の物同様になつた時に喜ぶことを知らなかつたお崎は、今僅に五百圓が兄の物になつたのを見て、自分の事にして打喜ぶのである

「伯父さんも御母さんも、あんまり、見つともないぢやアないか」と、お磯の聲が腹と響いたので、い

づれも驚いて目を集める、お磯は耻かしさうに顔を染めて居るのである

「見つともねえかね」と伯父が首を縮める「見つともないともさ、御母さん迄も一緒になつて、何のさまです、御父さんが生きて、こん所を見たら、どんなに憤るかと思やア、わたし御父さんの死んだのが口惜しい、五百ばかりの端下金が何だえ、さつさと懐へ入れて、還つて御了ひよ」我を忘れて憤り慨くお磯の涙聲、淑かさも恭しさも、一時保ち切れなくなつて打突つたと覺しい「は、端下金だつて」と、目を圓くして、お磯が命令に動く機械のやう、手早く金を取つて、汚ない手拭にくるくると包み、大事に懐へ押込んで、慌てるやうに著物の前を掻き合はせ、疊に手を突いて「う、請取證を上げませうか」と俊郎の顔を見上げる

俊郎は嫣然となつて「そんな物は要りません」と云ふ「それちやア確に載きました、私、いゝえ私は、秋谷村の古屋六右衛門と申す者で御座えます」と、附かない所で出し抜けに名乗つたものである「伯父さん、見つともないから、早く御還りつてば、お磯は又泣き出しさうな聲「へえ、還ります、何だか、気が變てこですから、後で又御禮に参りませう」と、ぶら／＼立ち上がつてよろけ／＼還つて行く

「若旦那様、お京さん、御恥しう御座います、あんなさまを御覧になりましたら、わたくし迄も愛想が盡きて御了ひなさいませう、それに、いくら口惜しかつたと申しましても、皆様の前であんな亂暴な

事を申しまして」と、とう／＼疊に突伏して泣き出したお磯「磯ちやん、そんな事は僕何とも思はないよ、それア、他の人はみんな御父さんところがふ等さ、だつて御父さんは凡人ちやアないんだもの」と俊郎は想ひて、起して遣つて呉れとの意をお京へ目で傳へたが、感極まつて、はら／＼と涙を落し「あ、御父さんは凡人ちやアなかつた、磯ちやんは御父さんの子だ」と叫んだ

其百七

案じるより生むが易い、一番の難物であつたお磯の伯父が、霜に熱湯を注いだやうに融けて了つた上、仁殿爺々夫婦を呼んで、しか／＼と話する、是亦等々有難がつて荒物屋の留守居を引受け、家賃も拂はず居心のいゝ家に住まはれる上、相應の収入がある店をそつくり据置の儘貰はれるのであるからそれちやア、御金が溜つて爺々婆に背負ひ切れなくなりませうと喜び、若し店を持こたへて行かれなくなつたら、何時でも資本を足してやらうと俊郎が云ふに、どう致しまして、これだけの品物が御座いますのですから、賣れ行き次第片ツ端から仕入れて足しましたら、大丈夫立派に持つて参られますとの氣込み方である

そこで、お磯の家で楽しく賑やかな其日の晝飯を済ました上、番頭長藏は安心して東京へ歸ると、後はお磯以子に、俊郎と岡部とお京との三人が相談相手ともなり手傳人ともなつて、秋谷を引拂ふ支度

をする、伊豫の國へ金策に歸つて居る川瀬へも、俊郎と岡部との二通を一緒にして大封の手紙を出す別荘の方にも亦新しい主人が新しい留守居を連れて來ると云ふ始末で、萬事都合好く運び、伯父を始め親戚や心易い人々を集めて、快く別れの盃を交はした上、秋谷の村が引くりかへるばかりの大評判で、村中の人が皆出たかと思はれる程の大勢に葉山の乗合馬車が出る所迄送られ、愈々一同が打連れて東京へ出たのは八月の二十六日である。

東京へ出て、岡部が以前から居る素人下宿の近所に貸家を捜したら、本郷森川町一番地の中通に手頃の家が明いて居たので、早速それを借受け、吉田小村と二つの苗字を表札に並べて、先づ當分の假住居に充てた、建仁寺雜に板屋根の門、鍵の手に餘した八坪ばかりの空地を可なり物淋びた庭に作り成し、八疊から六疊に楹を取廻して、取次は三疊、次は二疊、六疊の後には四疊半の納戸を控へて居ると云ふ、眺へ向の寸法、それに六疊一間の瀟洒した二階が乗つかつて居るのである、二階は俊郎が居間で、四疊半はお磯母子が常住の場所、八疊を客間に、六疊を茶の間、二疊には由と云ふ越後出の山出し下女を陣取らして、座敷の使ひ分け、人の配置も氣持好くきちんと整頓した、尤も、お磯母子……就中お崎が、奉所の事など別に人を使はなかつても、十分に間に合ふからと引受けたのを、人を使つたつて困る譯でもないのに、態と體裁の悪いことをするには及ぶまいと、俊郎が強いて雇ひ入れたのである、二人共若旦那様と呼び慣れたのを、お崎には俊さんと、お磯には兄さんと呼び直さした

お京は、本郷四丁目角迄の電車の便を借りて、隔日には必ず遣つて來る、お京に差圖をさして、お磯の髪飾から身の廻り迄、東京風の中流の娘に仕立てる、美しさ品好さは益々加はる、どう見ても、昨日迄秋谷の濱風に晒されて居た漁師の娘とは思はれない、學問は英と漢と和とを當分にして、俊郎自身も毎日二時間づつ、授ける、お京の周旋で琴三味線の師匠に通ふ、外に踊を稽古させる、これは身體のこなしを好くし、舉止動作を敏捷に且つ極り好くするに、ダンスや體操などの及びも附かぬ最上の訓練法だからである。

岡部と來ては、一日に三度も四度も出入りすると云ふよりは、殆んど自分の家のやうにして居ると云ふ方が適切ならぬのである、それでも、我家へ來て、僕と一緒に二階に居たらどうだと、俊郎が始終勧めるのに、さう迄は仕たくない様子で、矢張下宿の根據を移さない。

俊郎は今岡部と相談して、探檢的性質を帯んだ大仕掛の遠洋漁業會社を設立することを企て、岡部と手分をして、其運動を開始して居る、これも、お磯が父久平の趣味嗜好を趣味嗜好として、其亡靈の喜ぶべき事業を起すと共に、自分等の勃々たる雄心を満たさうとするのである、お京も此企てを聞き、自分が秋谷へ持つて行かうと約束したぐらゐの金は、父に勧めて出させるから、是非株主の一人にして呉れると意氣込む。

一段落が着くと、申合したやうに一同が川瀬の噂を始めるのである、秋谷を引拂ふに臨んで詳しく

手紙を出し、東京へ来てからも、矢張り細かく認めた手紙を遣つたのであるが、明日は九月と云ふのに唯だの一度も便を寄越さない、行衛不明になつたのではあるまいかの、あゝ云ふ男だから香氣に構へて悠々として居るのではあるまいかの、各自勝手に臆測を逞しうしたが、結局金が思ふやうに出来ないう爲に困つて居るのであらうとの想像に一致したので、張り合つた當人のお京が氣の毒がること一通りでない、そこで、金なんか要らないから早く出て来いと、改めて手紙を出したのは、八月の終の日である

其百八

「今日もまだ川瀬さんから御便りがありませんか」と其後毎日遣つて来るお京、八月の終の日に手紙を出してから、今日は三日目である「そんなに、川瀬の來るのが待遠しいんですか」と岡部に冷かされて「え、待遠しいんで御座いますよ、だつて、さうぢやア御座いせんか、わたくしと張合つて、意地づくで御出でなすつたんですもの、相手が女ですのに御金が出来なかつたつて、手ぶらで御戻りなさり悪いのは御尤で御座いますわ、ですから御察し申すと御氣の毒で仕様が御座いませんですの」と眞面目顔であるのみならず、「わたくし川瀬さんが御戻りなさいます迄は、御飯もおいしく頂かれませんですよ、一昨日から川瀬さんの御便がありますやうに、早く御戻りなさいますやうにつ

て、観音様へ日參して居りますの」と聞きやうに依つては妙な意味にも取らるべき事を、平氣で手離しに遣るのである、「ぶツ、堪らないね」と岡部は吹き出す、「これア、面白くなつて來た、一旦喧嘩した爲に却つて心易くなつた例は、世の中にくらもある、こんなにお京ちやんが氣の毒がつてることを川瀬に聞かしたら、死んでもいいつて嬉しがるかも知れない」俊郎も些と冷かし面になる、「あら、又あんな事を被仰つて、わたくし眞面目なんで御座いますよ」と云ふ言葉より顔の方が更に一層眞面目である、「眞面目だからいゝのさ」俊郎は自分にも意味の好く判らぬ事を、唯だ挨拶だけに云ふ

八疊の座敷、床には明畫の木蘭男装の圖の極彩色をしたのが、眞黒に古びて顔の胡粉が底にほのめくを掛け、下に青銅の獅子の置物の、大き兒狗に着しきを据え、横には質素な製りの太刀一振、取つて佩かれるばかりにしてあるのを立てゝある、其外は一方の隅を、素敵に大きい螺鈿の置棚に占領されて居るだけで、見渡した所餘計な飾と云ふものが無い、紅革の圓形座蒲團を四枚置いて、俊郎、岡部お磯、お京が程好き配置に座り、檀側を仕切る浪華籠の外は、初秋が雨となつて庭に満ちて居るのである、廻楹の角に當つて一株の萩があり、三分通り花を開いたのが、十分の雨を持つて己が身の重みを撐へ兼ね、埒も無く檀側に向つて頭を低れて來る、それを麓越しに眺めると、近く人に迫つて、楹の上で置かれてあるものかと思はれる、今年は二百十日を無難に過ぎしたが、此とろくと煉れに煉れて濃淡無く空を塗り潰した雲から、細く柔かくしとくと降つて、じりりと大地の心迄浸み込む雨

は、「昨日の夜半から今日の午後の今迄續いて、まだなかく歇みさうに見えないから一、旦之に吹くものが加はつたら、明日にも今夜にも、又例年の大暴風雨を持つて来ないとは受合はれないのである、楹の端を蝸牛の這ふのが見える

「いやな天気だねえ」と岡部が沈んで云へば「何時此雨が歇むんでせう」と、今迄黙つて居た黙つてばかりも居られぬと云ふやうに調子を合はす、「磯ちゃん、何か御馳走を出さうぢやアないか」と、俊郎は降り込む秋に勝つ工夫「左様で御座いますねえ、何に致しませう」「さうさね、岡部君飲まうか、「結構！けれども、それぢやア君と僕とだけの御馳走で、兩佳人が退け物になる」それもあるね何だか今日は、びり、と来る熱燭もいし、甘く暖かい汁粉もいしと云ふ天気だ」「は、氣の多い御天氣で御座いますね」と、お京が隙さす切り込む、それが、手際好く一座を大笑ひにして退ける、「浮氣な天気だの、焼餅の天気だの、引掻く天気だの、ぶん撲る天気だの、食ひ著く天気だの、蹴ッ飛す天気だのつて、だんだん天氣が劍呑になつて来る」後から岡部が無駄を云つて、更に笑ひの波を寄返させる「ぢやア斯うしやう、我々が好みの肴の外、兩佳人の御氣に召すやうな口取か何かを誂へやうぢやアないか、こんな日だ、兩佳人も少し飲むさ」と、俊郎は岡部の口吻を真似る

「さアツと一つ大きく、降つて居る中へ射るやうに降り込む、熊が悔りしたやうに揺れる」「川瀬さんは、どうなすつたんでせうねえ、心配さうに楹外の空を打仰いで、お京が又も遣り出す

門の前に備が停つた音「此所だ〜」、聲は幌に籠つて、地の底から出るやうである

其百九

備が門前に停つて、此所だと車夫に心得させる幌の中の聲に、一座は雨に打たれた庭のやうに間然となつた、「川瀬が来たんぢやアないかしら」と口を切つたのは俊郎である「さうかも知れませんが御座いますね」お京が胸を抱いて立身になる、「さうぢやアあるまい、出し抜けにやつて来て驚かすにやア、もう遅いから、先頭来るなら先觸が無ければならぬよ」と、獨り柄に無く沈着く者は岡部である

お磯は蚤くも取次へ出た、客は諄々車夫と押問答をして、金を拂つて返した様子である、車の輪が響いてから門の戸が明いた、お京も立出でる、間も無く楹側を軽い刻み足で戻るはお京である、「川瀬さんが被入しました」と、六疊の外から間遠に告げて直ぐ又取次へ引返す

「矢張り川瀬であつたのか」と俊郎が立つ「何所迄氣の利かない奴だらう」と岡部も立つ、客も家の方も玄關に繰出、但しお崎と下女の由とは二疊に控へる

世の中の事と云ふものは、作つたやうに細細易いと共に、又作つたやうにびつたり吻合易いものである、それをばい、事は忘れて了つて悪い事はかり覺えて居、浮世は堪ならぬなど、暗くこと、

語り人間の得手勝手と云ふものである。来る筈の人が来ないのであるから、頻りに其略をする、けれども来る筈の人であるから到頭来る、来る事が遅いのに比例をして、益々其略が頻りとなる、一方では来る事が遅くなつたのは已むを得ない差支への結果で、それだけ氣を激しく焦る、氣を焦るからひよつくり出し抜けに來る、そこで噂をすれば影のさす場合が少くないのである、川瀬の遣つて來方が丁度之に當て嵌つて居るぢやアないか

藍鼠の夏洋服に同じインベネス、午後二時頃の麥和帽子と云ふ打扮で、ズツクの鞆を一つ持ち、「立派な住居だな」と力無く云つてどつかり上り框へ腰を下し、小面倒臭い編上げ靴をのろ臭く解き始める、奥へ通る、座蒲團が一つ殖える、「金が出来て好かつたねえ」口を開いたと思ふと、唯だ斯う云つただけで、もう止すのである、お京と張り合つて意地になつて、金を造りに行つたが、此方は容易く大金が出来たと云ふのに、自分の方は其十分一も勿々出来悪いので、せう事無しに手ぶらで戻つて來たのであらうと、俊郎は氣の毒で堪らなくなつた

「む、手紙に書いて遣つたやうな次第で到頭こんなになつたんだが、君には非常に御苦勞を掛けた實に濟まなかつた」と、暖かい心を吐き出して慰める、すると、お京は俊郎が言葉の切れるのも待遠しさうに膝を進めて、「真誠に、あの折は失禮な事を申し上げます、濟みませんで御座いました、どうぞ御免なすつて下さいまし、貴方の御使りが御座いませので、もう、どんなに心配致しました

か、御歸り下すつて、やつと胸の痞が下りました」と、天下晴れて喜び勇むのである「い、え、僕こそ失敬しました」と、半分ぼんやりに挨拶して、心はお京が打て變つた態度の訝しさに惑ふ様子「川瀬、此事だけにやア、僕も嘘や法螺を云はない、お京さんはね」岡部が得たりと出しやばり出す、それを俊郎は押へ着けて、「それを君が云つちやア、軽い意味になつて了ふ、嘘や法螺を此事だけに云はないつて云やア、他の事はみんな嘘ッ八見たいで法螺吹嘘ッ吐の披露をするやうなものぢやアないか」と、口を噤ませ「川瀬、お京ちゃんね、君と張り合つて意地にならしたのが氣の毒でたまらなく、君から便りの無い中は飯も旨くなく、淺草の觀音に日參をして、君が早く歸ることを祈つたんだよ、岡部の云ひ草ぢやアないが嘘でも何でも無い」と力を込めて云つて、凝と川瀬の顔を見込む

「お京さん、真誠ですか」真直にお京へ身を向けて、死んだ者が急に息を吹き返したやうに、頭の旋毛から足の爪先迄力が充ち満ちる「え、」と首肯くお京を、更に脊中迄徹るやうな光の目で睥めたが、「もう此所で、僕の腸を掴み出して御目に掛けてもよからう、ちよッ、こんな物は要らない」と、衣囊へ手を入れて、縮緬の袱紗に包んだ長方形のづつしりと重い物を忌ましくしさうに投げ出し、じり」と膝を進めて詰寄つた

川瀬が、平生のぼんやりと打て變つて、五體から火焰を吹きさうな勢ひになつたので、一座皆驚きの眼を睜るばかり、岡部さへ、冷かしゃ調戲ひを用ゐる餘地を失つて、ぼかんと口を開いて居るのである。

川瀬は、もう恥かしいの、極まりが悪いの、誰の居る前だのと、遠慮會釋するぐずぐずした考へは、一切打棄つて了つたと云ふ見脈で、握拳で胸をたたくきつ、叫び出した、「ぼ、僕は友人にでも誰にでも、すべての人に、ぼんやりした、のツそりした、掴まへ所の無い、調子外れな、變てこな人間と見られて居る、けれども、何も斯う見られるのが、口惜しいと云ふんぢやアない、斯う見られるのが却つて本望だ、何故かとなれば、僕は態と斯う見られるやうにして居るからだ」と云つて、一息繼ぎ、更に肩を怒らし目を睜つて、今迄出したことの無い強く激しい聲を迸らせる「僕は元來、非常に感情の激しい、非常に臆病な人間だ、極く些細の事に感じて、直ぐ悲しくなる、直ぐ口惜しくなる、直ぐ耻しくなる、忽ち顔色が變つて、忽ち聲が震へる、實に、自分ながら何と云ふ心の弱い奴だらうと、愛想もこそも盡き果てる程だ、女だつてこんな弱い奴はありやアしない、此所に居られるお磯さんだつてお京さんだつて、僕よりは遙に強い」云ふ事が變つて居るので、一同は耳を側てる「だから、僕は此自分の弱點に打勝たなければ、何も出来るもんぢやアないと、深く深く考へた、考へた結果は、此感情の激動を押へ着けることを練習しなければならぬと悟つた、これが詰り、僕が、ぼんやり、のツそ

り、掴まへ所が無い、調子外れの人間になつた根源で、今迄は無理にさうして居たんだ、けれども、自分と云ふ者には勿々打勝たれるもんぢやアない、せう事無しに、上邊だけ打勝つたやうに装うツて今迄自分を欺いて居たんだ、自分を欺くから、随つて人を欺く結果になる、だから、人には仙人だの畸人だのと云はれて、何所か浮世離れがして居る者のやうに取扱かはれて来たんだが、其實僕の皮一枚を剥いだ下には、じりじり、いらじり、こせじり、くよじりした大俗の本体が、晝夜休むこと無しに働いて居たんだ、實に、僕程くだらなく詰らない人間は他にあるまい、斯う聞いたら諸君も愛想が盡きるだらう」と立て續けに云つて、吻と熱い息、平生に無い雄辯である。

胸を掴み出して御目に掛けてもよからうと、お京に向つて膝を進めたから、外の者は傍で聴くつもりで居たところ、此云ひ振は一同を相手にするのである、もつと進んだらお京だけを相手にする範圍に入るのかも知れないが、兎に角今迄は一同に向つて自分を説明したものと聞て差支へ無からう「僕はもう正直に白状する、僕としては非常に大膽な白状だ、僕はお京さんに僕の心の全部を捧げて居るかう云つても意味が曖昧なら、もつと明白に云ふ、僕はお京さんを戀愛して居る」今迄胸の底に深く包んで、熱くつて苦しくつてたまらないのを、忪えに忪えて居た火の玉、それを川瀬は思ひ切つて吐き出したのであらう、吐き出して了つて急に寒氣がしたのか、ふるりと激しく身震ひする

お京は案外な顔をして、ちらと目を挙げたが、川瀬が顔を見ると其儘、打たれたやうに赤くなつて

俯いた

此時俊郎は、ふとお磯の様子を覗ふ氣になつた、自分とお磯とは、既に以心傳心に或意味を通じ合つては居るが、傍から想像される程關係が進んで居ないのである、然るに、思ひも寄らず、崎人仙人と呼ばれる川瀬に自分等より何十度も高い所へ急に進み昇られて、人々の前で公平に相手を動かさうと試みられた、それを、傍に置いて見せられた、蒸暑くつて堪らない日に、激しい驟雨を食つたやうに、思はず爽然となつた、何だか、自分等のぐすく要領を得ないことをして居るのが恥かしいやうになつた、そこで、お磯はどんな心持で居るだらうと、思はず様子を覗ふ氣になつたのである、果然お磯も深く感動したやうに、頭を低れて居る

「けれども、僕には今迄それを發表する勇氣が無かつた、だから、お京さんに飛んだ思ひちがひをされる結果になつた」と云ふに至つて、川瀬の調子は急に沈み、吃くやうに聲が低くなつた

其百十一

川瀬は、又もや一つ拳を胸に食はして、勇氣を鼓舞するやうに肩を揺り出した「僕のやうな女性的な人間が、お京さんのやうな男々しい女性を戀愛するとは、自分ながら、ちと可笑しいやうだが、これは自然に自分に無いものを求めるのかも知れない、けれども要するに戀愛は理屈でない、戀愛は唯

た戀愛だ、僕は唯だお京さんが氣に入つたんだ」と、始めのやうに力を込めて云つて、ちよつと首を捻り「いや、氣に入つたなんて、そんな軽く安ッほ言葉は用ゐたくない、何と云ひ表はしたらよからうな」と、中音に呟いたが「言葉なんか云ひ表されやアしないんだから、何と云つてもいゝ」と自分で打消し更に一段、前よりも熱心の眼を輝かす「お京さんが、突然秋谷へ御出でなすつた晩だ、吉田君とお磯さんの味方になつて、たゞ一人で目に餘る大敵と戦ひ、何所迄も正しきを履んで懼れずとう／＼屈せずに出て御了ひなすつたと云ふと聞いた時には、僕、じ、實に、此人になら生命を捧げやうと思つた、だから、お京さんが、吉田君とお磯さんの爲、金策に行かうと被仰つた時に、僕は其赤心を表すべき機会だと思つて、どうか、貴女に代つて金策をさして下さい、貴女の下働きをさして下さいと願つた、けれども、僕は弱い、其時正直に自分の心を表はす勇氣が無かつた、藪から棒にお京さんが功を成すことを妬んで、それを横取りしやうとでもするやうな出方をした、男の癖に、さぞ、根性の汚い奴と御思ひなすつたんだらう、お京さんが御憤りなすつたのにちつとも無理は無い、一つの波は一つの波より高く、川瀬の自白は益々雄辯になつて來た、此に至つて、川瀬の云ふ事は、一同を相手に自分を説明する形式を其儘、目的をお京一人に向つて云ふ範圍に進めて居るのである

「あの時、此上の無い好意を表はしたのが、まるツきり反對の意味に解釋されて、非常にお京さんの感情を害し、生命も捧げると云ふ忠實な味方が、あべこべに悪むべき敵と見られながらも、それを判

るやうに辯解する迄の勇氣が出ない爲に、僕の頭腦の中は、口惜しいやら、情ないやら、何が何やら判らないやうに亂れて了つたので、せう事無しに何所迄も強情を張つて、とう／＼國迄行つて見たんだが、氣が収まつてから考へると、一同に對して恥かしい事は云ふ迄も無く、第一自分が自分に恥かしいこと居ても立つても居られない程だ、そこで僕は、これぢやア自分は世の中の廢り物だ、生きてたつて何の甲斐も無い、寧ろ死んだ氣になつて自分を鍛え直さうと、堅く心に誓つて魂を入れ換へた此上は金を造つて持つて出てから、一同の前で自分の本心をお京さんに訴へやう、それ迄は怒じ便りもしまいと、覺悟を極めたのは好かつたが、扱て金を出しにかゝつて見ると、勿々どうして、思つたより十倍もむづかしい、魂を入れ換へない前の僕なら、忽ち閉口して了はなければならぬ程、家の方は引締つて居るんだ、けれども僕は、こればかりの困難に打勝てないくらゐぢやア、どうして一同の前でお京さんに本心を訴へることが出来るもんかと、非常の奮發でもつて、四方八面の敵に當り、死者狂に奮闘した末にやう／＼三千圓の金を引出した、勿論兩君からの手紙も見た、纏つた金が手に入た事も判つた、僕か態々三千ばかりの端下金を持つて來なくつてもいゝと云ふ事も判つた、けれども僕は國へ歸る前から、要なければ打棄るなり焼棄てるなりして貰はうと覺悟して居たんだ、唯だ「此金を持つて來た上でなければ、僕の本心をお京さんに訴へる材料が無い、何と訴へたつて、僕はいゝ加減の間に合はせを云ふ輕薄男子としか見て貰ふことが出來ない、だから、手紙には返事も出さず、

かうして出し抜けに遣つて來たんだ、今投げ出したのは金だが、僕の本心が一同の前でお京さんへ通じたら、もう要らない物だから、どうぞ打棄つて呉れ給へ」云ふべき事を云ひ盡して、鬱した氣が吐き出されると、川瀬の顔は始めて洗つたやうにさつぱりとなると共に、此頃の辛勞の痕を留めた蹙れが歴々と目に立つたのである

お京は顔を舉げ得ない、お磯も頭を低れた儘である、「要らなければ、僕が此金を貰つて、遠洋漁業會社の株主になる」と、投出された儘の秩紗を岡部が取上げる

其百二十一

「君は出しやばるなつて云ふのに」と、俊郎は岡部の手から金包を引たくり「これは川瀬君を株主にする金だから、君のは別に持つて來なければならぬ」と苦笑ひする、岡部は豆鐵砲に打たれた鳩宜しくの顔

一つの事に夢中になつて、岡部が金包を取上げて何か云つても、目に觸れず耳にも留めずに居た川瀬は、自分を株主にするに云ふ俊郎の一語に不審を打つたらしく、始めて目を動かした「何の株主だえ」「いや、其話は後にしやう、先アお京ちゃんの問題が大事ぢやアないか」俊郎は、川瀬の氣の動きを元の位置に押据えて、屹と容を改めた

一切りづ、強くなる雨に、風が少し加はつて、楹にばらばらと音を立て、来た。僕は、早く極りを著けることが好きだから、少々遣り方が手暴らいかも知れないけど、こゝでお京ちゃんの意向を聞いた方が好からうと思ふ」俊郎がだんだん聲を高くしなければならぬ程、雨は雨を壓して激しくなる。一棧の冷たい秋が、不意に來て座敷を斜に通る、人は皆、一段居所が高くなつたやうに身を細くする。

「お京ちゃん、川瀬君は今云ふ通りの次第なんだから、君から何とか云つて遣つて呉れまいか、川瀬君の心を喜んで受けるとか、厭だから勝手になさいとか、活すとか、殺すとか」

簾の色が變つて、半透明になつた。お京は、始めの案外の色に引換へて、深く／＼考へ込んだ餘りの顔を上げた「わたくし、そんな事はよく判りませんですから、若旦那様が宜しいやうになすつて下さいまし」と云ふ中も保ち切れず、眞赤になつてお磯の後に身を隠す「宜しい、判つた、急にどうならなければならぬとは、川瀬君も云ふまいから、其中お京ちゃんの御父さんへ御目に掛つてよく話を極める事にしやう、川瀬君満足だらう」「有難い、見れば、川瀬の頬には、熱い涙が珠をなして走つて居るのである。

お京はお磯に掛れ掛つて、古風に袂を顔へ當て、居る、それをお磯が、自分より下の方でも取扱かふやうに勢はつて居る「お、二階に雨が打込みやアしないだらうか」と、俊郎は俄に他の事に氣が

附く「わたくし、兩戸を締め」と、お磯が立ち掛れば「わたくしも」と、お京も顔を掩うた儘に立ち上がり、お磯の先に立つて、逃げるやうに、六疊へ下がる、階子は六疊と四疊半との間に在るのである。後で岡部が、眞誠に感心したやうな眞面目顔になつて「川瀬の遣り方もい、手取りばやく塚が明いて、此方が一番氣が利いてるかも知れない、む、感心した」と云つたが、それに續けて「それに引換へ、吉田の方はどうした、もう要領を得てるかも知れないけど、傍から見れば所ぢやア、何だかまだ關係が衰え切らないやうぢやアないか、平生の氣性にも似合はない、川瀬に負けずに遣つて見せて呉れろ」と俊郎に向く「まあい、よ、僕には僕の考へがあるから餘計な世話を焼くな」と俊郎は笑つて退けたけれども、誰も知らないお磯の身の歴史に思ひ至つて、胸を刺られるやうに痛くこたへた。「兄さんなんて呼ばして、兄妹になつたのかえ、兄妹なら構はないから、僕野心を起すぞ」事情を知らない岡部が、唯だ調度つてばかり掛かる「どうでも御勝手」と、俊郎が笑ふ顔を、岡部は冷笑つた目で眺めて居たが「どうでも御勝手ツてやアがる、今に見ろ、吠え面掻かしてやるから、それはさうと、御馳走は御流れかえ、川瀬が來たんで、御馳走の話が立消えになつた」と飛ぶ「立消えにして堪るもんか、川瀬の歡迎會だ、愈々御馳走を盛にしなけれやならないちよつと失敬して献立の相談をして來やう」と立ち掛けた俊郎は、膝近く置いた川瀬の金包に氣が附いて「川瀬、まあこれを持つて居て呉れ、探險的性質を帯んだ遠洋漁業會社を設立する計畫だから、君にも株主の一人になつて貰はう、此

金か役に立つよ」と勢ひ好く云ふに「む、さうか、それア愉快だ」と叫ぶ、川瀬は唯だ此事が愉快なばかりではあるまい。

雨は益々盛に、二階で雨戸を繰る音が、家の二三軒も先のやうに聞こえる。

其百十三

雨はだん／＼激しくなつて来る、颯々と音のするは、鼠色の雨の中へ、白く一段深い雨を打込む風で、それも、三分五分毎に度を加へるのである、萩は楹の上を拂ふ力さへ無くなつて、波形を描きつ、地に塗れ、のたれ死した美人の末路を見るやうで、思はず肩が顫められる、肌は薄くなり掛けた碧梧からは、小気味のいゝ音と共に、幾條の細い瀑布が垂れる、すべて深々と白け渡つた庭面に、雨に惱まされ風に虐げられて、益々趣を添へた一つの物は秋海棠である。

秋に打勝つべき酒宴が始まつた、冷たい雨と暖かい酒とは、人の肉を隔て、戦ふのである、川瀬は恐ろしく固くなつて、碌に物も云はない、快活で能く喋るお京も、川瀬に心の底を打明けられてからは、どんな、内氣娘も及ばぬ程の無口になつた、お磯は、川瀬とお京とが互に極り悪がる間を調和して主にお京の相手になり、俊郎も盃よりは好物の葉巻の方に耽つて、動もすれば何か考へ込む、それに此雨此風であるから、男女二人宛だけの座なら、陰気で仕様が無くなつて了はなければならぬ、け

れども、善く飲み善く談する岡部がある爲、幸ひに秋に負けないことが出来る、別けても今日の岡部は自棄にやるのではないかと思はれるばかりに、強いて飲み強いて談するのである「何にしる目出度い、僕大に愉快だ、大に愉快だから大に飲む、大に飲んで大に喋る、好からう、は、は、は、注いで呉れ」と、誰と云ふ目當ても無く、腕を棒のやうに延ばして、拇指と食指との間に挟んだ盃を動かす、お磯が注いでやると、「有難い」と點頭して、ぐつと一息に飲み干し、又も腕を棒にしたが、今度は盃をお京に向けるのである、「お磯さんに注いで頂いたから、今度はお京さんが注いで下さつてもいいでせう、なア川瀬、い、だらう」川瀬は只だ苦笑ひ、「吉田のやり方もいい、川瀬の遣り方も亦悪くない、吉田は家康流に天下を取り、川瀬は信長流に遣つて、これも難無く天下を取つた、平常は信長流の吉田が此事にばかり家康流を用ひたのも不思議だが、平常家康流に愚圖と仙人を加味したやうな川瀬に、出し抜けに信長流の極度を用ひられたんで、流石の我輩も少なからず面喰つた、看板に偽の無い、腹の底迄洗つたやうに奇麗な我輩にやア、なか／＼君達のやうな裏表のある眞似は出来やアしない、だから、何時でも憎まれ役の引立て役になつて、諸君の利を爲すのみだ、友人として僕見たいに得用なものはあるまい、此上とも、お磯嬢お京嬢の前に兩君を引立て、見せる爲なら、僕はベツカンコでも、豚の聲色でも何でも背て辭せずだよ、蓋し我輩は、極めて友人に忠實なるものだね、だから、兩美人に御酌ぐらゐは願つてもいいだらう、どうだね」岡部は手足の先迄も赤くして、例の、人を嘲るか自

分を嘲るか判らない事を、呂律も廻らない舌で述べ立てるのである「どうです、お京さん、注いで呉れませんか」と、盃を振り廻して催促する「御酌をして御上げなさいまし」とお磯が優しい笑顔をして銚子を取上げ、お京の手へ渡してやる

お京は、生娘が今始めて箱から出されましたと云ふ見得で、僥劫がること一通りでなく、やうくじりに出で、岡部の盃を満たすと云ふ始末、其癖手附は割に器用なものである

「有難い、やつと思ひを遂げた、兩美人に末期の水を飲まして頂いたことを光榮として、僕はこれで往生を遂げる」と、囁語見たいにぼんやり云つて、ごろりとそこへ寝ころぶ

ざアばらばらと降り込む雨「君、岡部、おい、風を引くせ」答へが無いので、摺り寄つて揺つて見れば、岡部はもう囁々駈を揺て居るのである

俊郎とお磯とは、ふと顔を見合はして、互に莞爾となつた、何故に莞爾となつたかは、俊郎自身が判らない、お磯も恐らくはさうであらう

お京は俯き、川瀬は横向く

ばらばらの雨の音は疊の上に及んだ、濡りは臍を曇らせ、冷たさは盃に徹る、酒の力はとうとう秋に負けた「ちと早やいけど、雨戸を締めて夜に仕やう」と、俊郎が云つた「だんく雨風が酷くなつて来た、これア、例年の通り洪水になるかも知れない」と、今迄黙つて居た川瀬が、急に目が覺め

たやうな聲を出す「もつと酷くならない中に、御暇致しませう」川瀬の言葉に注意を引かれたやうにお京は驚いて立仕度をする

其百十四

お京が立仕度をする、又一切り、天から瀑布が落ちたかとはかりに、立つて居る者をも押倒すやうな勢の強い雨が遣つて来た、お京は腰を落して吻となる

お磯が先に立つて、下女のお由に指圖をし、ばた／＼雨戸を締める、締めた後からお由が濡れた襦袢を拭く、其間に、お磯の母お崎が、入口の板戸を締めて洋燈を點すと云ふ段取

締切ると、雨の音が一際激しい、雨戸に矢玉を打著けるやうである

お京さん、今晚は御泊りなさいまし、此雨風に、どうして御歸りなさられるもんですか、ねえ、御一緒に寝ませう」と云ふ者は無論お磯である「え、有難う、だけど自家で心配しますから」「い、ぢやアありませんか、お隣で電話を拜借して、わたしから御家へさう申しませう」「こんなですもの、貴女御隣迄だつて大變だわ、それに、わたしが泊つたら御邪魔でせう」「邪魔なことがあるもんですか、淋しくなくつて却つていいことよ、秋谷でも、わたしと一緒に御寝みなすつたんぢやアありませんか、貴女が歳前迄御歸りなさるのに比べれば、御隣へ行くことなんか、何でもないわ」「ぢやア、さう御願

ひ申しませうか、だけと濟まないことね」「何が濟まないもんですか」と、お磯は甲斐々々しく立ち上がつて納戸の方へ下がつたが、母の注意で、浴衣を一枚合羽代りの雨除けに著る氣配がして、廳で裏口から出て行つた様子である。

俊郎は、お磯へ合羽を買つてやらなければならぬと思つた、いや、合羽ばかりぢやアない、秋に向つて色々母子の要る物があるだらう、それを一々、此方が氣を附けて遣らなければア買はれないやうでは、母子が窮屈を感じて、秋谷の生活を戀しがるやうになるかも知れない、さうなつちやア大變だ若し又、此方へ云ふのが氣の毒だと思つて、萬一の用意に取つて置くべき、久平が二百か三百の貯金をばつ／＼引出して使ふやうな事などがあつても困る、そこで、暮し向の費用の外に、久平の貯金に相當するぐらゐの金を一度にお崎へ渡して置いて、自由に何でも要る物を買はせなければならぬと、物に觸れ事に觸れて、俊郎もだん／＼に、氣が附いて思ひ遣りのある苦勞人になつて來る。

「お京ちゃん、お磯も母も合羽を持つて居ないし、それから、東京風の冬物の用意も無からうから、萬事君が相談相手になつて買物の手傳ひをしてやつて呉れ給へ、天氣が好くなつたら改めて頼むよ」と、氣の附いた時に云つて置く「長まりました、御天氣が好くなりましたら明日にでも」と、お京は心得顔に首肯く。

脚を掻いて寝て居た岡部が、俄に盥を打つて寢返りすると、口をむにや／＼さして「お磯嬢の所に

お京嬢が泊る、ふ、無駄な事をするもんだ、惜いぢやアないか」と、半分判らなく云ふ、それを囁語かと思へば、「川瀬々々」と呼んで「君も泊れ、僕だけ宿へ歸るから」と、矢張目を瞑つた儘に皮肉をやるのである。

「いや、僕は泊らない、此上酷くならない中に、早く歸らう、君も起きろ」川瀬は、非常の勇氣を振つて己れ自身に打勝たうと力めるやうに、猛然と立ち上り、岡部の傍へ寄つて手暴く引ずり起すのである。

其百十五

川瀬が、平生に無く手暴い事をして、岡部を引ずり起すは、自分が歸りたくないのを無理に歸らうとするので、折角振ひ起した勇氣を鈍らすまいと、引起した岡部に、却つて引連れられたい心なのであらう、岡部は半分起き掛けて、又も婆乎となり「厭だ、厭だ、僕は歸りたくない」と首を掉る「そんなら、君は泊る氣か」「いや、泊りたくない」「ぢやア歸らう」「歸りたくもない」「泊りたくもないし、歸りたくもなければどうする氣だ」と、川瀬は態と作つたやうな苦々しい顔をする。

岡部は暫く考へ込んで居たが、出し抜けにむツくと立ち上つて「好し、そんなら歸らう、歸ることは歸るが、何だか惜しいやうな氣がするねえ、他人の領分の花でも花は矢張花だから、僕は何時でも此家へ來ると春のやうな氣がして、自分の宿の不斷の秋が餘計に淋しくなる、けれども、秋は僕の境遇

に相應してゐる、僕は春の人ぢやアない、秋の國へ歸つて寝る方が結局氣樂でいゝ」

寢惚け目を擦りながらも、慨然たる態の窺はれる岡部を、俊郎は熟々と視て衰れに思つた、さればとて、他の事とはちがふから、自分と川瀬とが受けて居る幸福を、三分の二づつ、頼ち與へて、岡部をも等分に幸福を受ける仲間にするよと云ふ譯には行かず、相應の相手を見附けてやらうと云へば、獨り岡部を侮辱するに當るのみならず、併せて自分等を侮辱すると齊しいから困るのである、そこで俊郎は岡部に向つて何か云はうとしたけれども、結局云ふべき事が無くて黙つた、所が、黙つて居ると心が餘計に働いて来る、自分の立場は、決して岡部のやうな全くの秋ではないが、さりとて、川瀬のやうに確に春を占め得た譯でもない、無論川瀬の方に近く、且つ川瀬の立場に向つて登り行きつゝあるのではあるが、今となつて見ると、自分の登り方は如何にも緩々して居る、緩々して居ると云はうよりは、寧ろぐすくして居るのである、岡部は自分の遣り方を評して家康流と云つたが、自分は果して家康流を用ゐ得る柄であらうか、川瀬でさへ取てする事を、川瀬より幾段も要領を得るに都合のいゝ地位に居ながら、平生は川瀬より幾段も氣が短く、幾段も取てする勇氣に富む等の自分が、何故斯うぐすくして居るのであらう、あゝ寧ろと、俊郎は人知れず心機を千尺の蛭の端に進め、一足飛びに、向の岸へ越さうと氣構へた

雨風は何所迄激しくなるのであらう、これが極度であらうと思はれたのは餘程前であるが、極度の

上更にぐ登つて停まる所を知らない、果ては、屋根も破れ家も倒れるかと思はれるやうになつた、所へお磯が歸つて来た、岡部と川瀬とが宿へ歸らうと構めくを、次の間から聲を掛けて、「もう、一足も戶外へ御出でなされはしません、雨の中に瓦が雜つて飛びます、わたくし、御隣へ參つたけで秋谷で海へ抱き込まれた時のやうに濡れ腐つて了ひました」と、雨風の音に負けじと、咽喉を張る、濡れくして、著換へなければ顔が出されなくなつたのであらう、斯う云ひ棄て、お磯は奥へ引込んだ

俊郎は思はず慄となつた、お磯の言葉に就いて、秋谷の源八の事を思ひ出したのである、源八の事から延いて、俊郎とお磯自身との外には誰も知る者が無いお磯の秘密にも思ひ到つたのである、思ひ到ると、千尺の蛭に臨んで居る自分の身を、急にあぶながる心になつた、たちく後退した

此暴雨風を犯して、激しく戸を敲く者は郵便配達人である、二寸ばかり戸を隙かすと、投げ込まれた端書一枚は、ひらくと上櫃へ落ちたが、幅二寸長五尺餘の空間から潜り込んだ秋の神の暴びは、障子紙門を震動させて、家中を狂ひ廻るのである、端書は自白の玉井から来たので、此方へ引越したを知らせたのに對する返事、貴殿の所持品は、取返し無く荷物にして、一兩日中に送り届けると書いてある、而も、手蹟は正しく水野のハイカラ息子である、俊郎は、何故とも無く無限の感慨に打たれた

其百十六

お京は云ふ迄も無く、岡部も川瀬も森川町の家に泊ることに極つた。此上雨風が激しくなつたら、真誠に家が飛ばされるばかりである、下町は今頃洪水に襲はれて騒動して居るだらうと思はれるが一、向戸外の様子を聞くことが出来ない、例年今頃暴風雨に見舞はるべき運命には定まつて居るが、今年程の激しさも亦今迄の記憶に無いのである、今夜は氣を緩めて寝ることも出来まい。

彼是する中に夜の八時となつた、又も激しく戸を敲く者がある、門の潜戸は、掛金を掛ける間が無くて居るので、来る者には直に表口の戸を敲かれる、「御免下さいまし」と張り上げるだけが判つて、後は雨風に消されるのである。

こんな場合であるから、客も家の者も、皆中合もせぬに取次へ出る「何方から？」と俊郎が大きな聲、「藏前の武藏屋からで御座います、裏口は何方で御座いますか？」お京の家から人が来たのである。此暴風雨を犯しての藏前からの使者とは尋常事でないらしく思はれる、始めて来た家に、闇を吹捲く雨と風とであるから、裏口を問ふのも無理がないのである、「右の横から裏へ廻つて下さい、今裏口を開けさせますから」と、俊郎が答へるに連れ、一同はどやどやと下女部屋を通つて臺所へ下りた、中に

も真先がお京で、先に立つべき下女のお山はのろ／＼として居て却つて誰よりも後になつた。

裏口を開けると、刺子半纏に火事頭巾を冠つて、長鍵を杖にした威勢のいゝ若い者が、武藏屋の印ある提灯を提げて現はれた、風の来る方向と反対であるから、表口の開け悪いただけ、裏口は平穩なのである「お、金どん、何か家に纏つた事でもあるの」と、お京は逸早く聲を掛ける「御嬢さん、此方は御無事で安心しました、下谷淺草一面、もう水に漬らない所はありません、本所深川はもう底へ潜つたでせう、下町は大騒ぎです、何にしろ、四五十年以來無い水ださうですから、若い者の舌の先は、水を弾くばかりに鋭い」「自家はどう？」「床へ上るを待つばかりです」「阿父さんや阿母さんは？」「二階に御出でなさいます、家財道具も、大事の物は二階へ上げ、其外は十蔵へ入れて、セメントで目塗をしちまひました家は固い普請ですから、どんな水が来たつて、崩れたり流されたりすることはありますまいが、萬の用意に、船を二艘前に繋いであります、それと云ふと二階から梯子で船へ降りて、山の手の御親戚へ立退かうつて寸法です、此暴風雨であるから、いづれ水が出たらうとは推測つて居たが、そんな四五十年以來無いやうな事にならうと迄は思ひ到らなかつた、一同目を圓くして、ほうと思するばかりである。

山の手親戚ツて何所？「俊郎が問ひ掛けると、「廻町二丁目御座います」と、お京が引取つて答へる、「それぢやア、自家の方が近いから、此方へ御出でなさるやうに云つて下さい、狭いけれども、他

う」と小腰を屈めて、提灯を高く掲げたを見ると、とつと威勢よく駆け去つた

裏口を締切つて、一同が扉所を引上げると、遠く半鐘の音が聞こえ始めた、大川の橋が落ちた知らせか、但しは、栗橋権現堂の堤を破つて、坂東太郎の水が武蔵野を捲いて来ると云ふ知らせか、大川の橋も大事だが、権現堂の堤なら尙更大事、どちらにしても、物凄く恐ろしい鐘の音である

暫く経つて、又も戸を敲く音がする、耳を澄ませば、此度は始めから裏口の方である、「只今の仁が又御見えになりました」と下女のお由が取次ぐ、半鐘の音を怪しんで居る場合であるから、何か異變の知らせかと、一同又どやどやと扉所へ降りる、「火事、火事です」と、頭巾を冠つた儘で金次郎と名乗つた若い者が、人を嚇かすやうに首を差込む、「えッ、火事、此大雨の中で」と俊郎、「石灰庫へ水が入つたらだらうッて申します、下谷の方です」「兎に角珍事だ、此上どんな事が始まるか判りやアしない」「ですけれども、小子はそれを御知らせに戻つたんぢやア御座いませぬ」「他にどんな事が」と、俊郎は一同の驚きと怪しみを代表する「火事の薄明りで暫く見受けましたが、御宅様の御二階は、小さく別に載つけたやうなので御座いますね」「左様、六疊一間ツきりです」「御普請が固いやうですから、滅多な事は御座いませんでせうけれど、御氣を御附けなさいまし、小子途中で、丁度御宅様のやうな二階が、次々落されかゝつてる所を見て参りましたから、「それアどうも、心附けて下さつて有難う」「ぢやアこれで眞誠に御暇に致します、幾度も御邪魔をして済みませんで御座いました」と自分から

戸を締めて了ふ、此報告を功に、始めの粗忽を償つた積りであらう

「此暴れぢやア、吹飛ばされる家もあるだらう、家の二階だけは大丈夫だと思はれるが、念の爲寢る前に一度登つて見て置かう」かうは云つたが、俊郎は別に氣に止めた譯でない

其百十八

夜は早や十一時である、風だけ少し穏になつたやうではあるが、五分十分と間を置いて、大空を揺つて降り出す雨は、いささか衰へた氣色も見えない「どうだ、前代未聞の珍事ツてこれの事だらう、武装して出て見やうぢやアないか」と云ひ出したのは岡部である「む、出て見るのも悪くはないがもう遅いから明日の朝にしやう」俊郎は氣が進まない様子である「へん、屹度さう來るだらうと思つた、吉田、君は此頃いやに老爺臭くなつて來たせ、秋谷へ行く前迄は、こんな事があると誰より先に駆出す御先ツ走り、僕等なんか今君の云つたやうな事でも云はうものなら、ぶん撲つて引ずり出しも仕兼ねない無法者であつたんだが、さうも變り果て、了ふもんかねえ、何かの力は恐ろしいものさ」「止せ眞面目に出て見るッて云ふのかと思やア、調戲ふ爲に人の氣を引いて見たんだな、俊郎は思まひましさに舌打する、それを物ともせずには唯だ冷笑つて退け、川瀬の方へ鋒を轉する岡部「川瀬、君も無論出て見ることが厭な組だらう」、其舌の冷たさ

それには答へずに、川瀬はいさなり身を起して、會釋も無く岡部の傍へ寄り、丁度先刻のやうに、否寧ろ先刻よりも手繰り引ずり起して、有無を云はせず立たして了び、すん／＼楹側へ引いて出るのがある。「何をやる」「何をやるつて、君が外へ出て見るつて云ふから、一緒に行くのさ」「川瀬は却つて岡部が怪むを怪むのである、「真誠に出る氣か」「真誠も嘘もあるもんか、出るつて云つたら出る」「こんな服装で出られやアしないよ、洋服に外套で、草鞋を穿かなければ」「いゝさ、宿へ歸つて洋服に著換へやう、草鞋も近所で買へるさ、こんな晩だから、まだ何所でも寝やアしないよ」「これア、真誠に出て見る氣だ、馬鹿だなア」と、岡部は呆れ果てた顔「君が馬鹿な事をしやうつて云ふから、馬鹿の相伴をしてやるんだ」「止せ、もう遅いから明日の朝にしやう」「此野郎、吉田が云つた通りの事を云つてやアがる、朝にするんなら、何も吉田を冷笑ふことが無いぢやアないか」「君等がどんな音を吹くだらうと思つて、ちよつと試して見たんだよ」「さうだらう、強情だが淺蕪な者だ、さう白狀させやうと思つて、態と出て見る意氣込に見せ掛けたんだ、實を云へば、僕も明日の朝に出て見る組さ」「はゝゝ、これア又川瀬に遣られた、平常は岡部に負けて居て、際どい所で敵を取るから面白い」と、俊郎は膝を打つて興するのである、「ぢやア、これは僕の負けとして、色男に花を持たして置くさ、なアに、世間の色男の引立役にはつかりなつてれア、僕の生存の意義は全うされるんだ、其中に「色男引立役の依頼に應ず」と云ふ看板を掛けて、日當十圓ぐらいで方々へ雇はれやう」、岡部は又態と自棄な事を云

つて笑はせる

俊郎は今宵に限つて意地悪く氣が焦々する、それを凝と我慢して左も無い様子を見せ、笑つたり話したりして居ると、自然に退屈になつて来るのである、果ては我知らず途方も無い大欠伸を出した、すると、岡部に欠伸が感傳る、川瀬も續いてやり出す、お京も顔を隠して始める、お磯迄もとう／＼目に浮ぶ涙に噛み殘した欠伸の名残を見せない譯には行かなくなつた「兎に角寢床を敷かう」と俊郎が云ひ出した

羞圖に随つて客間を其儘寢間に、お磯とお由とが夜著や蒲團や毛布を運び込む、蚊帳も出る、但しこれ等は、二階の俊郎が居間から持下したので、一人の分を三人の間に合はせるのである、お京はお磯母子と一緒に奥の納戸へ寝る仕度をする様子

「むゝ、先刻の若い者の注意もあるから、寝る前に一度、二階を見て來やう」と俊郎は獨り首肯いて立つ

其百十九

俊郎が立つに随つて、お磯は西洋蠟燭を立てた皿形の燭臺を乗る「ぢやア、お前先後登つて呉れるか」「えゝ、御免下さいまし」と、燭臺を横さまに捧げて、肩越しに後をも照らさせ、身をくねらせつゝ、丁々と登る

女の身のこなしは、階子を登らして後姿を見なければ判らないものである、實に此時のお磯の輪廓こそ、曲線美の活動と云ふより外に形容の辭が無い、別に著物を長く著て居る譯でもないのに、肩膊などを無態に露はさず、足は階子段に瑪瑙の板のやうな韻を帯びしめながら、ふはり〜と虚空に舞ふやうに軽く登るのである、登り切つて、六疊の程好い所へ膝を突き、恭しく燭臺を捧げ直して居る所へ、俊郎は突と進んだ

直と真中に立停つて周囲を見廻す俊郎が目の配りを追ひ、跪いた儘に屹として、燭臺を彼方此方と廻すお磯が氣込の好さ

「やア、酷いもんだね、壁が半分ぐしよぐしよになつてる」と、俊郎は調子を沈まして濡やかに云ふ聲の下から燭臺を高く舉げると、西南に向つた一面を塗り潰した薄鼠の壁が、疊から三尺ばかりの所迄、劃然と濡色に光つて居るのである、其外、長押の際から、二條三條魚形に垂れて居る濡色もあるまだ玉井家から荷物が届かないので、唐木の机と書棚とがあるだけ、床の間さへ空にして置く俊郎の居間に、此雨の浸みが際立つて目を引くのである「まア、酷いもんで御座いますね」と、お磯も息を呑む、濡々たる濕氣は蠟燭の火を包んで、筆形の燭の周圍に七彩の圓を繪いて居る、人の顔も手も、油繪具を塗られたやうに光るのである

風の方が少し鈍つたとは云へ、まだ勿々悔ることが出来ない、それに雨は、どうして斯う根が積く

だらうと怪まれる程に執拗いのである、二階へ来て見ると、格別雨風の暴びが強く應へる

「磯ちゃん」と呼び掛けて、俊郎は身を折るやうに坐り、投げるやうに机に凭れた「はい」、小聲で答へて、訝かしたうにお磯は俊郎を見上げる、燭臺は二人の間に置かれた「僕は今、非常に悶え苦しんで居る、僕の頭腦の中は、此暴風雨よりも激しく亂れて居る」と搾り出して、火焰のやうな息を吐く尋常ならぬ様子に、お磯は何と慰めていゝか判らぬと云ふ見得である、「どうなさいましたんで御座います」と、怕々覺束ない調子で云ふ、而も自分で慰めることが出来るなら、身を粉にしても厭はぬと云ふ赤心の、十分底に籠つて居ることは、確に〜認められるのである「お前と私とは、結局どうなるものだらう」と、切つて投げ出したやうに云つて、凭れた机から急に脇を離し、身を細く坐り直して、俊郎は固く腕を組んだ

此時のお磯は、五體一時に燃え立つかと思はれるばかりに輝いた、雨風の凄さ冷たさも、夜の暗さも、皆押伏せられ、蠟燭の灯も豆のやうに凝つて、唯だお磯のみ、己れ自身に溢るゝ熱を光となして輝くのである、お磯の全身は、何日の間にか一微分子をも残さず燃ゆべき物に化して、唯だ口火の傳はるを待つばかりで居た所を、端無く俊郎の手から火の種を投げ著けられて、ここに一塊の燭を現するに至つたのであらう、けれども、お磯は唯だ熱と光とに己れを表はすばかりで、聲をもなさず黙り切るのである

「川瀬とお京ちゃんを見て、お前はどうか思ふ」俊郎は更に一段を登つた、するとお磯は「わたくしは汚れて居ります」と、叫ぶやうな鋭い調子を忍び音で殺し、袖を噛み占めて深く俯向くのである、蠟燭の灯影は、お磯がほつれた髪の上に震へて居る、「そ、それだ、それが無いと、僕は川瀬より先に、川瀬より激しく、川瀬がお京ちゃんに向つて表した通りの心を、お前の前で表したんだらう」と歯を切るに至つて、俊郎の言語は一句々々血の塊である

お磯は輝き盡くして灰のやうに青白くなつた「運命と云ふものは、何故斯う残酷なんだらう」と、お磯の態を見るに忍びず、顔を背けて突と立上がった俊郎、折柄、一旦穩かになり掛けた風が、更に一倍の勢を盛り返して空を捲いて来た、ゴーツ、ばらばらと恐ろしい物音がすると、吹落されはしまいかとばかりに二階が搖ぎ渡ると共に、何所かの屋根看板が飛んで来たのか、立木の大枝が缺けて落ちたのか、どんと激しく打突かる物がある

其百二十

激しく打突かつた物に、二階は壁に波を打たして揺れるのである「何だらう」と、俊郎は吃となる、それは丁度、内部迄濡れ込んだ壁の部分である、外面を敲うて居た薄板の鍍が、めりくと折れて破れる響が聞こえると、壁は積んだ雪へ熱湯を注いだやうに解け崩れて、どつと一度に、今迄壁と板

との間に溜つて居たらしい雨水を、壁の上へ瀑布落しにし、お磯の身の見えなくなる迄に浴せ掛けて餘りの勢ひをば、壁から三尺の板の間へ走らせ、ゴーツと階子段へ急湍を飛ばすのである、尙も後を追うて、壁の破隙から打込む雨の凄まじさ、一點々々の物では無くて、全く空を走る激流である

氣絶したやうに倒れたお磯を、俊郎は慌て、抱き起すと、其手を振拂つて壁の破隙へ身を摺り寄せ目口も明かれぬ強雨をば身を震はして受けて沿ひながら「どうしたつて、わたしの汚れは清まりやアしない、もつと、百倍も雨風が激しくなつて、此肉も血も骨もたゞき潰して、洗ひ流して、何も無くして呉れるとい」と咽びく空に顔を向けて訴ふる

蠟燭は臺と共に流されて了つた、恐らくは階子の下迄も落ちて行つたのであらう、内も外も眞の開壁の破隙は洞穴の口で階子の上り口は更に低い洞穴の口、二人は今、一つの洞穴から他の洞穴へ注ぐ急流の瀬に身を投げ出して居るのである「磯ちゃん、磯ちゃん」と、耳に近く切なる聲で呼んでも、たゞ、夢中になつて、身を空走る激流に振込むばかりで、構はずに置くと、破隙から壁の外へ迂り出で了ひさうな氣勢である「これでも、身に浸込んだ秋谷の海の鹽氣が抜けないだらうか、秋谷で汚した身體が清くならないだらうか、唯だ、何の故とも告げずに瀑布より濃い雨を降らすところの、不思議の空に向つて訴へるばかりである

「どうした、大變ぢやアないか、急流の落込む低い洞穴の底から、岡部と川瀬との絶叫が響き出

る。「吉田」「吉田君！」「お磯さん！」「お磯やア！」聲々に呼び立て、一同が、水を蹴散し階子を登り掛ける様子

登つて来られない中の数分時が、二人の運命を定める権能を握つて居るのである、俊郎は、後さまに手を延ばして、壘の上を這らせるやうにお磯の身を引戻し、柱を力に首を延して俯身に階子に臨み「今登つちやア危いから、ちよつとの間待つて呉れ」と聲の限りに叫ぶ、途端に、お磯の身に押送られて、一際水量を増した急流が、激しい勢で階子段を走り降つたので、一同がしたゝか浴せられたらしく、「あっ」と聲を揃へて飛び退くと覺えられた

「吉田、君達は危くないかえ」と身を挺んで、又階子段へ掛かる岡部の聲「此方は大丈夫だけでも、君等が上つて来ちやア危いんだ、それもちよつとの間だ、此方から合圖する迄待つて、呉れ」逸る岡部を食ひ止めて、際どい時間を生命に奪とお磯の手を執り「お前の身はすつかり清まつた、もうくそれで十分だ」と、霞の走るやうな息で呟き「嬉しう御座います」と、力を込めて握り返すお磯の手を凝と受けるも纒に一瞬間で「明日からは二人の世界だから、先づこれだけにして置かう」と左右に離れた

「まだかえ」と岡部が焦れる聲

壘を一枚引起すと、壁際へ持つて行つてびたりと破隙へ押著け「もう大丈夫、登つて来ておいよ！」

と大暴れの空が俄に晴れ渡つたやうな、花やかに力のある聲で俊郎は呼んだ

(振假名は時事新報式に依る)

怒 濤 終

明治四十二年四月十七日印刷
明治四十二年四月廿五日發行



極廉奧付

定價金八拾五錢

郵税金拾錢

著者 伊藤 銀月

東京市本郷區天神町二丁目二十五番地

發行者 日高 藤兵衛

東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷者 小西 幸吉

東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 日本印刷株式會社

電話本局千八百四拾番

發行所

東京市本郷區天神町二丁目二十五番地

日高有倫堂

振替口座東京第壹八八三四番

四十二年四月印刷
每月訂正增補改刷

有倫堂出版書目

東京市本郷區天神町二丁目廿五番地

日高有倫堂

振替口座東京一八八三四番

大町桂月、白河鯉洋
笹川臨風、樋口龍陔 合編

菊版圖入約六百頁
當代の名書數葉挿入

新刊

むら雲

定價 壹圓六拾錢
送料 拾貳錢

是れ嶺雲氏の慰問集也小説に漱石、秋聲、風葉、鏡花、青果在り、論説に三宅、藤岡、姉崎の三博士在り、佐々醒雪、内村鑑三、美文に桂月、笹川、登張の(サラストラ)紫影の(ツルネヂフ)紅録の(英詩對句)執筆の諸大家四十餘名文星燦として輝く一編悉く是れ錦繡金玉の文字實に文壇の大偉觀也

網島梁川譯 (製本優美) 菊版圖入

再刊
ルナン 耶穌傳

定價 一圓五十錢
郵稅 十四錢

此書天主教主生誕其價しき神の國の思想天父の觀念を叙へ奇跡を論ず更に他の宗教との關係を明にし其國家親社會主義觀又此間に隱見す自由詩界を震動して顔色を失はしめたりと雖世界史上に於ける耶穌の位置は寧ろ之に依て確められたりと自らべき也本書は故梁川氏念心愛讀の書にルナン明快の想と梁川瑰麗の文に接せんとする士は本書を讀み

最新刊 二葉草 定價八十錢 送費十錢

現代人士の煩悶を知らんとする人は必ず此作を一讀せられ、此書には物質的文明の弊を受けたる人と高潔なる理性に依つて活きんとする人との心情、動作等最も明瞭に寫されたり。

五版 女夫波 定價一圓廿錢 送費拾錢

朝日新聞評 小説女夫波は明治文壇の傑作にして予は此作を讀みて少なからぬ感動を得たと共に活潑の作多き小説界に此傑作の出でたるを愉快とするものなり

十版 伯爵夫人 上下二冊 定價各八十錢 送費拾錢

二六新聞評 意志に強き男子が一念の轉機と智に敏き女子の纏綿の情を相結び、讀者をして運命の敷布に泣かしめ、可憐なる二孤兒の身上に萬斛の涙を注がしむ。道は人生の奇蹟を拓ける小説にして絶ゆる階級の讀者を感動せしむ可き傑作ならん。

田口掬江氏の三大作

伊藤銀月著

小説 小怒

濤

定價八拾錢 郵稅金拾錢

是れ一氣呵成二百二十餘回に連れる雄篇を披けば直ちに惹きつけられたる偉人なる其交遊なる青年老翁なる富豪其他篇中の人物の特殊の面目と性格とを以て活躍飛動す而其結構の壯大と描寫の精刻とに伴ふに當代無比の妙文を以てす蓋し一時の投機的作物にあらず此の小説を讀まんとする者は此書を速すべからず

小杉未醒譯 并に書八十餘枚挿入

近給 新譯 西遊記

定價八十五錢 郵稅八錢

當代の奇才未醒、千古の奇書西遊記を新譯す、物當に其趣を得たり、アラビヤナイトを好み、ロレンソンの漂流記を好み、水滸傳を喜び三國誌を喜ぶものは、亦來つて此の新にされたる奇書に接せよ、八十有余の洗滌的補遺簡潔なる譯文と相俟つて諸君の苦楚より引離さん也、

江見水陰著

〇〇面數百三十餘回に亘る大作 坊間驚く所の書二冊を越す

小説 小女馬賊

定價九拾錢 郵稅拾錢

文學的の冒險小説詩化されたる事實談は是也 著者獨得の筆鋒を揮ひて文壇に此新方面を開闢す自然不自然を論ずるの遠なく一讀せざる可らざるの快書なり

安部磯雄著 (上製四百八十頁)

新刊 應用市政論

定價四十五錢 送費拾錢

本書の論ずる所は都市の發達、市の立法及び行政、市區改正交通、道路、橋、水道、瓦斯、公園、市場、家庭衛生、教育、娯樂、財政等の諸問題にして、皆に歐米諸都市の現狀を詳述せるのみならず、著者特有の眼見を以て、これを我國の都市に適用せんことを企圖せり。一面より見れば、經世の爲に社會問題を研究せんこと、一面より見れば、國民の爲に新奇なる都市問題を紹介したる市民讀本なり

佐々醒雪 白河鯉洋序 稲田薄光編

新刊 家庭名論卓說

定價四十五錢 郵稅八錢

家庭に於ける文藝及娯樂問題は目下の最大任務なり。此任務に應じて解決を與へんとするは本書の目的なり。本書收むる所は皆其道の代表的人物を描へ來りてその宿論を叩ききたるものなり。百々皆思ひあり句々悉く生氣を帯ぶ。實に近來の名論卓說と謂ふべし。加ふるに附録として醒雪先生の百人一首俗語を附けたれば、新年の贈物として此上なし。切に目下の青年淑女に薦む。

伊藤銀月著

机上圖書館 新家庭觀

定價五拾五錢 郵稅六錢

本書家庭に於ける總ての問題に對し、醒雪先生と特にかゝる成さんとする人に向ひ最良の指針を與ふ之を願んで興味と共に實益を得るべし

伊藤銀月著

新刊 机上圖書館 文學梗概

定價卅五錢 郵稅六錢

文學は吾人に美的刺激を與へ引いて高尚優雅なる生活に導く文雅の修養も亦國民的資格の一なるを悟るべし 本書は各種文學の分類の原則時想時形支體の法則描寫の態度其他各種の問題を網羅し平明簡潔に文雅の修養を得せしむ文學を受する人に向つて手頃の參考書たるを疑はず

小松小兒科院長 小松貞介先生著

新刊 實驗小兒保育法

定價四十五錢 郵稅金八錢

健弱兒の卷、虛弱兒の卷 本書は兒科專攻の國手として有名な小松小兒科院長が夙に泰西の學理を涉獵し兼りて自家の實驗を以て我國の家庭に最も適切な手を取つて教ゆる如し苟も人の病となるもの快活なる健弱兒の笑顔を樂まむには先づ此書によつて完全なる小兒保育法を心得られ

伊藤銀月著

偉人達人

定價卅五錢 郵稅六錢

奇を受する銀月先生が趣味を以て古今東西二百餘の偉人達人を抽出し其人物の眞骨頂を如く描きたらしむべき代表的一二の行動なるもの偉人の面目々々人に逼る眞に大觀奇觀也之を讀入るべし

伊藤銀月編

机上圖書館

科學新潮

價三十五錢 郵稅六錢

科學の進歩は元素を細分して最新の電子論を生み電氣の新利用は既盛な極む或は動物の改造人間の改造をも企圖し魂の形状重量を折り不思議の事の新研究を生み其他天文物理醫學心理學等何れも最新なる研究發見を胚胎せざるはなし本書は平明に是等の新潮流を紹介し趣味實益兼收全からしむ塞に机の珍籍也

伊藤銀月編

机上圖書館 第四篇 法制綱要

定價拾五錢 郵稅六錢

法律は國民の生活に密接の關係を有す其大體に通ずるの必要實を俟たず而も術語の難解なる解釋文の借風なる一般の讀者眼に入り難く之を研究する者稀也本書之に臨み平易なる言文一致體を以て其大綱を擧げ上國家の構成より下私權の得喪に至る迄何人にも容易に會得せしむ塞に國民机上の寶典也

大町桂月著

我が文章

定價四十八錢 郵稅金六錢

桂月先生の文章愈老熟して縱横自在風情流麗し行く處に行き止る處に止まり世の術ふ所なく苦む所なく直ちに人を以て文を遣り洒落飄逸に快調にして男性的意氣を發揮し而かも意外に情熱燃る文此に臨れば驚なり先生の文の如きは、當代の逸品なり

文學博士桑木嚴著 (四六總クローズ)

性格と哲學

價壹圓廿錢 郵稅金十錢

本書は高妙なる哲學宗教の問題より最近處世法並に女子問題を解し戯曲文學等廣大なる範圍に亘り慎重なる解釋を下せるものにして誠に學界の珍書たるを失はず

伊藤銀月編

机上圖書館

全十冊購入 價三圓九十錢

本書は漸次に刊行して都合十冊完成の上「机上圖書館」と表記したる雅致ある箱に収めて座右に備ふべく、初くも書籍に趣味と實益とを求めんとする時之を開かば益ながらにして圖書館に入ると同一の結果を得ん、豈空前の有用書にあらずや、

岩野泡鳴著

新自然主義

定價五拾五錢 郵稅六錢

齋藤無籍著

小天國

定價六十五錢 送料八錢

大町桂月著

わが筆

定價四十五錢 郵稅金六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓あり才氣あり霸氣あり或は酒脱に或は沈痛に或は眞面目に或は詼諧に短くして才氣人を刺し長して萬馬野を走る而かも眞くは一脈の氣と熱とを以てし行るに靈活の才筆を以てす家庭學校會社及び文學等に關する卓見到る處に充ち才情揮すべき美文もその間に光彩を放つ天地闊有数の活文字也

大町桂月先生選

時代青年文集

定價四十錢 郵稅金六錢

桂月先生最も青年を愛し指導教訓欲も懈らず愛に滿ちた青年諸子の傑作數十篇中より其尤なる者を選び嚴正なる批評を加へて時代表青年文集を編せらるる所叙す所情あり餘韻あり將た新體詩あり或は梅の花の如く情熱火の如し以て青年の煩悶を慰すべく元氣を鼓舞すべし附録には當代諸名家の名篇を添へて錦上更に美花を飾る

大町桂月著

家庭と學生

定價拾八錢 郵稅金六錢

著者申す、我れに三男一女あり其れを斯くは、しつけむ、我れも斯くは覺悟せむと心に期するのみにて能く實行すと斷言し得ざる身の上なられど家庭教育の大切な事を今更のやうに感じて感ずるの一得もやと世の青年の男女の前に呈し合して世の父兄の前に呈する也

六

安全なる結婚

定價拾八錢 郵稅金四錢

小栗風葉小川默水合作

小説 女

價七十錢 送料金十錢

小栗風葉著 鏑木清方譯 (上製美本)

小説 十七七八

價七十五錢 郵稅金十錢

戸張孤雁著

孤雁挿畫集

定價五十錢 郵稅八錢

伊藤銀月著

小説 出潮

定價六十錢 郵稅八錢

半井桃水著

小説 濡衣

定價六十錢 送料八錢

田口梅汀氏著 (清方書挿畫三枚)
再版 小説 追恨

定價金壹圓
郵稅拾貳錢

理學士(數學專攻)河野德助著
初等 代數學講義 上下

定價各壹圓
郵稅八錢

德田秋聲著 (上製美本)
小説 母の血

定價七十錢
郵稅十錢

薄田泣菫君題詩 小島鳥水君序文
瀧原有明君序詩 清水橋村君著
新體 筑波紫

定價四拾錢
郵稅六錢

半井桃水著
小説 萩の下露

定價六拾錢
送料八錢

凡鳥山人著
馬鹿物語

定價四拾錢
郵稅金六錢

大町桂月先生序 角金湖聲著

六版 宇宙と人生

價貳拾五錢
郵稅金四錢

景山英著

五版 妾の半生涯

定價三拾五錢
郵稅金六錢

川上眉山著 ○清方書 (上製美本)

三版 觀音岩 前編

定價八拾錢
郵稅金拾錢

川上眉山著 (頁數三百卅頁頗ル美本)

再版 觀音岩 後編

定價八拾錢
郵稅金拾錢

櫻葉村著 ○清方書 (上製美本)

再版 小説 竹影集

定價六拾五錢
郵稅金拾錢

伊藤銀月著

社會 研究 高原生活

定價四拾錢
郵稅金六錢

大町桂月序 有倫堂編纂

再版 明治大家文集

定價八十錢
郵稅金十錢

田口梅汀氏著
小説 獨木舟

定價金壹圓
郵稅金六錢

天野誠齋編

名流 實話 身體健康法

定價廿五錢
郵稅金六錢

半井桃水著

小説 子寶

定價六拾錢
送料八錢

岩野泡鳴著

闇の盃、盤

定價卅八錢
郵稅金六錢

大町桂月先生 中内蝶二先生合著

七版 少女と山水

定價卅五錢
郵稅金六錢

田岡嶺雲著

霹靂 靈鞭

價四拾五錢
郵稅金六錢

田口梅汀氏著

再版 悲劇 熱血

定價三拾錢
郵稅金六錢

小栗風葉著 (美術的美本)

再版 小説 新粧

定價四拾五錢
郵稅金六錢

大町桂月 伊藤銀月 刪修天嶺篇

再版 文士寶典

定價金壹圓
郵稅金六錢

櫻葉村著 ○鍋木清方書 (上製美本)

三版 小説 不問語

定價七十五錢
郵稅金十錢

(附大詩人出現 隨原遊記)

齊木仙碎對佛國神學教授ボア博士
三位一體論

定價貳拾錢
郵稅金四錢

文學士 久保天隨著

文壇獅子吼

定價四拾五錢
郵税金六錢

泉鏡花著○清方喬 (上製美本)

小説無憂樹

定價八拾五錢
郵税金拾五錢

文學士 久保天隨著

紀行 山水寫生

定價四拾五錢
郵税金六錢

海老名彈正先生著

人道

定價金拾錢
郵税金二錢

チヨサイア、スフロング原著、石川三四郎譯

二十世紀の大覺醒

定價三拾錢
郵税金四錢

文學士 久保天隨著

再美 小説 夕紅葉

定價三拾五錢
郵税金六錢

高橋五郎著

英語實驗百話

定價拾錢
郵税金六錢

姉崎博士序 萬朝報記者茅原華山者

改訂五版 向上の一路

定價三十錢
郵税金六錢

大町桂月先生編

第貳時代青年文集

定價四十錢
郵税金六錢

半井桃水著 清方喬

再版 小説 慰問袋

定價七拾五錢
郵税金拾錢

醫學士 佐藤得齋著

美的衛生

定價金四拾錢
郵税金六錢

醫學士 々々木多聞著

再版 新化粧

定價金四拾錢
郵税金六錢

萬籟村著

紀行 天下泰平

定價四拾五錢
郵税金六錢

徳田秋聲著

小説 花たば

定價四拾五錢
郵税金六錢

萬朝報記者 茅原華山編纂

青年と詩吟

定價三拾五錢
郵税金四錢

泉鏡花著○清方喬

小説 誓之卷

定價七拾五錢
郵税金拾五錢

日高有倫堂編

基督教講壇集

定價七拾錢
郵税金六錢

茅原華山編纂

我一人

定價七拾錢
郵税金六錢

本居豊顯撰

紫文摘英

定價廿五錢
郵税金四錢

海老名彈正著

宗教々育觀

定價五拾五錢
郵税金八錢

鈴木秋子女史著

軍國の婦人

定價廿八錢
郵税金四錢

苦學社編輯

苦學の伴侶

定價三拾錢
郵税金四錢

横山筆助著

再版 成功したる催眠暗示術 應用自在

定價拾錢
郵税金四錢

山口先生序 シルレル原著 齊木仙醉譯

接神術

定價廿貳錢
郵税金四錢

泉鏡花著

小説ななもと櫻

定價四拾錢
郵税金六錢

齊木仙碎先生譯

トルストイ教訓小説集

定價拾錢
郵税金四錢

加藤直士譯

トルストイの
日露戦争觀

定價拾錢
郵税金四錢

高橋五郎著

杜伯品藻

定價拾五錢
郵税金六錢

蘆風秋元喜久雄譯

四
獨逸
詩粹
紅紛集

定價拾五錢
郵税金四錢

文學士 小原無絃譯

原文
對照
ハインズの詩

定價三拾錢
郵税金四錢

杉山先生書簡 黒澤辰三郎編

日本名家手簡

定價拾錢
郵税金六錢

文學士 小原無絃譯

原文
對照
シレーの詩

定價三拾五錢
郵税金四錢

泡鳴著

新體
詩集
悲戀悲歌

定價拾五錢
郵税金四錢

泡鳴著

新體
詩集
夕潮

定價拾五錢
郵税金六錢

細越夏村著

新體
詩集
靈筩

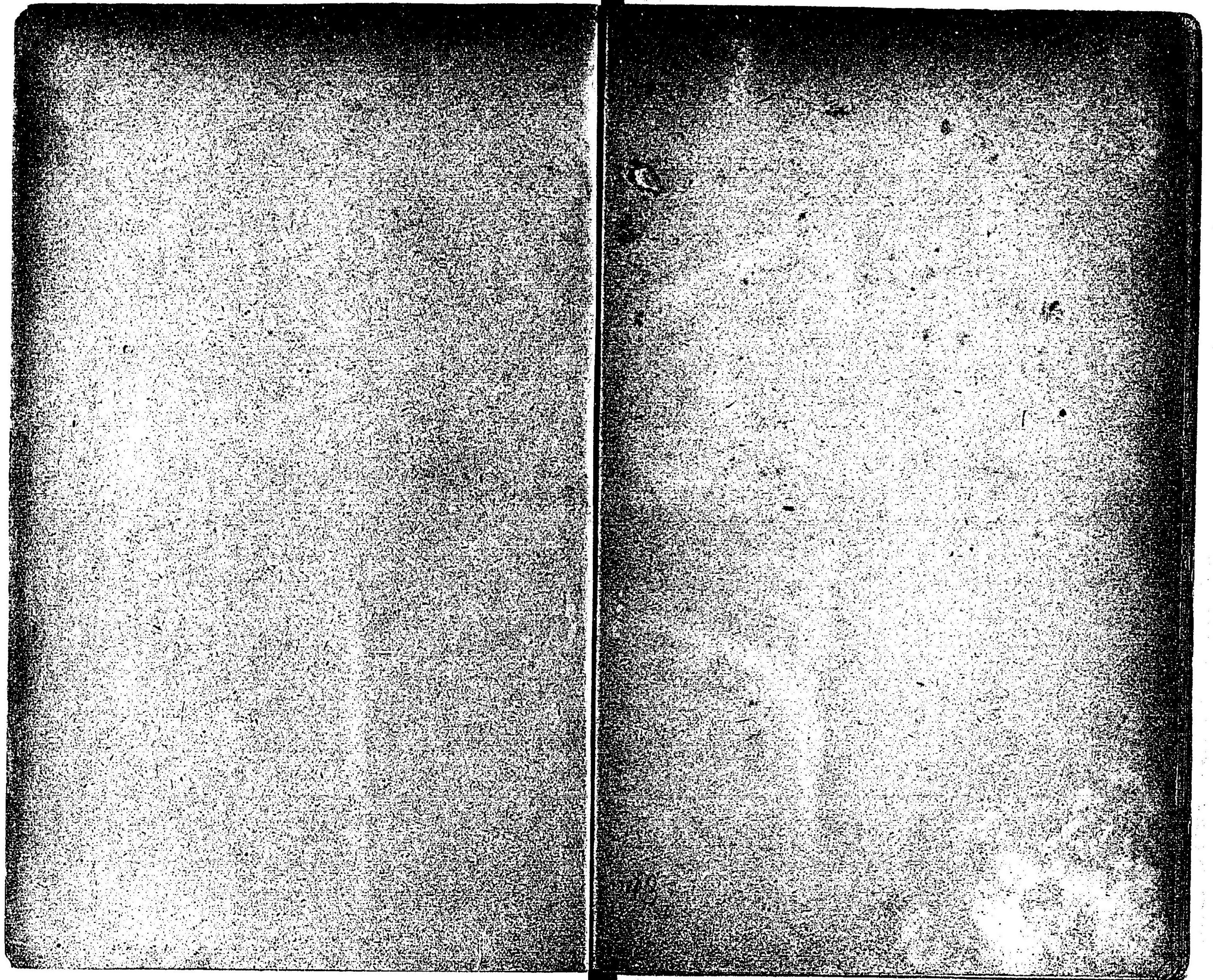
定價三拾錢
郵税金四錢

秋元蘆風譯

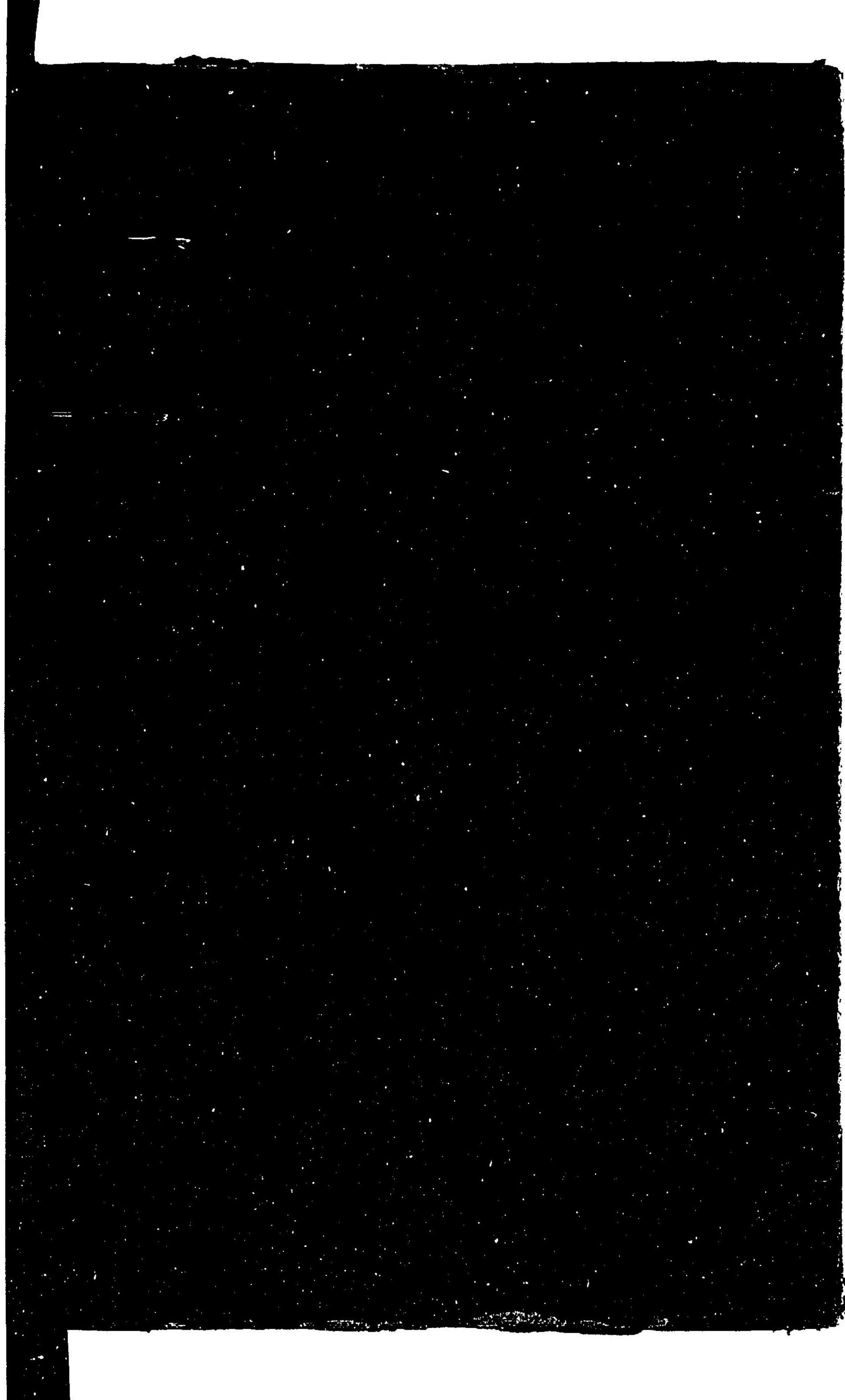
獨逸
詩野
葡萄

定價拾五錢
郵税金六錢

○原文對照○卷末に評註を附す



73
121



93
321

(M)

094724-000-8

93-321

怒涛

伊藤 銀月/著

M42

DBQ-2279



